

**平安京右京六条三坊一町跡・  
西院遺跡発掘調査報告書**

**2 0 2 1**

**株式会社 文化財サービス**





## 例 言

- 1 本書は、京都市右京区西院西寿町 21 番、21 番 1、21 番 2、21 番 4、22 番 1 において実施した平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書である。(京都市番号 20H416)
- 2 本調査は、有限会社トゥラストワン(京都市北区大將軍西鷹司町 23 番 5) による集合住宅建設事業に伴い実施したものである。
- 3 発掘調査は、事業者(開発原因者)からの委託により、株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)が実施し、山内伸浩(文化財サービス)が担当した。
- 4 現地における調査期間は、令和 3 年 1 月 29 日に開始し 3 月 3 日に終了した。
- 5 調査面積は 180 m<sup>2</sup> である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系第 VI 系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度) である。
- 7 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は山内が行い、編集は野地ますみ(文化財サービス)が行った。
- 9 現地での記録写真撮影は山内が行い、出土遺物の撮影は(株)写房楠華堂に依頼した。
- 10 本調査に係る全ての資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 11 発掘調査および整理作業の参加者は、下記のとおりである。
  - 〔発掘調査〕 菅田薫、上田智也、田中慎一、吉岡創平(以上、文化財サービス)  
発掘作業員(株式会社京カンリ)
  - 〔整理作業〕 望月麻佑、早見由槻、多賀摩耶、吉川絵里、神野いくみ、内牧明彦、  
上野恵巳、甲田春奈、若山美帆(以上、文化財サービス)
- 12 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ(株)に依頼した。
- 13 出土遺物の年代観は、主に下記の文献に依った。
  - 平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2019 年
  - 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 年
  - 『大宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編 - 』太宰府市教育委員会 2000 年
  - 森田勉「14～16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982 年
- 14 現地調査、整理作業において、下記の方々から多くの御教示、御指導をいただいた。  
記して感謝を表する次第である。(敬称略)
  - 國下多美樹(龍谷大学)、浜中邦弘(同志社大学歴史資料館)、奥井智子(京都市文化財保護課)

西暦

750 780 810 840 870 900 930 960 990 1020 1050 1080 1110 1140 1170 1200 1230

I期									II期						III期	
1段階			2段階			3段階			4段階			5段階		6段階		
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	
奈良時代	長 岡	平安時代											鎌倉時代			

西暦

1200 1230 1260 1290 1320 1350 1380 1410 1440 1470 1500 1530 1560 1590 1620 1650 1680

III期						IV期						V期			
6段階		7段階			8段階		9段階			10段階			11段階		
B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C
鎌倉時代				南北朝		室町時代						安土桃山	江戸時代		

### 平安京土師器編年に基づく時代区分（11段階Cまで）

（平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号 2019年(公財)京都市埋蔵文化財研究所 に基づく）

# 目次

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯と経過

1 発掘調査実施に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

## 第Ⅱ章 位置と環境

1 周辺の環境	6
2 周辺の既往調査	8

## 第Ⅲ章 発掘調査の成果

1 基本層序	12
2 検出遺構	13
条坊及びその関連遺構	13
耕作溝	25
ピット	26
3 出土遺物	26
溝01埋土下層出土遺物	27
溝01埋土上層出土遺物	30
溝01埋土上面出土遺物	33
溝02出土遺物	35
路面27出土遺物	35
溝03出土遺物	37
溝04出土遺物	37
溝11出土遺物	38
包含層出土遺物	38

## 第Ⅳ章 自然科学分析

## 第Ⅴ章 総括

1 条坊遺構について	49
2 路面の巷所化	50

## 図版目次

- 図版 1 遺構 1. 第1面調査後の調査区全景（真上から・上が北）  
2. 第1面調査後の調査区全景（真上から・上が西）
- 図版 2 遺構 1. 第2面調査後の調査区全景（真上から・上が西）  
2. 第2面調査後の調査区と周囲の景観（東側上空から）
- 図版 3 遺構 1. 溝01、耕作溝群の検出状況（西から）  
2. 第1面調査後の調査区南半（西から）
- 図版 4 遺構 1. 第1面調査後の調査区南半（北西から）  
2. 第1面調査後の調査区全景（南西から）
- 図版 5 遺構 1. 第1面調査後の調査区全景（南東から）  
2. 溝01、溝02、路面27完掘状況（北東から）
- 図版 6 遺構 1. 溝01、溝02、路面27、溝03、溝04完掘状況（北から）  
2. 第2面調査後の調査区全景（南西から）
- 図版 7 遺構 1. 溝01西端壁面埋土断面（東から）  
2. 溝01東端壁面埋土断面（西から）  
3. 溝01埋土断面（西側観察ベルト、西から）
- 図版 8 遺構 1. 溝01埋土須恵器壺M出土状況  
2. 溝01底面須恵器壺L出土状況  
3. 溝01埋土土師器甕出土状況
- 図版 9 遺構 1. 溝01の底面（東から）  
2. 路面27路面上の耕作溝群（南東から）
- 図版 10 遺構 1. 溝02、路面27礫敷き部（右）の検出状況（西から）  
2. 溝02完掘状況（東から）  
3. 溝02東端壁面埋土断面（西から）
- 図版 11 遺構 1. 路面27礫敷き部全景（西から）  
2. 路面27礫敷き部全景（東から）  
3. 路面27礫敷き部断割り断面（東から）
- 図版 12 遺構 1. 溝03、溝04完掘状況（西から）  
2. 溝03、溝04完掘状況（東から）  
3. 溝03、溝04西壁埋土断面（東から）
- 図版 13 遺構 1. P25の検出状況（東から）  
2. P25の埋土半裁状況（南から）  
3. 調査区西壁土層断面（北東から）  
4. 調査区東壁土層断面（南西から）
- 図版 14 出土遺物 1. 溝01下層  
2. 溝01下層
- 図版 15 出土遺物 1. 溝01下層

		2. 溝01下層
図版16	出土遺物	1. 溝01下層 2. 溝01上層
図版17	出土遺物	1. 溝01上面、溝02、包含層 2. 路面27
図版18	出土遺物	1. 溝03、溝04 2. 溝04
図版19	出土遺物	1. 溝01下層、溝01上層、路面27、包含層 2. 包含層

## 挿図目次

図1	調査地位置図 (1 : 20,000) .....	2
図2	調査地周辺図 (1 : 2,500) .....	2
図3	発掘調査経過写真 .....	3
図4	調査区地区割・基準点配置図 (1 : 150) .....	5
図5	平安京条坊図 .....	9
図6	既往地調査地位置図 (1 : 5,000) .....	9
図7	調査区断面図 (1 : 80) .....	14
図8	調査区断面図層名一覧 .....	15
図9	調査区第1面平面図 (1 : 100) .....	16
図10	調査区第2面平面図 (1 : 100) .....	17
図11	路面27・溝01・溝02・耕作溝平面図 (1 : 80) .....	19
図12	路面27・溝01・溝02断面図 (1 : 50) .....	20
図13	溝01・溝02断面図 (1 : 50) .....	21
図14	溝02・溝03・溝04・P25・P26実測図 (平面1 : 80・断面1 : 40) .....	22
図15	溝02・溝03・溝04断面図 (1 : 50) .....	23
図16	耕作溝断面図 (1 : 50) .....	25
図17	出土遺物実測図1 (1 : 4) .....	29
図18	出土遺物実測図2 (1 : 4) .....	31
図19	出土遺物実測図3 (1 : 4) .....	34
図20	出土遺物実測図4 (1 : 4) .....	36
図21	調査区西壁 樋口小路南側溝における花粉化石群集 .....	44
図22	調査区西壁 第7層における植物珪酸体含量 .....	45
図23	花粉化石写真 .....	47
図24	植物珪酸体写真 .....	48
図25	既往調査区検出遺構との関係 (1 : 2,000) .....	51

## 表目次

表1	周辺発掘調査の一覧	10
表2	遺構概要表	13
表3	遺物概要表	27
表4	出土遺物の点数とその割合	27
表5	出土遺物観察表	40
表6	花粉分析結果	43
表7	植物珪酸体含量	44

# 第 I 章 発掘調査の経緯と経過

## 1 発掘調査実施に至る経緯

令和2年(2020年)、有限会社トゥラストワンは、京都市右京区西院西寿町21番、22番地ほかにおいてマンション型集合住宅の建設を計画した。工事予定地は平安京の右京六条三坊域内に該当し、また西院遺跡の推定範囲内にも該当していたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「市文化財保護課」という)により、事前の試掘調査が実施された。この結果、平安時代の樋口小路南北両側溝と思われる遺構等が確認され、またこの下位に平安時代以前の何らかの遺構が存在する可能性が想定されたため、工事实施の前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとなった。

こうして本発掘調査は、有限会社トゥラストワンから株式会社文化財サービス(以下「文化財サービス」という)が委託を受け、令和3年1月22日から業務を実施する運びとなった。

## 2 発掘調査の経過(図3)

発掘調査は、器材搬入など諸準備の後、令和3年1月29日に開始し、同年3月3日に終了した。この間の延べ作業日数は20日間である。調査範囲は、建物基礎工事範囲及び試掘調査結果に基づき市文化財保護課が設定した逆L字形180㎡を対象とした(図2・4)。調査は先ず厚さ0.5m前後の現代盛土と、厚さ0.15m前後の旧耕土及び床土を重機掘削によって除去し、以後人力により調査区法面を整形した後、遺構精査、検出作業を進めた。また調査に先立ち、基準点測量と、座標方位に沿った4mピッチのグリッドを設定した。

平安期の遺構面と考えられた第1面(第6層上面レベル)を精査すると東西方向に延びる樋口小路の南北側溝(溝01・02)や路面が姿を現したが、明らかに時期が下るとされる多数の浅い南北溝が重なっていることが判明し、これらは耕作に伴う溝と推定された。また調査区の地山は、北半が硬質な砂礫層、南半は軟質なシルト質泥土であることが判明した。

2月8日には第1面の遺構検出作業が終了し、市文化財保護課の確認を受けた後、南北の耕作溝状遺構(溝05～溝23)から埋土掘削を開始した。その後溝01(樋口小路南側溝)、溝02(北側溝)、溝03、溝04(築地内溝)の順で埋土掘削を進めて行った。各遺構埋土掘削にあたっては、適宜土層観察ベルトを設定し、埋土の観察と記録を行った。

2月18日には第1面の遺構を完掘し、市文化財保護課の立会いを受け、第2面の調査方法についても指導を受けた。この段階で、第2面を覆う第6・7層は調査区の南半のみに広がり、北半は既に砂礫層の地山が露出した状況にあったが、これまでの調査で第2面における遺構の存在が不確実であったため、先ずは調査範囲をB～C区中間ラインより東と定め、状況を見ることとなった。第2面に見られた複数の黒茶褐色の遺構状プランについて、必要な個所に段下げや断ち割りを加えたが、明確な遺構は確認できず、遺物の出土も全く認められなかった。こうして2月24日に第2面調査を終え、市文化財保護課の最終確認を受け、全ての記録作業を行った







後、3月3日に調査区の埋戻し、レンタル器材の搬出を行い、全ての作業を終えた。

以上の調査期間中、本発掘調査の検証委員である國下多美樹、浜中邦弘両氏の現場検証を複数回受け、多くの指導、助言を賜った。

尚、今回の発掘調査では遺構、土層断面等の実測については、写真測量のほか手実測を併用した。また写真撮影機材は、35mm フルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm フィルムカメラ（白黒フィルム、カラーリバーサルフィルム）計3台を使用した。

### 3 測量基準点の設置と地区割り

VRS 測量（仮想基準点測量）により、調査区周辺に基準点 Y - 1、Y - 2、Y - 3 を設置した。各基準点の測量成果（座標値・標高）は以下のとおりである。

Y - 1 : X = - 111,172.367 Y = - 24,719.300 H = 24.053m

Y - 2 : X = - 111,191.623 Y = - 24,735.191 H = 23.867m

Y - 3 : X = - 111,191.337 Y = - 24,719.462 H = 23.868m

上記基準点から算出した座標値に基づき、調査区内に 4 m 四方のグリッドを設置した。座標 Y 軸にアルファベットを西から東に A、B、C、D・・・、X 軸に北から南に 1、2、3、4・・・の順に付し、両者の組み合わせをグリッド名とした。このグリッド名は各座標の北西隅の交点である（図 4）。

### 4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業と報告書作成を行った。整理作業は、写真、図面整理と出土遺物の整理を並行して進めた。遺物の整理では、洗浄、接合、復元、注記、実測、トレース、写真撮影などを実施した。報告書の執筆は山内伸浩、編集作業は野地ますみが担当した。



1. 調査前状況（北西から）



2. 京都市文化財保護下立会による調査区設定



3. 重機による盛土掘削作業



4. グリッド杭設置作業



5. 発掘作業風景（西から）



6. 発掘作業風景（土器検出作業）



7. 浜中検証委員による現場指導



8. 調査完了後の埋戻作業（南から）

図3 発掘調査経過写真

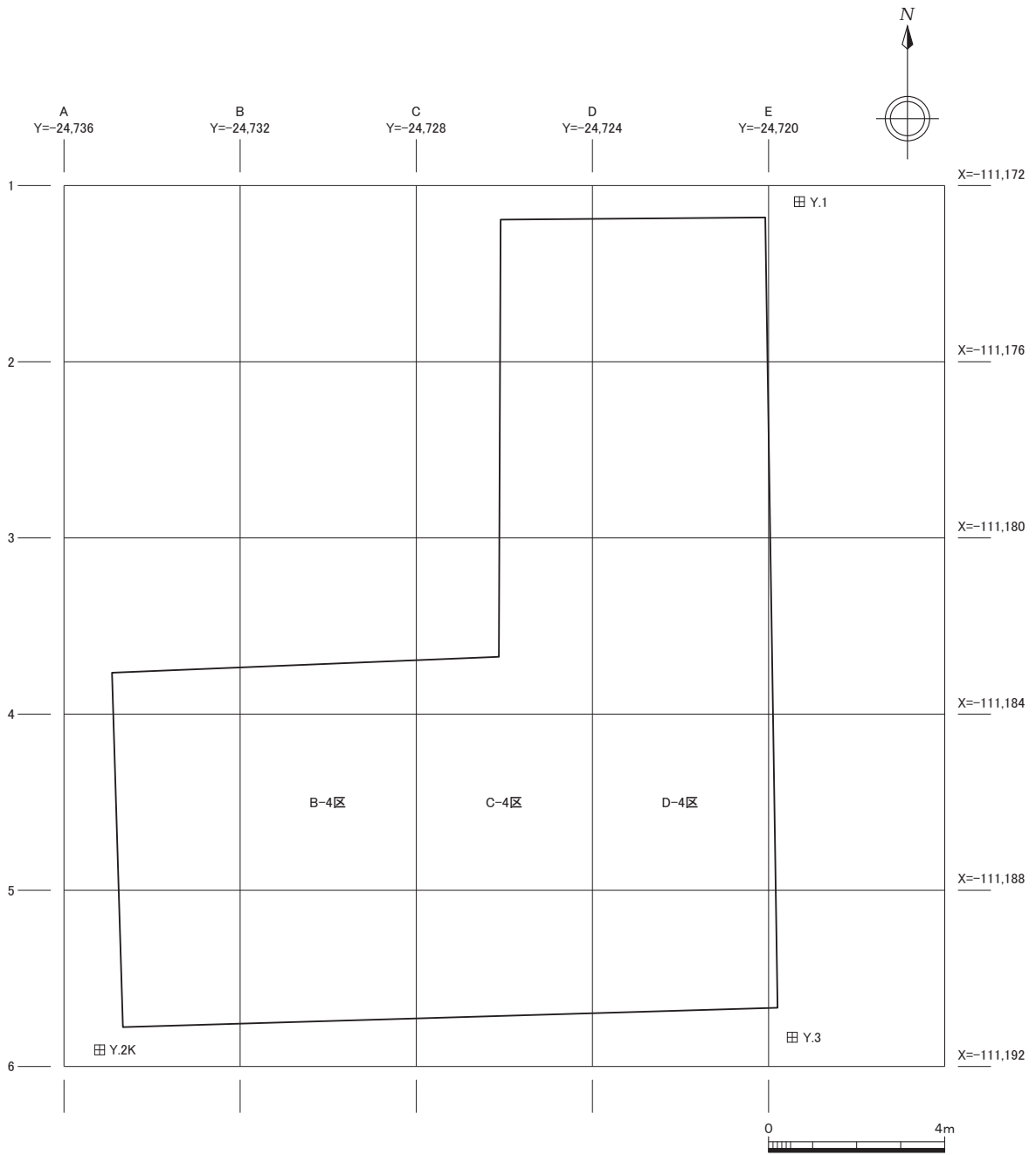


図4 調査区地区割・基準点配置図 (1 : 150)



## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 周辺の環境（図5・6）

今回の調査地は、京都盆地の中央西寄り、鴨川と桂川に挟まれた場所に位置する。平安京の条坊では右京六条三坊一町～二町地内にあたり、四行八門制では、一町内は東三行・北八門、二町内は東三行・北一門に該当する（図25）。北はかつての五条大路、東は道祖大路、西は宇多小路に囲まれ、調査区内に樋口小路が東西に走ると推定される場所である。またこの地は弥生時代を主体とする集落遺跡・西院遺跡の推定範囲とも重なっている。

平安京右京域は紙屋川（天神川）などの小河川が多く存在するため、複数の扇状地帯と自然堤防帯、後背湿地が形成され、かつては洪水氾濫が頻発する湿潤な場所であった。平安京以前の遺跡はこうした扇状地上や後背湿地内の微高地上に分布する。西院遺跡は阪急西院駅南側一帯に広がる集落遺跡で、過去には弥生時代中期の竪穴住居の可能性のある遺物包含層などが検出されている。この西に隣接する西京極遺跡は、東西650m、南北700mにも及ぶ大規模な集落遺跡で、これまでの調査で弥生時代中～後期の溝、方形周溝墓、竪穴住居、古墳時代中～後期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物などが検出されている。特に2006年の西院清水町地内での調査では、炉状遺構を伴う弥生時代後期の住居跡から鉄滓や鉄片、ガラス小玉などが出土し、鉄器、玉類を作る工房跡であるとして注目された。また2018年に西院月双町で行われた調査では、弥生時代中期に掘削された環濠や溝、土器棺墓なども検出されている。一方、西院遺跡の東方約400mの京都市立病院構内（壬生高田町）の調査では、北西から南東方向に掘られた幅約2mのV字溝や弥生時代後期～古墳時代の土器、直線刃半月形の石庖丁の出土が報告されている。

奈良時代、西院遺跡周辺は山城国葛野郡に属したが、先の西京極遺跡では8世紀代の総柱建物跡や白鳳期の瓦がカマドに使用された竪穴住居などが見つかっており、一帯は葛野郡における中心集落と考えられ、近辺には郡役所などの公的施設が存在した可能性も指摘されている。

9世紀末の平安遷都以降、右京域では小河川の氾濫を抑えるため、河川の掘削、分流工事が進められたと考えられており、これまでの調査でも道路側溝の拡幅に留まらず、道祖大路、野寺小路、宇多小路などが人為的に河川化されていることが判明している。11世紀以降、平安京を取り巻く鴨川、桂川流域では、河床の低下により段丘化が進み、氾濫原が減少した結果、都市化や耕地の拡大をもたらしたが、紙屋川流域での段丘化は進まず、氾濫原は広がったままであったため、右京域は宅地としての活用がなされなくなり、完全に衰退したと考えられている。

今回の調査地における平安時代前期の具体的な土地利用を示す史料は見られないが、北東約750mの地（右京四条二坊）には、淳和天皇（786～840年）の邸宅、後院である淳和院（別名「南地院」「西院」）が存在し、この地一帯も西院と呼称されるようになった。また右京七条三坊・四坊には仁明天皇（810～850年）の皇子・本康親王が開発したとされる荘園・侍従池領が成立し、後には藤原摂関家において伝承された。平安時代後期になると、周辺には左大臣源俊房領、天台座主良真領なども成立するようになった。さらに平安時代後期から中世にかけて、西院小泉庄と

いう荘園が存在したことが、「拾芥抄」西京図や「東寺観智院文書」の記述から知られる。小泉庄は飛地ながら総計 57 町と広大なもので、右京四条二坊、五条二坊～四坊、六条二坊、三坊（十三～十六町）、四坊辺りに広く展開していた。小泉庄は長く摂関家や門跡寺院の所領であったが、江戸時代初期の元和年中に行われた京都所司代による検地によれば、多くの寺社や堂上家により 158 箇所の所領に分割されてしまっていることが判る。

西院では 16 世紀中頃、洛中唯一の戦国城郭である小泉城が築かれた。その場所は本調査地の北約 800 m、現在の西大路四条交差点西側付近（阪急西院駅の西）と推定されている。築城年代は明らかではないが、天文年間には三好長慶が細川晴元に対抗する為、洛中の抑えとして城を修築し小泉秀清を城将としている。三好長慶没落後、秀清は松永久秀に従ったが、永禄 9（1566）年、三好三人衆の攻撃を受け小泉城は落城したと伝わる。

戦国末期の天正 19（1591）年には、天下統一を果たした豊臣秀吉により京都市街を取り囲む長大な土塁・御土居が築造された。しかし西院の地はその外方である「洛外」に置かれたため、一帯の市街化は進まず、農業地帯として近代まで至ることとなる。

#### 〈引用・参考文献〉

伊藤淳史「京都盆地の弥生集落」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1992 年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1995 年

河角龍典「平安京における地形変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第 42 号日本文化財科学会 2001 年

「平安京右京六条二坊 1」『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993 年

「平安京右京二条三坊 1」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998 年

「平安京右京三条二坊」『平成 10 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000 年

『平安京右京四条三坊十一町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2013 年

『平安京右京六条三坊六町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004 年

『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007 年

『平安京右京六条三坊 平安京跡研究調査報告第 20 輯』（財）古代学協会 2004 年

『平安京右京六条四坊七町跡・西京極遺跡』（株）四門 2019 年

『平安京提要』（財）古代学協会・古代学研究所編（株）角川書店 1994 年

## 2 周辺の既往調査（図6・表1）

今回調査を行った平安京右京六条三坊一町跡地内における発掘調査例はこれまで例がないが、南東に近接した二町跡では、2003年マンション建設に伴い計450㎡の発掘調査が行われている（以下特に断りの無いものについては、全て京都市埋蔵文化財研究所による調査）。ここでは、北側に設定したトレンチ（1区）から樋口小路南側溝が検出されており、この溝はある段階で水量調整のため拡幅されたと推定されている。南調査区（2区）では、平安時代前期の宅地関連遺構がみられ、掘立柱建物3棟、柵列2基、井戸1基などが検出されている（調査1）。

四町跡では、これまで6回に亘る発掘調査が行われている。何れも民間会社の社屋や工場建設に伴うものである。1981年の調査では平安前期から中期の掘立柱建物2棟、柵列1基、溝1本などが検出されている。建物のうち1棟は身舎の4面に庇をもつ南北棟であった（調査2）。1986年の調査では古墳時代の湿地状落込み、自然流路も検出されたが、遺構の大半は平安時代前期の9世紀代に収まるもので、掘立柱建物11棟、門2棟の他、柵、溝、井戸、土壇などが見られる。建物は重複関係をもつものが多く、頻繁に建て替えが行われたと推定されている。また2本の溝で区画された幅3m程の町内区画道路と思われる遺構も検出されている。さらに池跡の存在から、9世紀後半の段階で池をもつ大規模な宅地が広がっていたと考えられている（調査3）。1989年の調査では、平安時代前期の掘立柱建物6棟、柵列1基、土壇などが検出されている。掘立柱建物には東西棟で東・西・南に庇をもつものも認められる。また土師器皿が幾重にも重なった土器埋納遺構が検出されている。この土壇内からは完形の須恵器小壺6個も出土している（調査4）。1993年、1995年の調査は、古代文化調査会が実施したものである。平安時代の遺構としては、掘立柱建物、塀のほか、道祖大路の内溝、楊梅小路の路面などが検出されている。尚、道祖大路西築地の宅地内溝からは兵衛・衛門府の次官を指す「佐」銘の墨書土器も出土している（調査5・6）。2019年度の調査では、9世紀前半の土壇、落込み遺構、9世紀中頃の掘立柱建物1棟、塀2基、溝などの遺構が検出されている。建物は身舎の北と東に庇をもつ南北棟である。東西方向に掘られた溝は、東四行北二門、三門の推定ライン近くに存在するため、門境の溝である可能性が指摘されている（調査7）。

六町跡では、2004年に民間会社施設建設に伴い調査が行われている。ここでは平安時代前期の掘立柱建物2棟、覆屋を伴う井戸1基、馬代小路東築地の内溝1基、平安時代後期の掘立柱建物1棟、南北流路1本、溝3本などが検出されている。南北流路は、馬代小路路面の位置に重なることから、人為的に掘削された川と考えられている。また井戸内からは斎串や「葛井福万呂」「檜□阿古□□」と名が墨書された男女の木製人形などが出土しており、井戸での祭祀を物語る遺物として注目された（調査8）。

八町跡では、1990年、工場建替え工事に伴い北辺部の調査が行われている。ここでは、古墳時代の土壇、平安時代前期～中期の掘立柱建物5棟、柵列などが検出されている。建物は、軸線が真北より西に振れるものから、真北のもの、真北から東に振れるものへと順に新しくなっていると推定されている。調査区東側で検出された南北の柵列は、1町を東西に分割する柵であった可

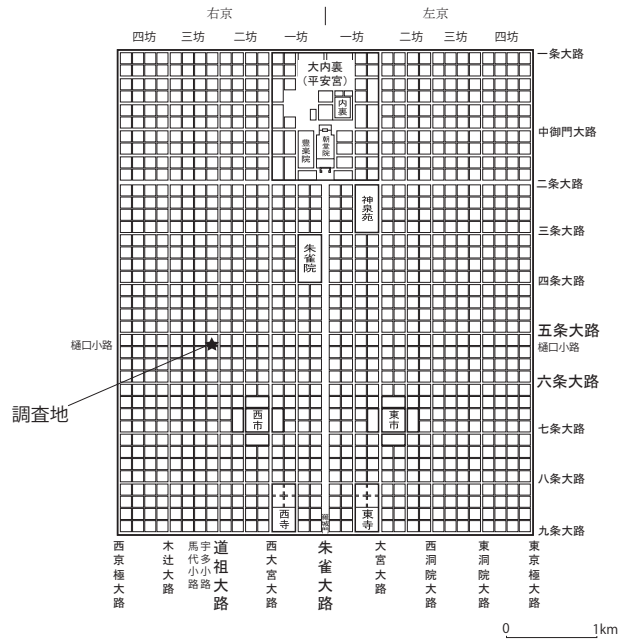


図5 平安京条坊図

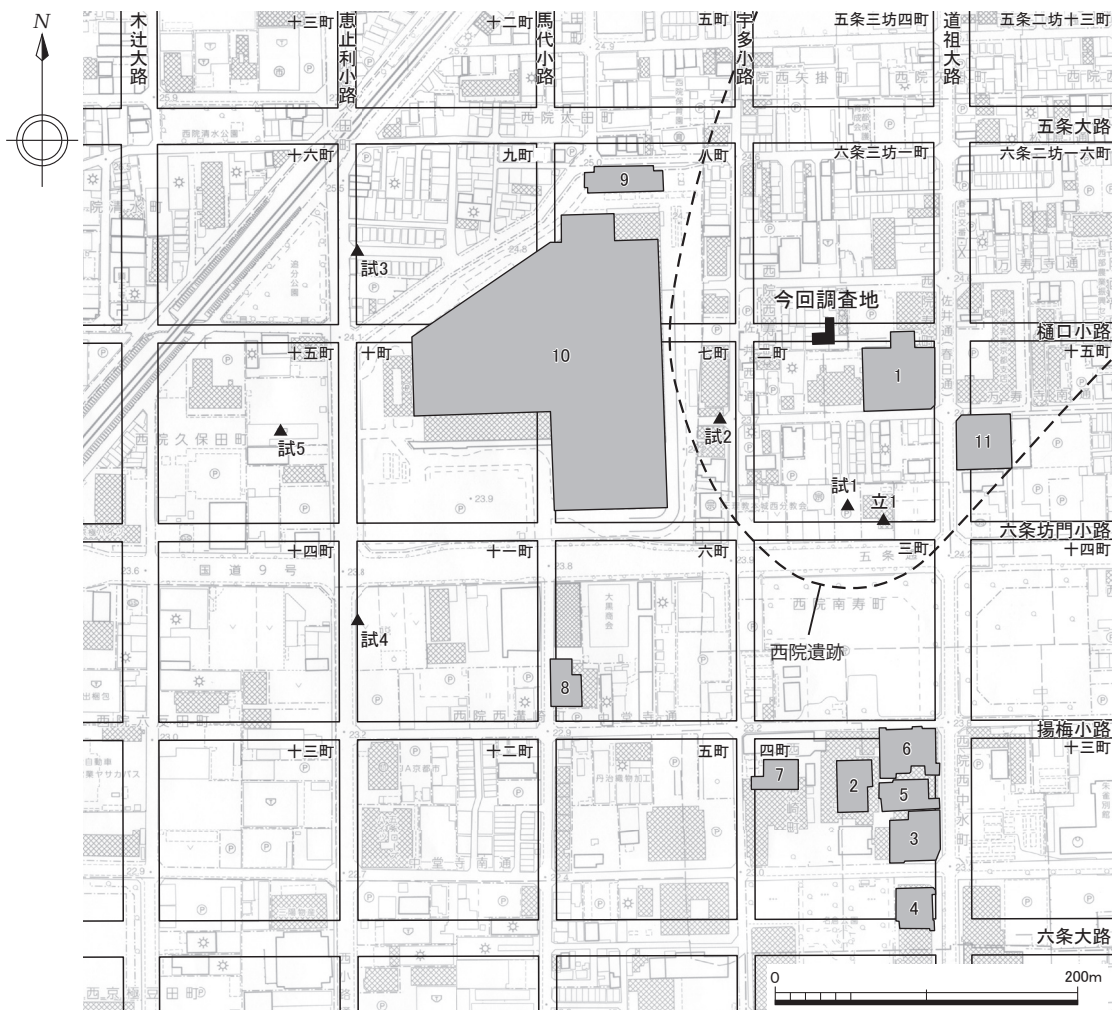


図6 既往調査地位置図 (1 : 5,000)



表 1 周辺発掘調査の一覧

番号	条坊 (右京)	調査年度	主要な遺構		文 献
			平安時代	その他の時代	
1	六条三坊 二町	平成 15 年度 (2003)	平安時代前期：建物、井戸 土坑、樋口小路南側溝	中世：溝 近世：耕作溝、土 坑	『平安京右京六条三坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003 - 7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004 年
2	六条三坊 四町	昭和 56 年度 (1981)	平安時代前期～中期：建物 柵列、溝		『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983 年
3		昭和 61 年度 (1986)	平安時代：建物、柵、溝 井戸、土坑	古墳時代：流路、 落込	『昭和 61 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989 年
4		平成元年度 (1989)	平安時代：建物、柵 土坑 (土器埋納遺構)	鎌倉時代以降：耕 作溝	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994 年
5		平成 5 年度 (1993)	平安時代：建物、落込 道祖大路内溝	中世以降：耕作溝	『平安京右京六条三坊 ローム株式会社社屋新築に伴う調査』古代文化調査会 1998 年
6		平成 7 年度 (1995)	平安時代：建物、堀 楊梅小路路面	中世以降：耕作溝	
7		令和元年度 (2019)	平安時代前期：建物、堀、 溝 柱穴列、土坑、落込	近世：耕作溝	『平安京右京六条三坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2019-8 (公財)京都市埋蔵文化財研究所 2020 年
8		六条三坊 六町	平成 16 年度 (2004)	平安時代前期：建物、井戸 馬代小路内溝 平安時代後期：建物 流路 (馬代小路)	中世以降：耕作溝
9	六条三坊 八町	平成 2 年度 (1990)	平安時代前期～中期：建物、 柵列	古墳時代後期：土 坑 中世以降：耕作溝	『平成 2 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994 年
10	六条三坊 七～十町	平成 12・13 年 度 (2000～ 2001)	平安時代：建物、柵列、門 池、樋口小路、馬代小路、 流路 木棺墓	縄文時代：流路、 土坑 古墳時代：総柱建 物、流路 中世以降：建物、 耕作溝	『平安京右京六条三坊 平安京跡研究調査報告書第 20 輯』(財)古代学協会 2004 年
11	六条二坊 十五町	昭和 63 年度 (1993)	平安時代：道祖大路東側溝 柱穴列 (東築地基礎) 流路 (道祖大路)、溝	中世：耕作溝	『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
試 1	六条三坊 二町	平成 27 年度 (2015)	平安時代？：南北溝 (東二・ 三行の区画溝か？)		『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 27 年度』京都市文化市民局 2016 年
試 2	六条三坊 七町	平成 15 年度 (2003)	平安時代前期：東西溝		『京都市内遺跡立会調査概報 平成 15 年度』京都市文化市民局 2004 年
試 3	六条三坊 九町	平成 12 年度 (2000)	平安時代？：南北溝 (恵止 利小路か？)		『京都市内遺跡調査報告 平成 12 年度』京都市文化市民局 2001 年
試 4	六条三坊 十一町	令和元年度 (2019)	平安時代前期：恵止利小路 東側溝		『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020 年
試 5	六条三坊 十五町	平成 28 年度 (2016)		室町時代：包含層、 旧天神川古段階 大正末期～昭和初 期：旧天神川新段 階	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 28 年度』京都市文化市民局 2017 年
立 1	六条三坊 二町	昭和 61 年度 (1986)	平安時代前期：六条坊門小 路北側溝		『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局 1987 年



能性も指摘されている（調査9）。

さらに2000年～2001年にかけて、七・八・九・十町で大型商業施設建設に伴う大規模な発掘調査が（財）古代学協会によって行われている。ここでは1町や半町を占める大規模な邸宅跡や条坊関連遺構が多く検出されている。掘立柱建物、池跡、流路、樋口小路や馬代小路に伴う遺構、町内道路などの遺構が見られる。また9世紀代には樋口小路、馬代小路の路面の一部が開削され河川化していることも判明している。このほか「讃岐国荏田郡白米」などと墨書された木簡や人形、獣骨などの祭祀関連遺物が多く出土している。まとまった祭祀遺物の出土例は平安京西市以外あまり例がなく、当地が平安京でも祭祀に関わる重要な場所であることが明らかになった（調査10）。

この他、今回の調査区に近接した調査事例として、右京六条二坊十五町の調査がある。これは1993年に工場建設に伴い実施されたもので、平安時代の道祖大路東側溝や東築地の基礎と考えられる柱穴列、南北方向の河川などが検出されている。河川は道祖大路路面の位置に該当し、平安時代中期には人為的に開削され河川化していたと推定されている（調査11）。

## 第三章 発掘調査の成果

### 1 基本層序 (図7・8)

調査開始前の対象地は、かつて存在した建物撤去後に地均しされ、平坦な地形を呈していた。標高は調査区北端で約 24.05m、南端で約 23.87m を測り、地表は北から南に向かってごく僅か下降していた。

調査区の基盤(地山)は、北半域と南半域では様相が大きく異なり、北半(C-1・2区、D-1・2区付近)での基盤は硬質な砂礫層(第9層)、南半(A-4・5区、B-4・5区、C-4・5区、D-4・5区付近)での基盤は軟質な粘土層(第7・8層)が主体となっている。

これは、かつて北半域が微高地状、南半域が低湿地状を呈していたことを示すものであるが、基盤層上位に堆積する第1層から第5層までの土層については、全域でほぼ共通していた。以下、基本層序の概要を述べる。

**第1層** 調査区全域を覆う現代の盛土で、厚さ 0.25～0.5m を測る。炭ガラを多く含む脆弱で粘性の無い褐灰色砂礫土(10YR4/1)を主体とし、レンガ、コンクリート片、近・現代の陶磁器片を包含する。一部で第2～3層レベルに達するような掘削坑(ゴミ穴)と思われる攪乱も見られたが、これらも本層に含めている。

**第2層** 近現代の耕作土で、黄灰色有機土層(2.5Y5/1)である。土質は軟質で若干の粘性をもち、木炭粒が多く礫は少ない。近現代の陶磁器片を少量包含する。良く残る部分は厚さ 0.2m 前後を測るが、調査区東側では削平により認められない箇所も広く存在する。

**第3層** 灰黄褐色シルト土層(10YR6/2)で、厚さ 0.1～0.15m を測る。良く締まった土質で粘性があり礫は少ない。微細なマンガン、褐鉄鉱、木炭粒を少量含む。遺物の包含は少ない。

**第4層** 灰褐色シルト土層(7.5YR5/2)で、粘性があり良く締まった土質である。マンガンや褐鉄鉱を多く含み礫は少ない。厚さ 0.1～0.15m を測る。主に平安期の遺物を包含する。

**第5層** にぶい褐色シルト質土層(7.5YR5/4)で、厚さ 0.05～0.15m を測る。上層に比して有機分やマンガンが多く、小礫、木炭粒を少量含む。締まりのある土質で、主に平安期の遺物を包含する。第6層上面で検出した耕作溝に関連する耕土の可能性がある。

**第6層** にぶい黄橙色シルト土層(10YR6/4)で、厚さ 0.1～0.2m を測る。本層上面が調査区南半域における第1遺構検出面に相当する。粘性があり良く締まる土質で、マンガン、褐鉄鉱を多量に含み全体に赤っぽい色調を呈する。木炭粒や径 2～3cm の小円礫をごく僅かに含む。遺物は本層上面レベル付近から少量出土する。

**第7層** 灰色粘土層(N4/0)で、調査区南半域西半の基盤上層である。グリッド杭 C-4～C-5 ライン付近から堆積が見られ、徐々に西に向かって厚みを増し、調査区西端では厚さ 0.2～0.35m を測る。粘性が強く礫を殆ど含まない。有機物が多く暗い色調を呈する。マンガンは本層の上半に集積する。遺物の出土は認められない。本層の土質や色調から、平安時代以前の水田耕作土であることも想定されたが、プラント・オパール分析結果では水田の存在は否定されている(第四章・

自然科学分析)。湿地状地形を成因とする自然堆積層と考えられる。

**第8層** 灰白色粘土層(2.5Y7/1)で、調査区南半域の基盤下層(地山)としたものである。厚さ0.2m前後を測る。本層上面が遺構検出面第2面に相当する。きめ細かな粘土で粘性があり締まりをもった土質である。調査区東半では円礫を含むが、西半では礫を殆ど含まない。随所に黒褐色の有機質粘土(2.5Y3/2)をマーブル状に含んでいる。

**第9層** 褐灰色砂礫土層(10YR4/2)である。調査区北半域における基盤層(地山)であり、遺構検出面である。径1～10cmの円礫を主体とし非常に硬く締まる。一部褐鉄鉱、マンガン粒を含み赤く発色した(7.5YR5/4)箇所が認められる。河川の氾濫により形成された自然堆積層である。

**第10層** 第8層直下に堆積する灰色砂質シルト土層(N 4/0)で、厚さ0.1m前後を測る。砂分が多く粘性は弱い土質である。礫を含まずマンガン粒を少量含む。

**第11層** 第10層直下に堆積する砂礫質土層で、にぶい黄褐色(10YR 5/4)を呈する。径2～10cmの円礫を主体とし硬く締まり、細砂が礫間を埋める。マンガン粒、褐鉄鉱を多く含む。河川の氾濫等による自然堆積層である。

## 2 検出遺構

今回は、京都市文化財保護課が行った事前の試掘調査の所見に基づき、平安時代を想定した第1面、それ以前を想定した第2面の2面調査を実施した。しかし結果的には第2面(第8層上面)における遺構、遺物は検出されず、遺構は全て第1面から検出したものである。第1面とした遺構面の土層は、調査区南半と北半では状況が大きく異なり、南半では第6層上面(にぶい黄橙色シルト土層)、北半では第9層上面(褐灰色砂礫土層)で、その境はC-3区、D-3区付近にある。検出した遺構には、樋口小路と推定される路面及び側溝などの条坊遺構、築地の内溝、耕作溝、ピットがある。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代前期	路面27(樋口小路)、溝01(樋口小路南側溝)、溝02(樋口小路北側溝)、溝03、溝04	路面27、溝01・02は樋口小路に関する条坊遺構
平安時代後期	溝05～溝23	耕作溝
近代	Pit26	
不明	Pit25	

### 条坊及びその関連遺構

調査区は平安京右京六条三坊一町及び二町のごく一部に該当し、一町内における四行八門制では東三行・北八門となる。条坊遺構には、樋口小路に関連する遺構として南北両側溝と路面がある。また築地遺構は検出できなかったが、その内溝と思われる遺構を検出した。

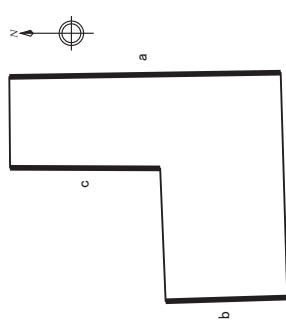
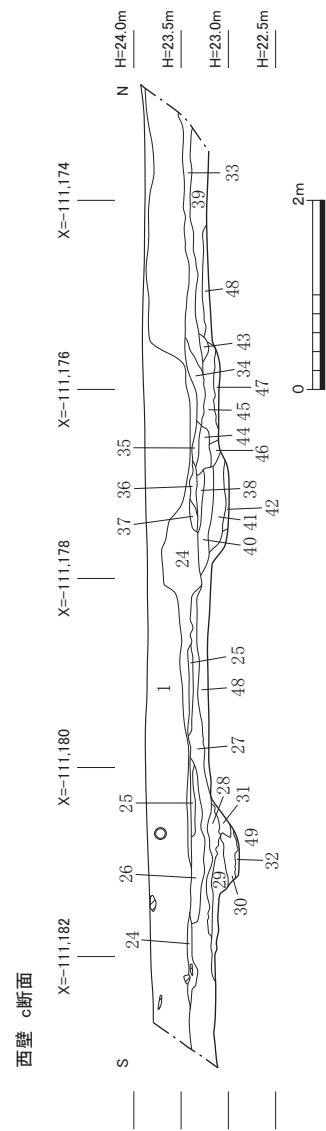
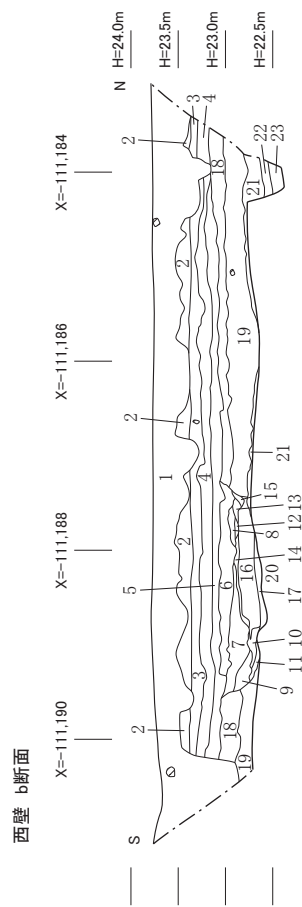
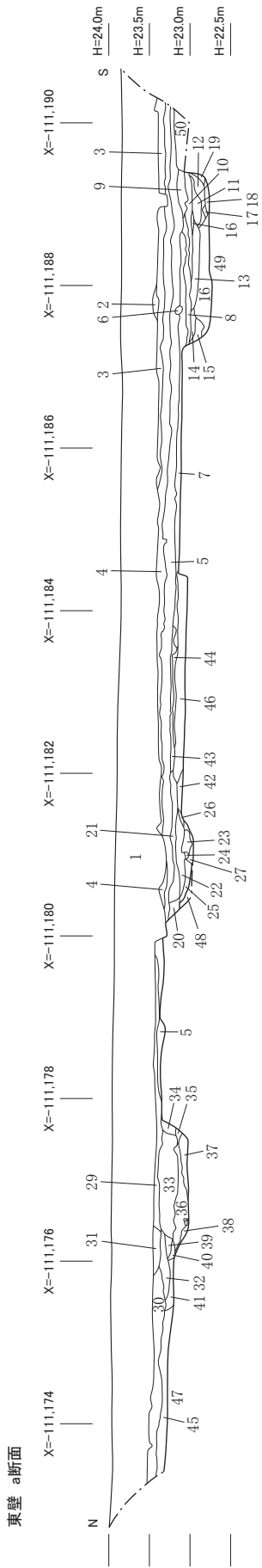


图7 調査区断面図 (1 : 80)

1	10YR4/1褐灰色土 脆弱な現代盛土 近・現代陶磁器・レンガ・コンクリート含 炭ガタ多量含 [第1層]	
2	10YR5/1褐灰色有機土 軟質 近・現代陶磁器含 耕作土 [第2層]	
3	7.5YR6/2灰褐色シルト 粘性あり 縮まりあり 礫少量含 鉄・マンガ、木炭含 耕作土床土 [第3層]	
4	7.5YR6/3にぶい褐色シルト 粘性あり 縮まりあり 礫少ない 鉄・マンガ、斑状含 [第4層]	
5	7.5YR6/2にぶい褐色シルト 粘性あり 縮まりあり 礫少量含 鉄・マンガ、斑状含 [第5層]	
6	10YR6/1褐灰色粘土 粘性あり 均質 有機分あり 木炭混	
7	7.5YR5/1褐灰色シルト 有機分含 φ1cm程の小礫含 鉄・マンガ、含 やや暗く木炭粒含	
8	10YR5/1褐灰色シルト 粘性強い 縮まりあり φ1cm程の礫含 φ1~2cmの木炭粒含	
9	10YR4/1褐灰色シルト 粘性あり 縮まりあり 鉄・マンガ、少量 木炭粒含	
10	10YR4/2灰褐色シルト 粘性強い よく縮まる 鉄・マンガ、少量 木炭粒含	
11	10YR3/2黒褐色有機土 粘性強い 縮まりあり 均質 有機分多 粘土質	
12	10YR2/2黒褐色砂質シルト 軟質 砂分を多く含む マンガン少量含 木炭粒含	
13	10YR3/2黒褐色有機土 小礫、砂粒含	[溝01埋土]
14	7.5YR5/1褐灰色シルト 粘性あり 縮まりあり 鉄・マンガ、斑状少量含	
15	7.5YR4/1褐灰色シルト 粘性あり 縮まる 有機分多 砂粒含 鉄・マンガ、斑状含	
16	10YR4/1褐灰色砂礫 脆弱 有機分含 φ5mm~2cmの円礫と砂の混含	
17	10YR3/1黒褐色砂質シルト 粘性弱い 有機分多い	
18	10YR5/2灰褐色有機土 軟質 有機分少量含 砂礫含	
19	10YR3/2黒褐色有機土 有機分少ない、鉄・マンガ、含	
20	10YR5/1褐灰色有機土 均質 木炭粒少量含 鉄・マンガ、集積	
21	10YR5/1褐灰色有機土 均質 木炭粒少量含 鉄・マンガ、集積	
22	10YR4/1褐灰色有機土 粘性あり 縮まりあり φ1cm以下の小円礫含	
23	10YR5/2灰褐色シルト 粘性あり 砂礫多量含 木炭粒含	
24	10YR4/1褐灰色砂質シルト 粘性あり 縮まりあり 砂分多	
25	10YR4/1褐灰色砂質シルト 粘性あり 縮まりあり φ2cm以下の円礫多量含	
26	10YR5/2灰褐色シルト 粘性あり 縮まりあり マンガン粒少量含 地山の再堆積	
27	10YR6/2灰褐色砂礫 やや脆い 地山の再堆積	
28	10YR4/1褐灰色砂礫土+7.5YR5/4にぶい褐色砂礫土 φ3cm以下の円礫主体 鉄・マンガ、含	[溝02埋土]
29	2.5Y6/2灰褐色砂礫シルト 軟質 砂分・礫含 鉄・マンガ、斑状含	[第4層相当]
30	2.5Y6/2灰褐色砂礫シルト 軟質 砂分・礫含 鉄・マンガ、斑状含	
31	10YR5/1褐灰色有機土 小礫多、耕作土 [境乱]	
32	2.5Y6/2灰褐色砂質土+7.5YR5/6明褐色砂質土 φ1cm以下の小礫僅かに含 鉄・マンガ、含	
33	7.5YR6/6褐色シルト 粘性あり 縮まりあり φ2~3cmの円礫少量含 鉄・マンガ、木炭粒含	
34	7.5YR6/1褐灰色シルト 粘性ややあり 縮まる 礫少ない 鉄・マンガ、少量含	
35	7.5YR6/1褐灰色砂土 有機分少量含 φ1~2cmの円礫含 地山の再堆積	
36	10YR5/1褐灰色シルト 粘性強くあり 縮まりあり 有機分あり	[溝03埋土]
37	10YR5/1褐灰色シルト 小礫多量含	
38	7.5YR5/1褐灰色砂礫シルト 縮まりあり φ2~3cmの礫含	
39	10YR5/1褐灰色シルト 粘性あり よく縮まる 僅かに砂分あり マンガン、斑状含	
40	10YR4/1褐灰色砂質シルト 砂分多、有機分多 マンガン、斑状含	
41	2.5Y5/1黄灰色シルト よく縮まる φ1cm以下の円礫含	[溝04埋土]
42	7.5YR5/1褐灰色砂礫土 礫集積し固く縮まる [地山]	
43	7.5YR4/1褐灰色砂礫シルト 縮まりあり φ1~2cmの円礫含	
44	7.5YR4/1褐灰色砂礫シルト 縮まりあり φ1~5cmの円礫含	
45	10YR5/3にぶい、黄褐色シルト φ1~3cmの円礫含 マンガン、斑状含	
46	10YR6/1褐灰色砂質土 軟質でマンガ、僅かに含 きめ細か [地山]	
47	10YR4/2灰褐色砂礫 固く縮まる φ1~3cmの円礫主体 [地山・第9層]	
48	10YR4/1褐灰色砂礫土 固く縮まる φ3cm以下の円礫主体 [地山]	
49	10YR7/2にぶい、黄褐色シルト [地山]	
50	7.5YR5/4にぶい、褐色シルト 鉄・マンガ、集積	

図8 調査区断面図層の一覧

1	10YR4/1褐灰色土 現代盛土 [第1層]	
2	2.5Y5/1黄灰色有機土 礫少ない、近代陶磁器片等含 木炭多い、耕作土 [第2層]	
3	10YR6/3にぶい、黄褐色シルト よく縮まる 礫少ない マンガン、含 木炭粒少量含 床土 [第3層]	
4	7.5YR5/2灰褐色シルト 粘性あり 縮まりあり 礫少ない 鉄・マンガ、多い [第4層]	
5	7.5YR5/4にぶい褐色シルト 粘性強い よく縮まる 礫多し 木炭粒少量含 [第5層]	
6	N4/0灰色シルト(粘土) 粘性強い、均質 有機分多し マンガン、少ない 木炭粒含	
7	10YR4/1褐灰色シルト 粘性強く縮まる φ5mm以下の礫僅かに含	
8	10YR5/2灰褐色砂質シルト 粘性強い 有機分多し 礫少ない 木炭含	
9	10YR4/1褐灰色砂質シルト 粘性あり 縮まりあり φ3cm程の礫少量含 木炭含	
10	10YR3/1黒褐色砂質シルト 粘性あり 縮まる 有機分多し 小礫僅かに含	
11	10YR2/1黒褐色砂質シルト 粘性ややあり きめ細か、礫含まず 木炭粒含	
12	10YR3/1黒褐色砂質土 粘性弱い、きめ細か、有機分多し	
13	10YR4/2灰褐色砂質シルト 粘性あり 縮まりあり マンガン、少量含	
14	10YR3/2黒褐色砂質土 脆いが縮まりあり 有機分多し	
15	2.5Y2/1黒褐色砂質シルト 均質で縮まりあり 有機分多し	
16	5Y4/1灰褐色砂礫土 脆弱 有機分含 φ2~3cmの円礫主体 砂分伴なう	
17	2.5Y4/2暗灰黄色砂礫 脆弱 砂主体	
18	10YR6/4にぶい、黄褐色シルト 粘性あり よく縮まる φ2~3cmの円礫含 マンガン、木炭粒含 [第6層]	
19	N4/0灰色粘土 粘性強い、縮まりあり 木炭粒含 基礎土層 [第7層]	
20	2.5Y7/2灰黄色シルト 軟質 きめ細か マンガン、有機土を斑状含	
21	2.5Y7/1灰白色シルト 粘性あり 縮まりあり きめ細か、有機土斑状含 [第8層]	
22	N4/0灰色砂質シルト 砂分多く粘性弱い [第10層]	
23	10YR5/4にぶい、黄褐色砂礫土 固く縮まる φ2~10cmの円礫主体 [第11層]	
24	2.5Y4/2暗灰黄色有機土 均質 礫少ない、木炭含 盛土	
25	10YR6/3にぶい、黄褐色シルト 粘性あり 縮まる 礫少ない マンガン、少量含	
26	2.5Y5/2暗灰黄色砂礫シルト 粘性あり 縮まる φ5cmの円礫含 マンガン、斑状含	
27	2.5Y5/1黄灰色シルト 粘性あり 縮まりあり マンガン、僅かに含	
28	2.5Y4/1黄灰色シルト 縮まりあり マンガン、少なく粘性強い	
29	10YR3/1黒褐色シルト 粘性強い 有機分多し 礫少量含 木炭含	
30	10YR3/1黒褐色砂質シルト 粘性あり やや脆弱 φ1cm以下の円礫少量含 砂分多し	
31	2.5Y4/1黄灰色砂礫シルト φ1~2cmの円礫多い(集中)がシルト主体 マンガン、斑状含 木炭含	
32	10YR4/1褐灰色砂質シルト 粘性ややあり 小礫含 上層より砂分多し	
33	10YR6/3にぶい、黄褐色シルト 粘性あり φ2cm程の円礫含 鉄・マンガ、多い [第4層相当]	
34	10YR5/1褐灰色シルト 有機分多し マンガン、少ない φ3cm以下の円礫含	
35	7.5YR5/6明褐色シルト 縮まりあり 有機分少ない 有機分暗い、φ3cm以下の円礫含	
36	10YR4/1褐灰色有機土 粘性あり 硬質 有機分少ない φ3cm以下の円礫少量含 マンガン、集積	
37	7.5YR5/1褐褐色シルト 縮まりあり マンガン、斑状含 やや砂分多し	
38	2.5Y5/1黄灰色シルト 礫含 木炭粒少量含 [第5層相当]	
39	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト 粘性あり マンガン、殆ど含まず	
40	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト 礫少ない マンガン、殆ど含まず	
41	2.5Y4/1黄灰色砂礫土 固く縮まる 有機分多し φ1~3cmの礫主体 シルト分混入	[溝03埋土]
42	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト 粘性あり 均質 有機分多し	
43	10YR5/2灰褐色有機土 粘性あり 縮まる マンガン、斑状含 木炭粒含	
44	5Y4/1灰褐色粘土 粘性あり 縮まる 有機分多し	
45	2.5Y4/1黄灰色砂礫土 固く縮まる 有機分多し φ1~3cmの礫主体 シルト分混入	
46	5Y4/1灰褐色砂質土 シルトを基本としφ1~2cmの円礫集積	
47	10YR4/2灰褐色砂礫 固く縮まる 有機分含 φ1~3cmの円礫主体 [地山・第9層]	
48	10YR4/2灰褐色砂礫 固く縮まる 有機分含 φ1~3cmの円礫主体 [地山・第9層]	
49	10YR4/2灰褐色砂礫 固く縮まる [地山・第9層]	

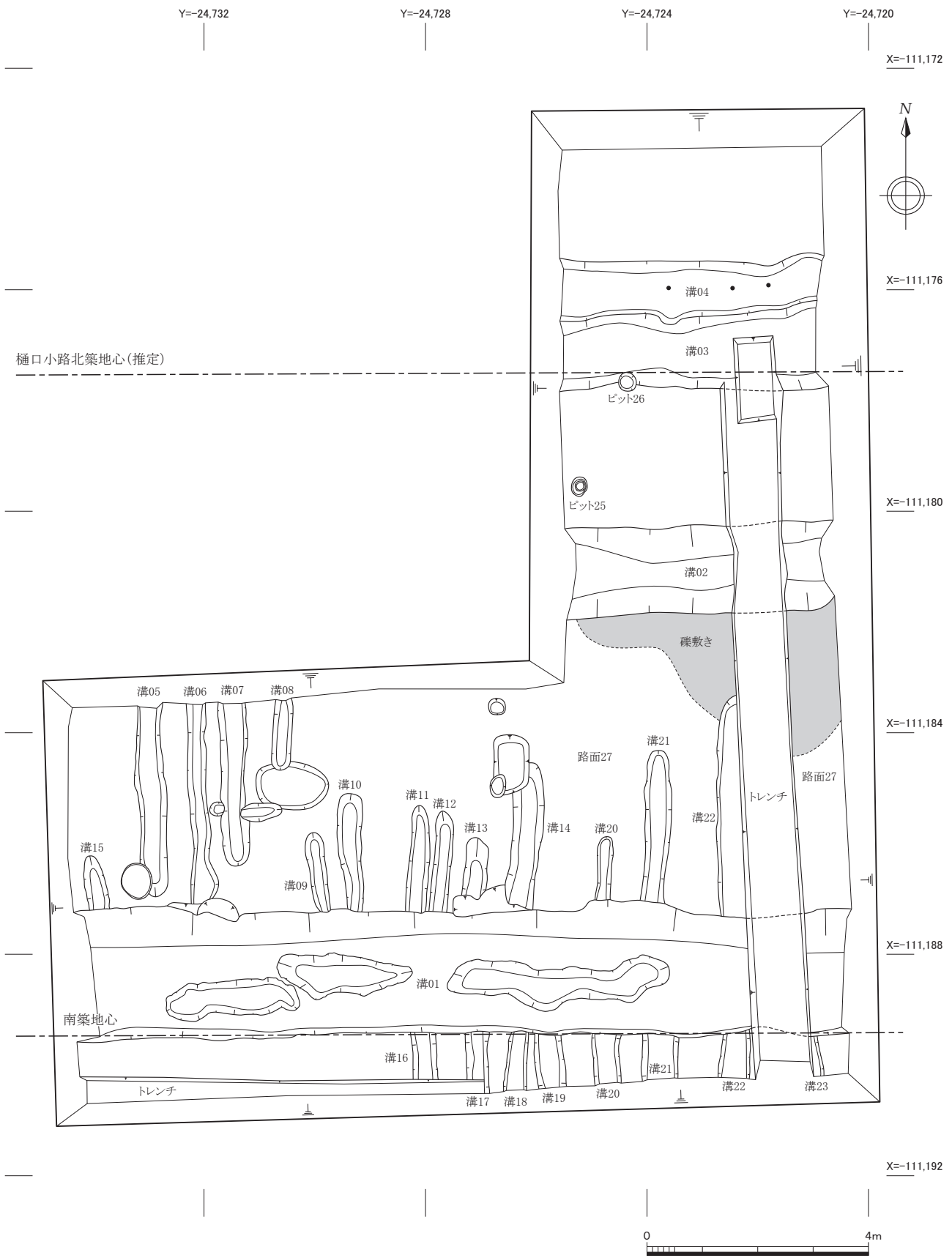


図9 調査区第1面平面図 (1 : 100)

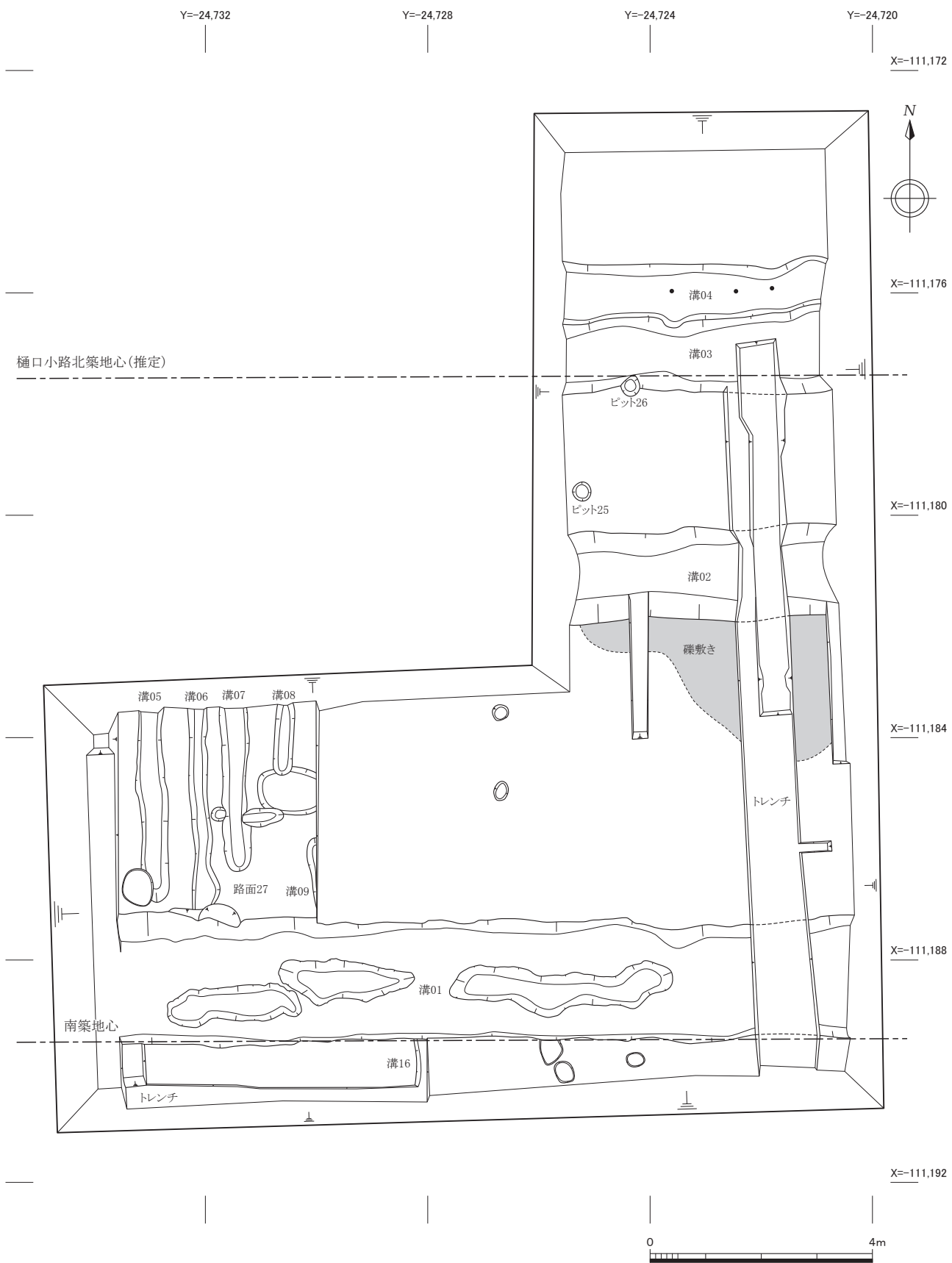


図10 調査区第2面平面図 (1 : 100)



### 溝 01（樋口小路南側溝）（図 11・12・13）

溝 01 は樋口小路南側溝と考えられる東西溝で、調査区の南半、A-4・5区、B-4・5区、C-4・5区、D-4・5区より検出したものである。第6層を掘削しており、幅 2.2～2.4 m、検出全長は約 14 m を測る。溝幅は『延喜式』『左右京職京程条』（以下「延喜式」という）の規定・三尺（約 0.9 m）に比してかなり広いものとなっている<sup>(1)</sup>。溝の南北両肩ラインは若干の凹凸を伴うものの平行を保ち、軸方向は東西座標軸とほぼ一致している。検出面からの深さは 0.4～0.5 m を測り、断面形は浅い U 字状を呈するが、南側の立ち上がりは北側に比べ若干急なものとなっている。溝底のレベルは東端で標高 22.74 m、西端で 22.61 m と西側がごく僅かではあるが低く、水流の方向を示唆している。また溝底中央付近に一段深く掘られた部分が認められ、さらに成因不明の直径 10cm 前後の細かな凹凸も多数観察できた（図版 9-1）。埋土は大まかに見れば上下に分けることができ、下層は脆弱な 10YR5/1 褐灰色の礫・粗砂層、上層は木炭粒を含む 10YR4/1 黒褐灰色のシルト質泥砂土層である。礫・粗砂層である下層を詳細に見れば、溝底には薄く細砂層が堆積し、この上位に径 5 mm～2 cm の円礫を主体とする砂礫層が厚く堆積していることが判る。これは、当初溝の水流は緩やかであったが、その後流量が増加し、十分な排水機能を持つに至ったことを示唆するものである。一方、上層のシルト質泥砂土層についても更に分層が可能で、これらは本溝が排水機能を低下させ、滞水が恒常化する中で徐々に泥土により埋没していった過程を示すものと言える。加えて興味深いのは、何れの埋土断面図を見ても分かるように、溝の南北両肩（立ち上がり部）付近には最下層である砂礫層を切るような黒褐色シルト質泥土の堆積が認められることである（図 12、13）。これは本溝が路面側（北肩）、犬行側（南肩）双方に掘り広げられたことを示しており、犬行側への拡幅がやや大きかったようにも見受けられる。この拡幅の痕跡は、溝西端埋土断面で明瞭に認められ、溝底がテラス状に掘り広げられていることが確認できる（図 13・溝 01 西壁の 5～7）。

本遺構からの出土遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などがあり、出土量も纏まっている。埋土下層と上層では遺物の傾向に若干の時期差が看取されることから、本溝は遅くとも 9 世紀初め頃までには掘削され、9 世紀末～10 世紀初め頃には埋没していると推定される。また後述するように、本遺構埋土上面から後世の耕作溝と思われる溝のプランを検出している。

### 溝 02（樋口小路北側溝）（図 11・12・13）

溝 02 は樋口小路北側溝と考えられる東西溝で、C-3区、D-3区より検出したものである。溝の南肩は路面 27 を挟んで溝 01 の北肩から約 5 m 北に位置する。硬い砂礫層である第 9 層を掘削しており、幅 1.3～1.5 m、検出全長は約 4.6 m を測る。溝幅は「延喜式」に記された幅三尺（約 0.9 m）に近い値を示している。溝の南北肩プランは平行で、軸方向は座標東西軸とほぼ合致する。断面は浅い U 字状を呈し、検出面からの深さは 0.2 m 前後と浅い。また溝底レベルは標高 23.0 m 前後で、溝 01 の底面に比して 0.3～0.4 m 高い位置にある。埋土は 10YR4/1 褐灰色シルト土を主体とし、溝 01 下層で見られたような脆弱な砂礫土の堆積は認められなかった。こうした埋土



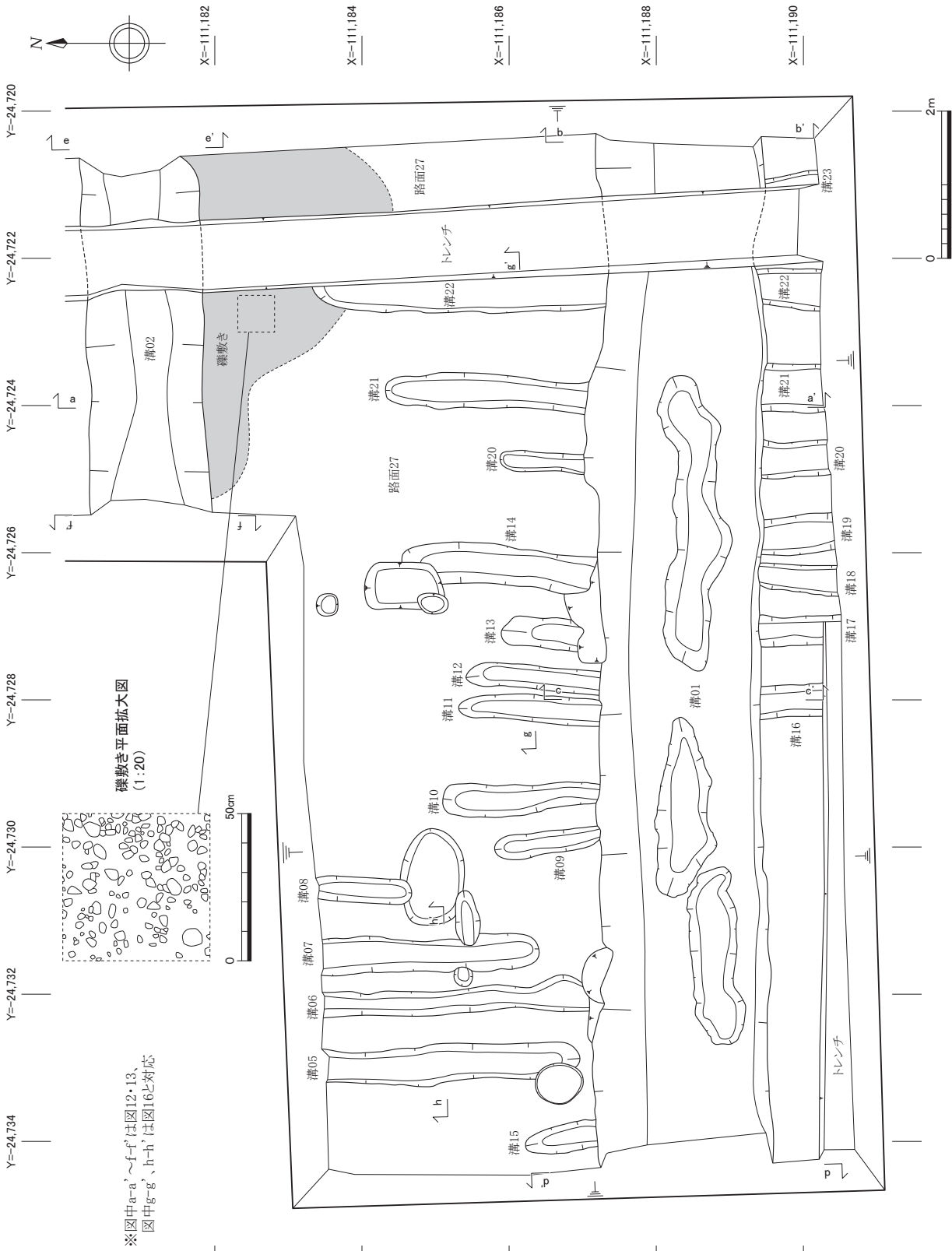


図11 路面27・溝01・溝02・耕作溝平面図 (1 : 80)

溝01・溝02中央セクション

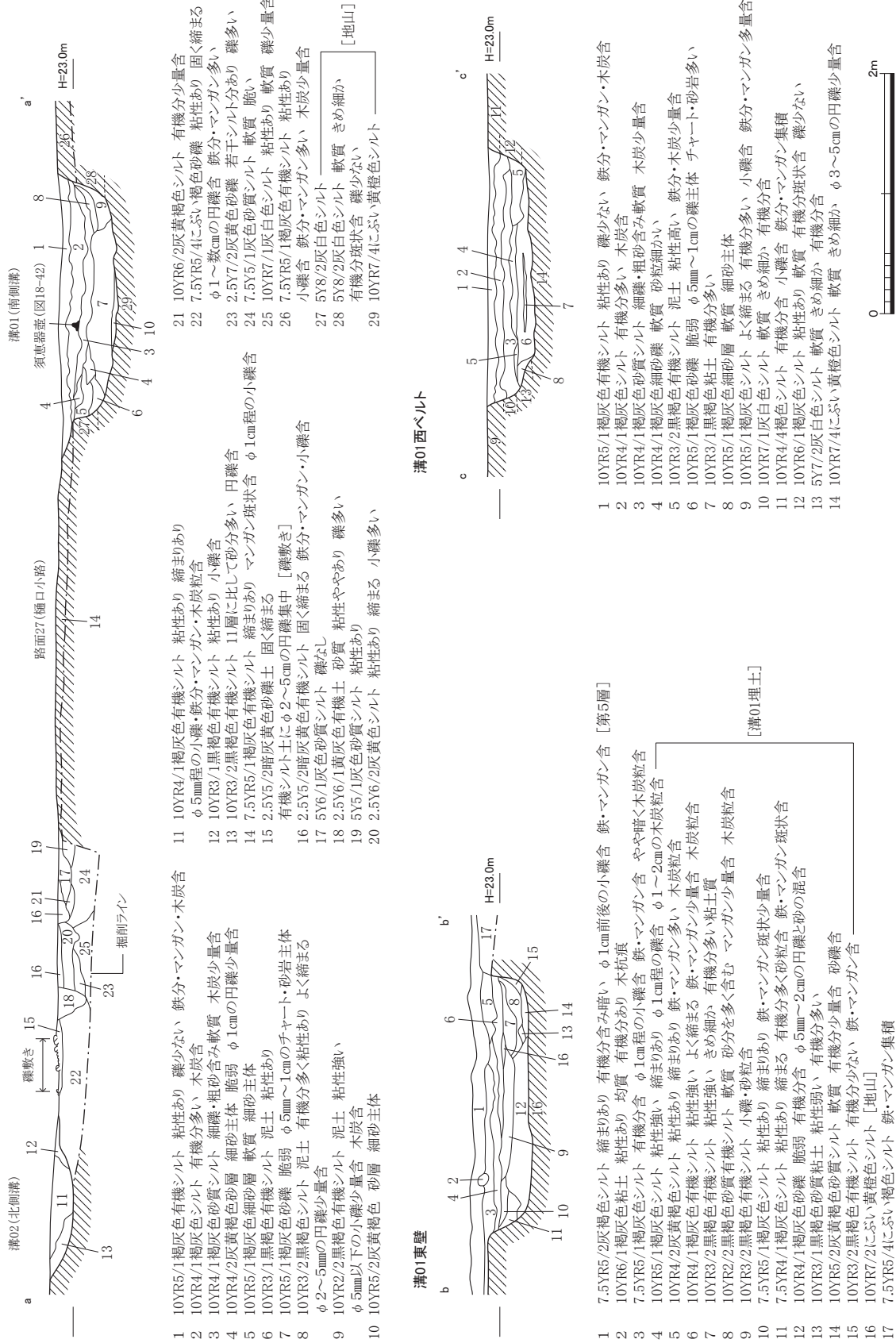


図12 路面27・溝01・溝02断面図 (1 : 50)

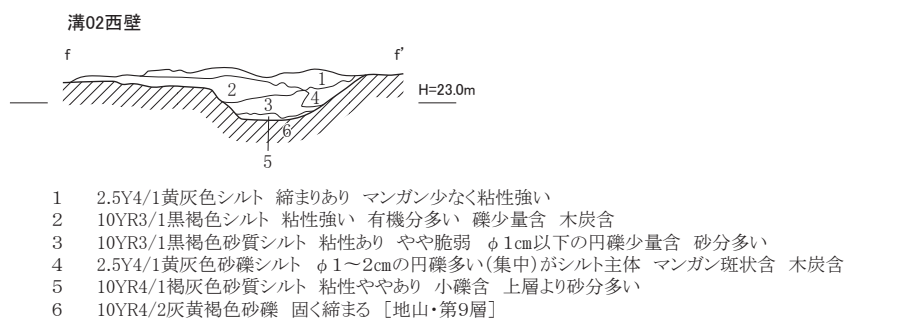
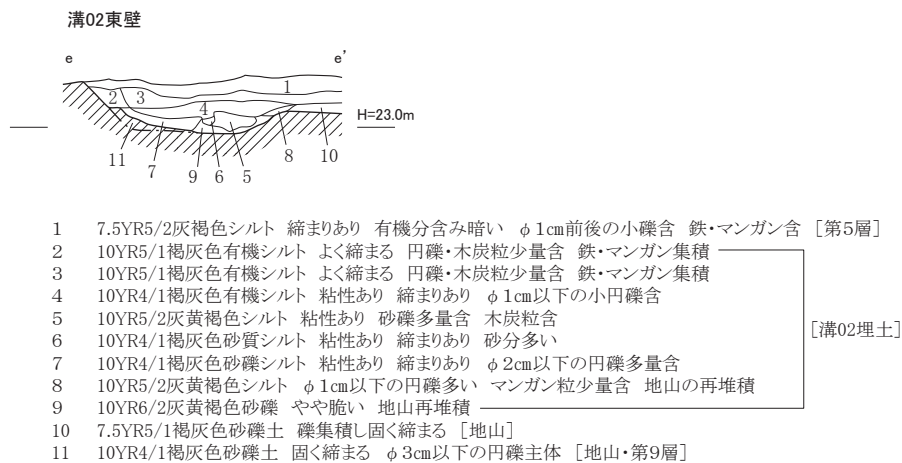
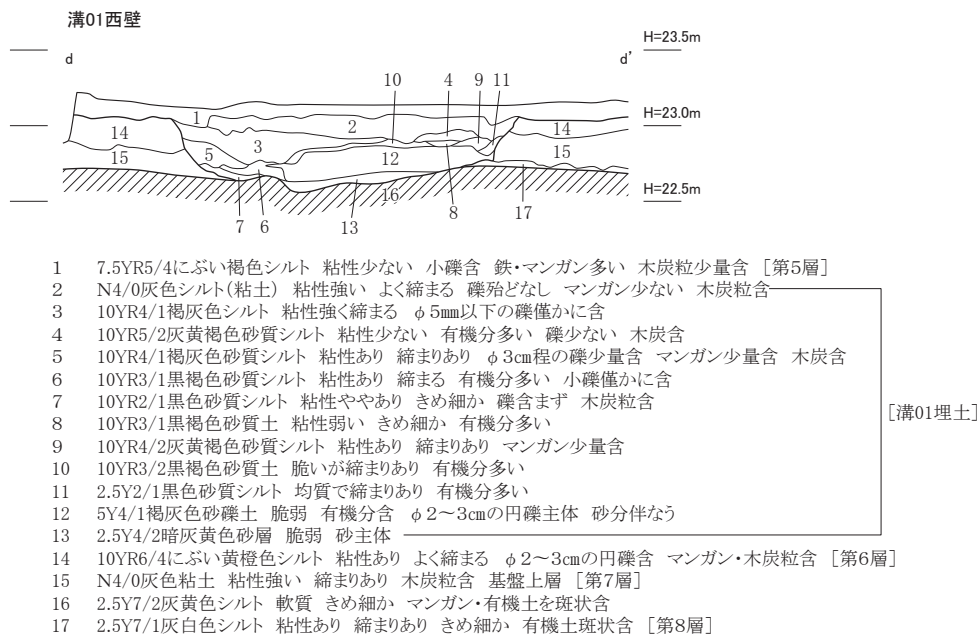
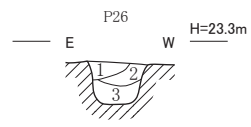
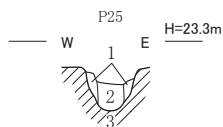
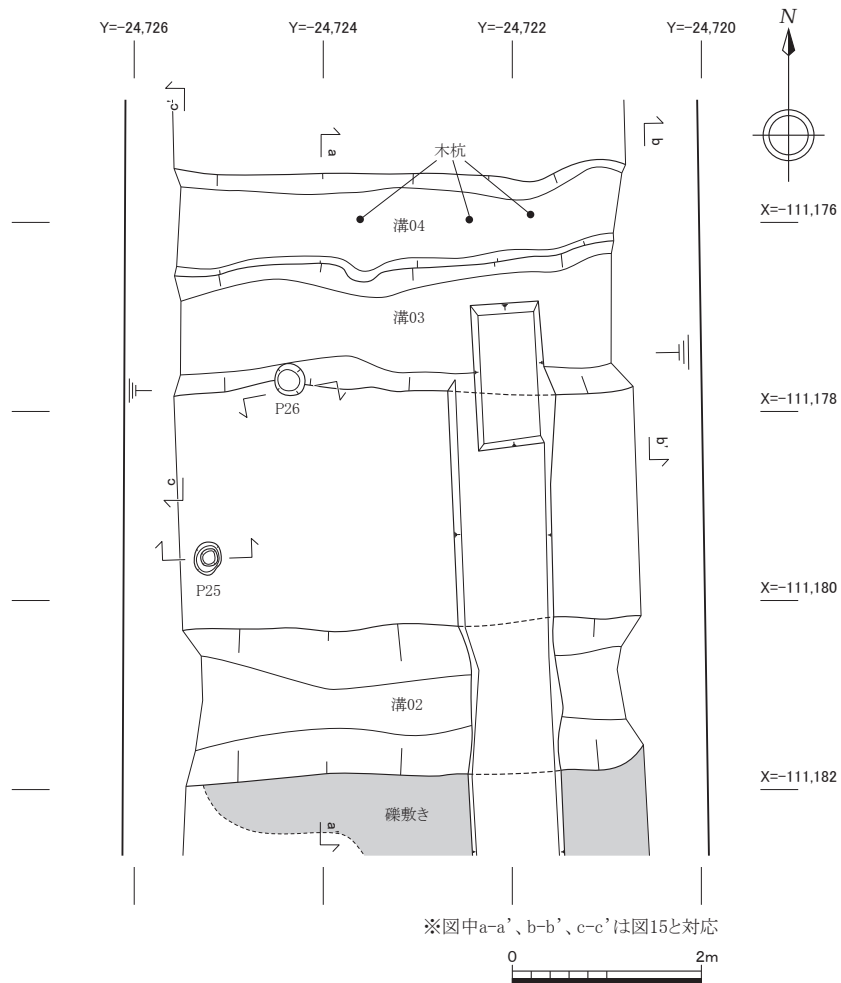


図13 溝01・溝02断面図 (1 : 50)



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 若干中央部より有機分少ない
- 2 5Y3/1オリーブ黒色シルト 礫含まず 木炭粒含
- 3 7.5YR4/1褐色灰色砂礫層 固く締まる φ1~数cmの円礫主体 [地山]

- 1 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト 粘性あり 小礫・マンガン含
- 2 N5/1灰色粘土 粘性強い
- 3 N6/1灰色砂質シルト 砂分多く脆弱



図14 溝02・溝03・溝04・P25・P26実測図(平面1:80・断面1:40)

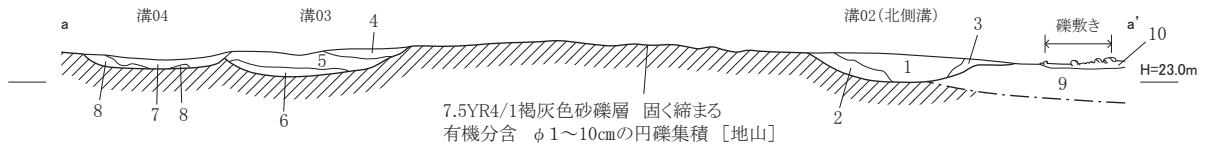
の状況や溝底のレベル差は、本溝が十分な排水機能を有していなかったことを示し、滞水が常態化していたことを物語っている。よって少なくとも調査地における樋口小路においては、当初より溝01が殆ど全ての排水機能を担っていたことが判り、溝02は条坊の区画程度の機能しか有さなかったものと推定される。

本溝からの出土遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがあるが、その量はごく僅かである。遺物の年代はほぼ9世紀代に収まるものである。

#### 路面27(樋口小路道路面)(図11・12)

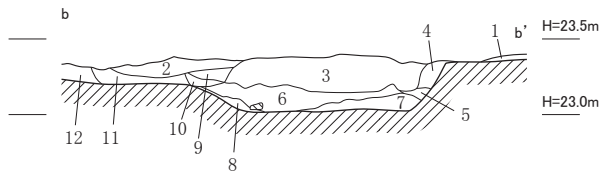
路面27は樋口小路道路面と考えられる遺構である。南側溝である溝01、北側溝である溝02に

溝02・溝03・溝04中央セクション



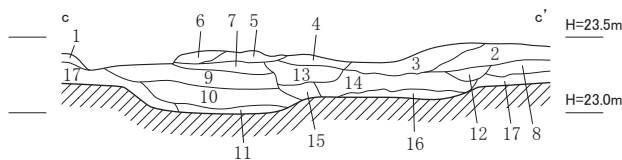
- 1 10YR4/1 褐灰色有機シルト 粘性あり 縮まりあり φ5mm程の小礫・鉄分・マンガン・木炭粒含
- 2 10YR3/2 黒褐色有機シルト 1層に比して砂分多い 円礫含
- 3 10YR3/1 黒褐色有機シルト 粘性あり 小礫含
- 4 7.5YR5/1 褐灰色有機シルト 粘性あり 縮まりあり φ3~4cmの円礫・鉄分・マンガン含
- 5 10YR4/1 褐灰色有機砂礫土 よく締まる 有機土に多量の円礫含
- 6 10YR5/1 褐灰色有機砂質土 やや軟質
- 7 10YR3/2 黒褐色有機シルト 粘性強い よく締まる 礫少ない 鉄分・マンガン少量含
- 8 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 粘性あり よく締まる φ1cm以下の円礫少量含
- 9 7.5YR5/4 にぶい 褐色砂礫 粘性あり 固く締まる φ1~数cmの円礫含 鉄分・マンガン多い
- 10 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫土 固く締まる 有機シルト土にφ2~5cmの円礫集中 [礫敷き]

溝03・溝04東壁



- 1 7.5YR5/2 灰褐色シルト 縮まりあり 有機分含み暗い φ1cm前後の小礫含 鉄・マンガン含 [第5層]
- 2 2.5Y6/2 灰黄色砂質土+7.5YR5/6 明褐色砂質土 φ1cm以下の小礫僅かに含 鉄・マンガン含
- 3 7.5YR6/6 橙色シルト 粘性あり 縮まりあり φ2~3cmの円礫少量含 鉄・マンガン・木炭粒含
- 4 7.5YR6/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まる 礫少ない 鉄・マンガン少量含
- 5 7.5YR6/1 褐灰色礫土 有機分少量含 φ1~2cmの円礫含 地山の再堆積
- 6 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性強くあり 縮まりあり 有機分あり
- 7 10YR5/1 褐灰色シルト 小礫多量含
- 8 7.5YR5/1 褐灰色砂礫シルト 縮まりあり φ2~3cmの礫含
- 9 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性あり よく締まる 僅かに砂分あり マンガン斑状含
- 10 10YR4/1 褐灰色砂質シルト 砂分多い マンガン斑状含
- 11 2.5Y5/1 黄灰色シルト よく締まる φ1cm以下の円礫含 マンガン多い
- 12 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト φ1~3cmの円礫含 マンガン斑状含

溝03・溝04西壁



- 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト 粘性あり 縮まりあり マンガン僅かに含
- 2 10YR6/3 にぶい 黄褐色シルト 粘性あり φ2cm程の円礫含 鉄・マンガン多い [第4層相当]
- 3 10YR5/1 褐灰色シルト 有機分多い マンガン少ない φ3cm以下の円礫含
- 4 7.5YR5/6 明褐色シルト 縮まりあり 有機分少ない φ3cm以下の円礫少量含 マンガン集積
- 5 10YR4/1 褐灰色有機シルト 粘性あり よく締まる 有機分暗い φ3cm以下の円礫含
- 6 7.5YR5/6 明褐色シルト 縮まりあり 硬質 有機分少ない φ3cm以下の円礫少量含 マンガン集積
- 7 2.5Y5/1 黄灰色シルト 粘性あり マンガン斑状含 やや砂分含
- 8 10YR5/1 褐灰色シルト 礫含 木炭粒少量含 [第5層相当]
- 9 2.5Y5/1 黄灰色シルト 礫少ない マンガン殆ど含まず
- 10 2.5Y4/1 黄灰色砂礫土 固く締まる 有機分多い φ1~3cmの礫主体 シルト分混入
- 11 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト 粘性あり 均質 有機分多い
- 12 10YR5/2 灰黄褐色有機シルト 粘性あり 締まる マンガン斑状含 木炭粒含
- 13 10YR5/1 褐灰色シルト 粘性ややあり 締まる 礫少ない マンガン多量含 木炭粒少量含
- 14 5Y4/1 灰色粘土 粘性あり 締まる 有機分多い
- 15 2.5Y4/1 黄灰色砂礫土 固く締まる 有機分多い φ1~3cmの礫主体 シルト分混入
- 16 5Y4/1 灰色粘土砂礫土 シルト土を基本としφ1~2cmの円礫集積
- 17 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 固く締まる 有機分含 φ1~3cmの円礫主体 [地山・第9層]



図15 溝02・溝03・溝04断面図 (1:50)

挟まれた範囲で、幅 5.0～5.5 m、検出全長約 14 mを測る。この路面幅は、「延喜式」に規定された二丈三尺（約 6.9 m）よりもかなり狭いものとなっている。北側溝である溝 02 には顕著な拡幅の痕跡が認められないので、先述した南側溝である溝 01 の路面側への拡幅が、路面幅を削った原因と考えられる。ただし、南側溝の当初の心が検出遺構の中心にあり、かつ当初の溝幅が規定どおり三尺であったと仮定した場合でも、路面の幅は 6.9 m よりも 0.5 m 程狭くなると思われる。よってこの路面は最初から「延喜式」の規定よりも若干狭く造られた可能性が高いと思われる。路面の標高は 23.1 m 前後と一定しており、これは同じ六条三坊七町～十町で行われた調査<sup>(2)</sup>で検出された樋口小路路面とほぼ同じレベル数値となっている。後述するように、路面のかなりの範囲では後世の巷所化（耕作地化）を示すごく浅い耕作溝により改変されていたが、大きく削平された形跡は認められず、今回検出した第 6 層上面が当時の道路面に近いものであったと考えられる。路面には、特に踏みしめたような硬化部分や、轍の跡等は検出されなかったが、溝 02 の南肩に近い D - 3 区から小礫の集積部が検出された。小礫は直径 1～3 cm の円礫を主体とし、その範囲は東西約 4 m、南北最大幅約 2.6 m の半円形に広がるものであった。この礫集積部は固く締まっており、断面観察から人為的な礫敷きである可能性が高いものと判断した。その理由は、路面と同レベルに厚さ僅か 1～3 cm とごく薄く広がっており、調査区北半に見られた基盤・第 9 層（褐灰色砂礫土層）の礫が露出したものではないこと、小礫間を埋めるシルト土中に自然堆積層としては不自然に有機分が多く含まれていたことが挙げられる。断ち割った限りでは遺物の包含は認められず、この礫敷きが樋口小路造成当初のものか、後に付加されたものであるかの判断には至らなかったが、溝 02 の南肩付近に生じた泥濘などを部分補修する目的で行われた施工かと思われる。

路面上レベルからは土師器、須恵器、瓦、中国磁器、灰釉陶器、緑釉陶器、染付磁器等が出土しており、平安時代のものが主体を占める。また後述する耕作溝の存在から、本路面は 10～11 世紀代には巷所化し、道路としての機能を失った可能性が高い。

尚、路面 27、溝 01、溝 02 の樋口小路関連遺構は、京都市埋蔵文化財研究所が公開している平安京街路復元ラインより、全体に 1.5 m 程南にずれていることが判明した（図 9）。

### 溝 03・溝 04（図 14・15）

溝 03 は調査区の北側、C - 2 区、D - 2 区より検出した東西溝で、溝 02 の北に並行する。硬い砂礫層である第 9 層を掘削して設けられた溝で、北肩は並走して掘られた溝 04 により僅かに切られている。残存幅 1.1～1.5 m、検出全長約 4.5 m を測り、主軸はほぼ座標東西軸に一致する。検出面からの深さは 0.2m 前後を測り、断面は浅い U 字形を呈する。溝底レベルは 23.03 m 前後である。埋土は 10YR5/1 褐灰色シルト質土を主体とし、一部有機土に礫が多く混入した 10YR4/1 砂礫土などが見られる。何れも良く締まった土質である。

溝 04 は溝 03 の北肩を切るように掘削された東西溝で、検出全長約 4.6 m、東西端の壁面断面から推定される幅は 0.9～1.5 m を測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは 0.12m 前後



とごく浅いものである。溝底レベルは 23.08 m 前後で、溝 03 よりも数センチ浅く掘られている。埋土は有機分の多い 10YR3/2 黒褐色シルトを主体とし、良く締まる土質をもっている。埋土の切り合いから、溝 03 が埋没する過程で本溝が掘削されていることが観察でき、結果的に溝 03 が掘り広げられた形となったことが判る。

溝 03・04 からは、土師器、須恵器、灰釉陶器など平安時代の遺物が出土しているが、いずれも 9 世紀代に納まるものであり、条坊遺構とほぼ同時期に存在した遺構と考えられる。従ってその位置関係から樋口小路の北側の宅地に付随した築地の内溝であったと推定される。またシルト質を基本とする埋土は、両遺構が常に滞水状態にあったことを示しており、積極的な排水というよりも、宅地の乾燥化を目的とした雨落ち溝であったと考えられる。

尚、樋口小路北側溝である溝 02 の北肩と、溝 03 の南肩の距離は 2.5 m 前後を測る。「延喜式」の規定では、道路側溝に沿って幅三尺(約 0.9 m)の犬行、さらに犬行端から築地心まで 2.5 尺(約 0.75 m)とある。築地基底部の幅は約 1.5 m となるので、溝 02 - 溝 03 間の空間は犬行、築地を設けるだけの幅を有していることが判る。ただし、今回の調査では築地の痕跡を検出することはできなかった。この他、溝 04 内で直線的に打込まれた 3 本の本杭が検出されたが、杭の質感や残存状態から見て極めて新しいものであり、近現代の耕作に伴うものと判断した。

## 耕作溝

### 溝 05 ～ 溝 23 (図 11、図 16)

樋口小路の路面 27 と、一部溝 01 南の犬行部から南北方向に掘削された小溝を多く検出し、溝 05 ～ 溝 23 と命名した。何れも第 1 遺構面(第 6 層上面)より検出したもので、溝の幅は 0.2 ～ 0.5 m、検出面からの深さは 0.04 ～ 0.1 m とごく浅く、断面形は U 字形を呈するものが多い。調査区外へ延びるものが殆どで、溝の全長が判るものはない。各溝に切り合いは認められず、0.1 ～ 0.4 m 程の間隔を置いて掘られている。調査区東半の溝 20、21、22、23 については、遺構検出時、溝 01

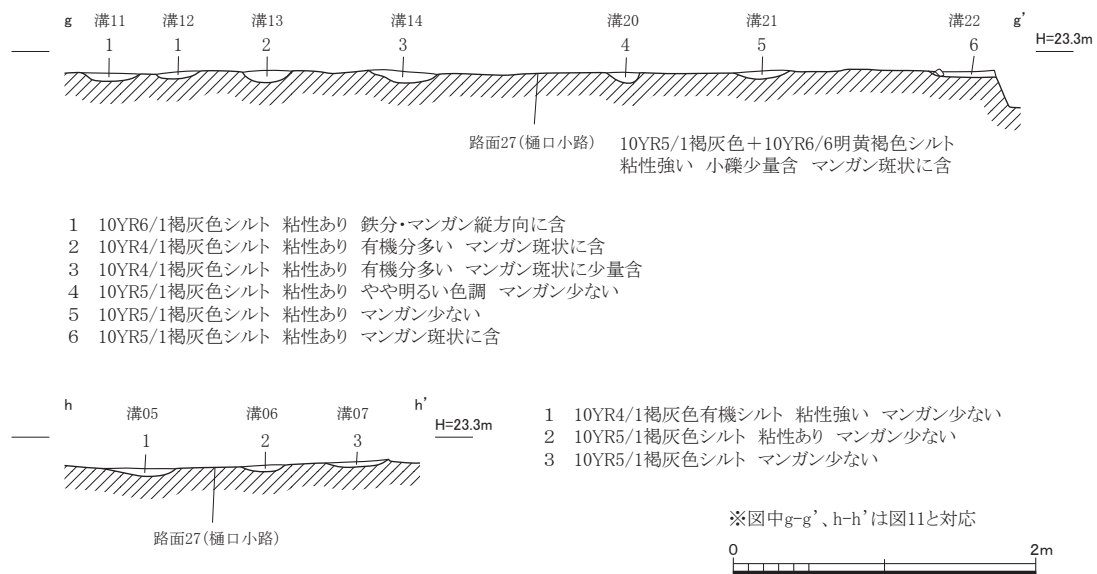


図 16 耕作溝断面図 (1 : 50)

の埋土上面にもプランが観察でき、溝01が完全に埋没した後に掘削されていることが確認できる。また溝11と16、溝14と18は一連のものである可能性が高い。こうした形状や属性から、これらは何らかの耕作に伴う溝で、樋口小路が巷所化したことを示す遺構と考えられる。

一部の溝の埋土からは土師器や須恵器などの遺物の出土が僅かに見られた。耕作溝という性格から正確な帰属時期を判断するには慎重を要するが、溝14埋土から黒色土器B類の小片が出土しており、10世紀後半よりも新しい遺構と考えられる。

## ピット (P)

### P25・P26 (図14)

P25はC-2区、溝02に近接した犬行部から検出したピットで、直径約0.3mの円形プランをもつ。第9層を掘削しており、検出面からの深さ0.22mを測る。埋土はオリーブ褐色のシルト土で、中心に直径0.15m程の柱当たり痕が認められる。その位置から築地の堰板を固定する添柱痕のようにも見えるが、対応する別ピットが見当たらず、遺物の出土も無いため帰属時期を含め性格は不明である。P26はC-2区、溝03の南肩の一部を切るように掘られた直径約0.3mのピットである。円形プランをもち、検出面より最も深い部分で0.22mを測る。埋土からは鑄込み成形による磁器染付小杯が出土しており、近代以降のピットであることは明らかである。この他、調査区内から検出された幾つかの浅い落ち込みは、何れも掘り方が不鮮明で、遺物は全く出土せず、明確な遺構と判断するには至らなかった。

## 3 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、中国磁器、瓦などが見られるが、その量はコンテナ整理箱6箱分と少なく(表3)、土器、陶磁器以外の遺物は得られなかった。遺物の約71%は溝01、約15%は路面27上面、約6%は溝04からの出土であり、この3つの遺構だけで全体の92%を占めている。遺物の内訳は、須恵器、土師器が9割以上を占め、灰釉陶器や緑釉陶器などの国産高級陶器や、黒色土器、中国磁器の割合は極めて低い。表4に示した割合はあくまでも破片点数であって、一見土師器の占める割合が高いように思われるが、出土した土師器の大半は細片となっており、川ズレによって摩耗したものも目立ち、実際は須恵器の比率が数字以上に大きい印象を受ける。また土師器は甕が多くを占め、杯、椀、皿などの供膳具が少ないことも特徴の一つである。瓦の出土も僅かで細片が多い。

以下、各遺構から出土した主要遺物の特徴について記述する。尚、須恵器の器種名については平城宮分類<sup>(3)</sup>に準拠している。



表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Aランク点数	Bランク点数	Cランク箱数
古墳時代	土師器 須恵器		土師器1点、須恵器1点		
平安時代	土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 黒色土器 中国磁器 瓦 ミニチュア土器		土師器18点 須恵器42点 緑釉陶器6点 灰釉陶器5点 黒色土器1点 中国白磁3点 平瓦2点 ミニチュア土器(土馬)1点		
室町時代	中国磁器		中国白磁1点		
江戸時代	染付磁器		染付磁器1点		
不明	土師器		土師器1点		
合計		6箱	83点(3箱)		3箱

※コンテナ箱数の合計は、遺物整理後Aランク遺物を抽出したことにより、出土時より2箱多くなっている。

### 溝01 埋土下層出土遺物 (図17-1～27、図19-58)

溝01(樋口小路南側溝)の埋土下層(砂利層)及び底面から出土した主要な遺物には、以下のものが見られる。

#### [土師器]

1～3は杯Aである。1は口径15.6cmを測り、直線的な体部を有する。口縁の先端部は僅かに内彎する。体部外面にはヘラ磨き調整痕が見られ古い特徴を残している。2は口径15.2cmを測り、体部全体に弱い張りをもち、口縁端部は短く内彎する器形である。全体に摩耗しているが、体部外面にはヘラ削り痕、口縁近くには指ナデ痕が見られる。3は口縁部が若干外反し、端部は短く内彎する。体部外面にはヘラ削りが行われている。1～3は何れも1C段階(9世紀前半)に比定することができる。

4・5は大型の高杯である。4は緩やかに大きく外反する杯部口縁部で、端部は短く上方に引き上げられる。体部外面には丁寧なヘラ磨きが施される。5は棒芯巻付技法によって成形された脚部で、ヘラ切りによる縦方向の面取りが行われる。断面は八角形を呈するものと思われる。ともに1C段階(9世紀前半)に比定することができる。

6はロクロ成形による小型の壺である。胴部は斜め上方に立ち上がり、内面のロクロ目が顕著である。底部は平底で外面には僅かに糸切痕を留めている。須恵器壺Mをモデルとしたものと

表4 出土遺物の点数とその割合

種別	点数※	割合(%)
土師器	381	41.6
須恵器	474	51.7
緑釉陶器	10	1.1
灰釉陶器	7	0.8
瓦	18	2.0
中国陶磁	4	0.4
ミニチュア(土馬)	1	0.1
黒色土器ほか	8	0.9
近世～近代陶磁器	13	1.4
合計	916	100.00

※接合後の破片点数

思われる。7は甕である。口径17.3cmを測り、口縁は緩やかに外反し、端部は短く内側に折れ曲がり、外縁は面を形成する。内外面には横ナデ調整が行われ、外面には2次的被熱を示す煤の付着が認められる。6・7ともに9世紀代の遺物と考えられる。

8は小型の壺の口頸部と思われる。頸部は大きく外反し、稜を伴って屈曲して立ち上がる複合口縁様の形状を呈する。緻密な胎土をもつが、全体に摩耗が顕著で、帰属時期は不明である。9は高杯で、ハの字形に開く脚部を有する。薄手の器壁をもち、内外面はナデ調整が加えられる。古墳時代前～中期の遺物と考えられる。

#### [ 須恵器 ]

10～12は杯である。10は杯Bで、高台径9.0cmを測る。高台は外方に開く低い角高台で、底部外縁近く、体部との屈曲部境のやや内側に貼付される。底部外面には回転ヘラ削り痕が残る。11は杯Aで、底径10.0cmを測る。無高台平底で、底部外面にはヘラ削り痕が残る。体部は直線的に逆ハの字形に開くものと思われる。10・11ともに9世紀初頭に比定できると思われる。12は推定口径17cm前後を測る大型の杯で、口縁は直線的に逆ハの字形に開く。9世紀代のものと思われる。

13～16は壺L（長頸壺）である。13は丸く張った胴部と細長く逆ハの字状に開く頸部をもつ。頸部は三段構成によって胴部と接合されている。胴部外面に厚い自然釉が掛かる。8世紀末～9世紀初頭に比定でき、陶邑窯産と思われる。14～16は底部片である。何れも底部に付高台を伴う。14は高台径7.4cmを測り、高台は高く断面台形を呈する。底部外面には回転糸切痕が残る。また底部内外面、胴部外面下半に墨状の炭化物の付着が認められる。15・16は高台径6.0～6.6cmと14に比してやや小振りで、高台の作りも低いものとなっている。15の底部外面には回転糸切痕、高台端部には網代状の圧痕が認められる。また16の底部外面にはヘラ切り痕、胴部外面下半には回転ヘラ削り調整が認められる。14・15は9世紀前半、16は9世紀初め頃に比定することができる。

17～19は壺Lを小型にした壺Mで、高台を伴うもの（17）と無高台のもの（18・19）が見られる。17は口径3.6cm、器高10.7cmを測る。ほぼ完形で、若干肩の張った倒卵形の体部をもつ。頸部は細長く逆ハの字形に広がり、口縁端部は上下に僅かに拡張され、端面は内傾する。高台は付高台で、断面台形を呈する。底部外面にはナデ調整が加えられる。9世紀前半に比定することができる。18・19は平底で、底部外面には糸切痕が残る（19は回転糸切痕）。18は胴部外面下半に静止ヘラ削り整形が行われ、その後ナデ調整が加えられる。19は平高台状に底部が突出する器形で、体部下半の張りは18に比して弱いものとなっている。内面には炭化物の付着が認められる。両者とも9世紀代に比定できると思われる。

26は細い頸部を持つ壺瓶類で、体部上半の形状は平らである。肩部に稜角をもつ壺K（長頸壺）又は平瓶と思われるが、三段構成により頸部が接合されていることから、前者である可能性が高い。8世紀後半～9世紀前半に比定できる。

20は葉壺に嵌合する小型の蓋で、口径6.0cmを測る。口縁は短く垂下し、天井部は平坦な形状

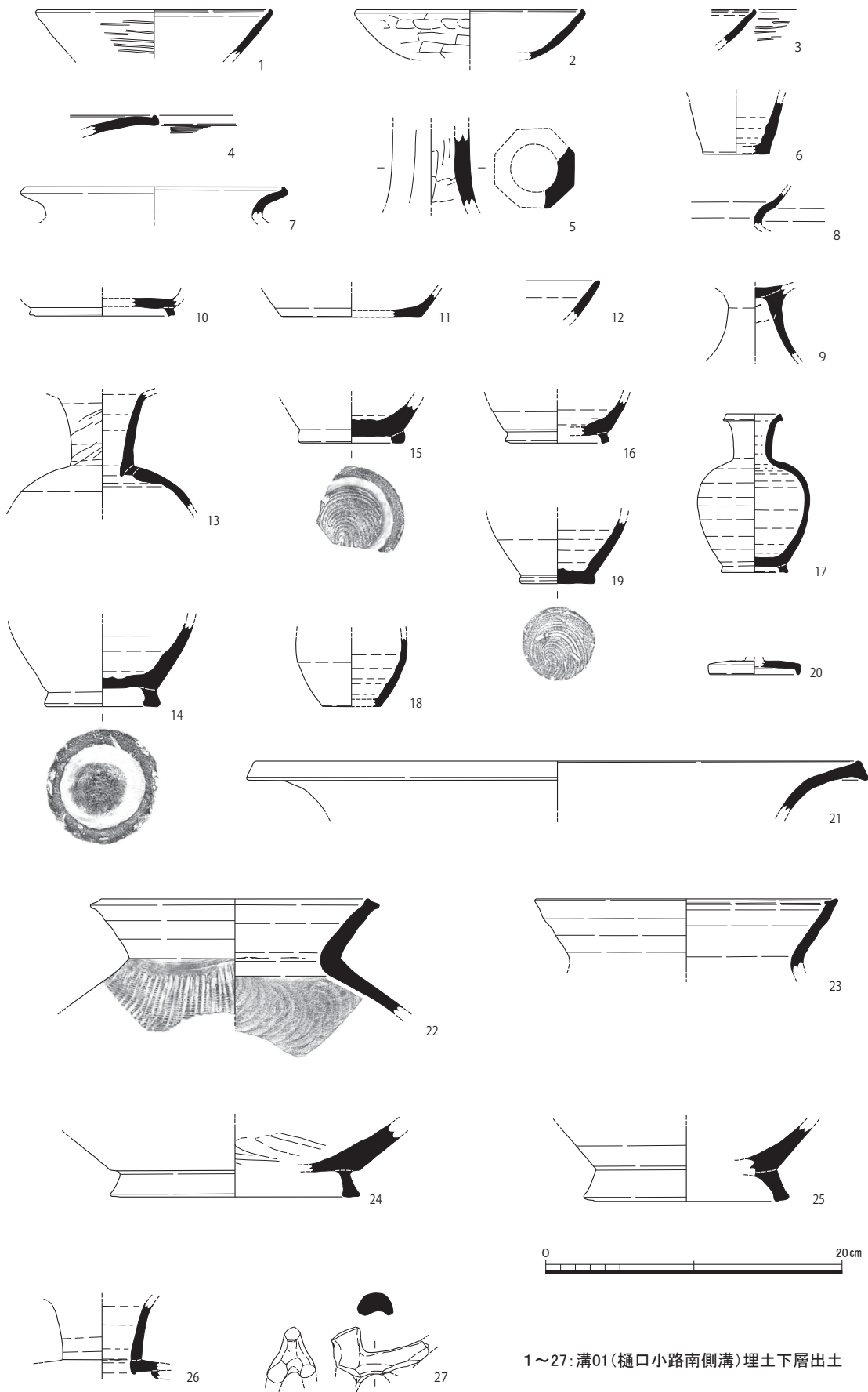


图17 出土遺物実測図1 (1:4)

である。天井外面には自然釉が付着しており、中央の宝珠形つまみは欠落している。8世紀～9世紀前半に比定することができる。

21～23は甕である。21は口径40.7cmを測る大型の甕Aで、口縁は大きく外反し、口縁端部は上下に拡張される。口縁端部は内傾する面を形成する。内面に斑状の自然釉が付着する。22は口径18.0cmを測る甕Aで、口頸部は「く」字状に外反し、口縁端部は上下に少し拡張される。体部外面には縦方向の平行叩き目が残りに、叩きの後に横方向のカキ目調整が加えられている。体部内面には同心円状の当て具痕と軽いナデ調整痕が認められる。23は、口縁が若干内彎気味に開く甕で、口径20.3cmを測る。口縁端部は内面のみ拡張され、内傾した面を形成する。21～23は何れも9世紀代に比定できると考えられる。この他小片のため図示しなかったが、猿投窯産の特徴とされる体部の内外面に黄土を塗布した甕が数点出土している。

24・25は深い体部をもった有高台の鉢Dである。24の高台は外方へ開く断面台形を呈し、体部との屈曲部境よりも若干内側に貼付されている。胴部外面にはヘラ削りの後ロクロナデ調整が加えられている。また底部内面には不定方向の静止指ナデ痕が認められる。25の高台は外方へ開く断面逆台形を呈し、底部の外縁端に貼付されている。体部外面には回転ヘラ削り調整、底部内面には不定方向の静止指ナデ痕が認められる。ともに8世紀末～9世紀初頭に比定できる。

#### [瓦]

58は平瓦で、厚さ2.4cmを測る。凹面には布目痕、凸面には縦位の縄叩き痕が残る。側面は凹面に対しほぼ直角に面取りされている。また凹面には模骨痕をナデ消したと思われる縦方向の指ナデ痕が認められる。模骨間の幅は約2.5cmを測る。胎土には砂粒を多く含むが、硬質で須恵器のような質感をもっている。9世紀代のものと考えられる。

#### [ミニチュア土器]

27は土師質の土馬である。細長い粘土板を折り曲げて脚、尾を引き出し、頭部は接合したものと考えられるが、胴部を残し欠落している。指ナデ及び指頭圧痕が全体に認められる。今回の調査で出土した唯一の祭祀関連遺物である。

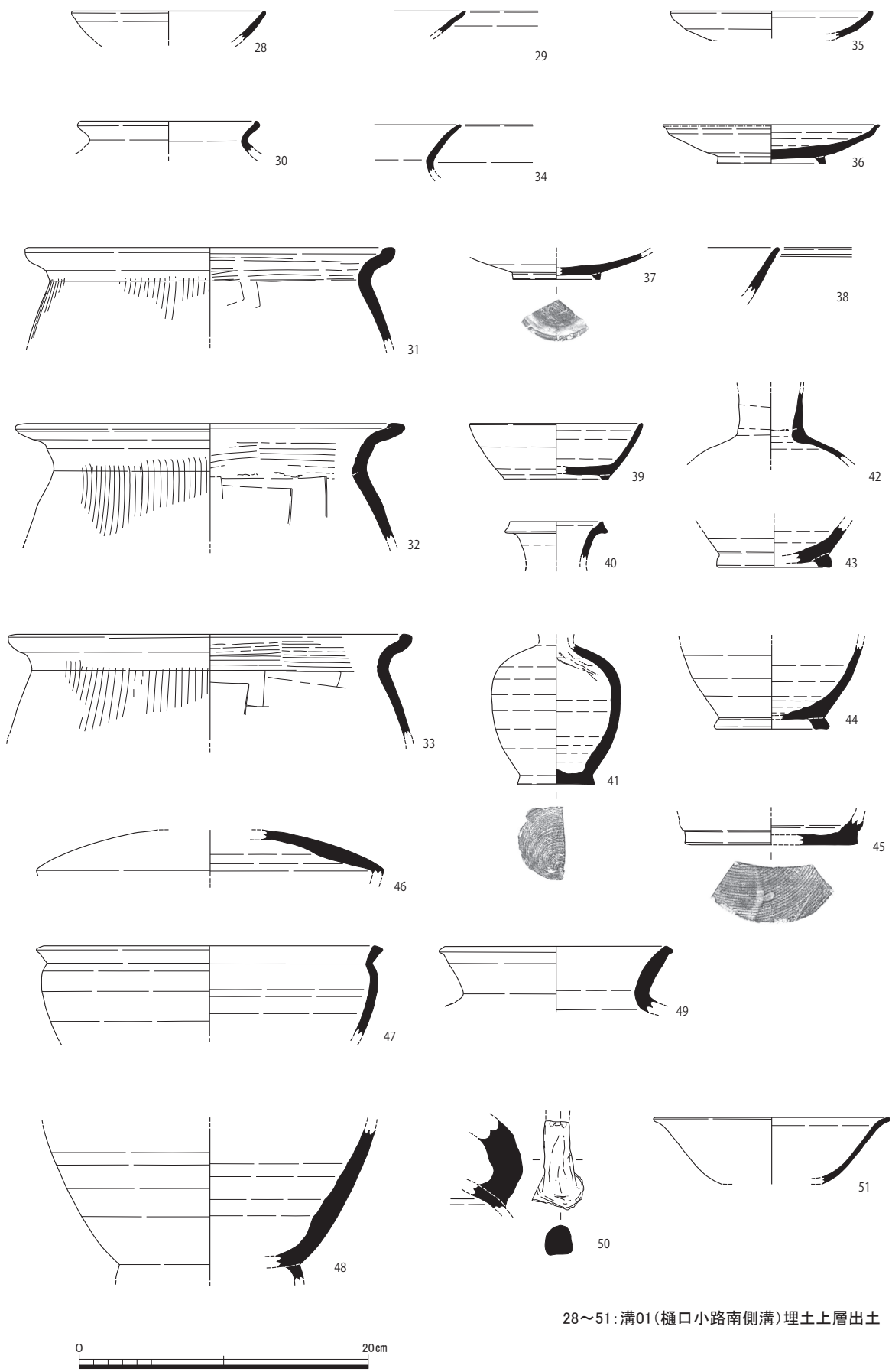
#### 溝01 埋土上層出土遺物 (図18-28～51、図19-59)

溝01(樋口小路南側溝)の埋土上層(灰色シルト土層)からの出土した主要な遺物には、以下のものが見られる。

#### [土師器]

28・29は椀Aである。28は口径13.2cmを測り、体部はごく弱い張りを伴い、口縁は外反しない。体部外面には指オサエ痕、口縁部には横ナデ痕が微かに認められる。2A段階(9世紀中葉～後半)に比定できる。29は28に比して器壁が薄く、口縁は若干外反する。やはり体部外面には指オサエ痕、口縁部には横ナデ痕が認められる。2A～2B段階(9世紀後半)に比定することができる。

30～33は甕である。30は口径12.1cmを測る小型の甕で、球形の体部をもつものと思われる。頸部は体部から緩やかに屈曲し、口縁は内彎気味に開く。口縁端部は内側に僅かに引き上げられ



28~51:溝01(樋口小路南側溝)埋土上層出土

图18 出土遺物実測図2 (1:4)



る。口縁部の内外面はナデ調整が加えられる。31～33は口径25～27cmを測る大型の甕である。体部から頸部に至る屈曲は緩やかで、口縁端部は内側に短く折り曲げられて肥厚する。体部外面には粗い縦ハケ、口縁部内面には横ハケ後ナデ調整が施される。また体部内面には横方向の板ナデが施されている。何れも焼成良好で、硬質である。9世紀代のものと考えられる。

#### [須恵器]

38・39は杯である。38は推定口径15cm以上の大型の杯で、体部から口縁にかけて直線的に開く器形をもつ。体部外面には回転ヘラ削り調整が行われている。9世紀代のものと思われる。39は杯Bで、口径11.9cmを測る。体部全体が僅かに張りをもって逆ハの字形に開く器形である。高台は断面逆台形の付高台で、底部外縁端に貼付される。底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。9世紀前半～中葉に比定することができる。

40・42～44は壺Lである。40は逆ハの字形に緩やかに外反する口頸部で、口径6.4cmを測る。口縁端は上下に僅かに拡張され、内傾した面を形成する。42は体部上半から頸部にかけての部位で、体部の肩の張りはやや弱いものとなっている。頸部は二段構成によって体部に接合されている。9世紀代のものと考えられる。43・44は底部から体部下半の部位で、底径7.6cm内外を測り、外方に少し開く角高台が貼付される。44の底部外面はヘラ削り後ナデ調整が認められ、体部外面には回転ヘラ削り調整が行われている。体部外面全体には厚い自然釉が掛かっている。9世紀前半に比定できるとと思われる。

45は底部が平高台状に突出する無高台の壺であるが、鉢の可能性もある。底部外面には回転糸切痕が残り、底部内面のロクロ痕が顕著である。9世紀後半代のものと考えられる。

41は底径5.3cmを測る小型の壺Mである。体部は若干肩の張った倒卵形を呈し、無高台の底部は平高台状に突出する。底部外面には回転糸切痕が残る。体部外面下半には回転ヘラ削り調整が加えられている。9世紀代のものと考えられる。

46は平瓶である。体部上半で鋭く屈曲し、上面は平らな形状である。外面全体に厚い自然釉が掛かる。8世紀末～9世紀前半に比定することができる。

47・48は鉢Dである。47は体部上半に張りをもち、頸部は短く「く」字状に屈曲し外反する器形で、口縁端部は面を形成する。口径22.8cmを測る。体部外面には回転ヘラ削り後ナデ調整が施される。9世紀前半頃の遺物と考えられる。48は胴部下半で、ハ字状に開く付高台を有する。体部外面には回転ヘラ削り調整が行われ、さらにその下半はナデが加えられている。また体部内面には一部不定方向の静止指ナデ痕が認められる。8世紀末～9世紀初め頃のものと考えられる。

49は口径15.7cmを測る甕である。頸部は緩やかに外反し、口縁端部は下方に僅かに拡張され、内傾する面を形成する。内外面にロクロナデ調整が施される。9世紀代のものと考えられる。50は壺Xの把手部で、半輪状を呈する。「手づくね」による成形で、外面は指頭痕による凹凸が顕著に認められる。特に把手の内側に自然釉の付着が顕著である。9世紀代の遺物と推定される。

#### [ 緑釉陶器 ]

35は口径13.8cmを測る皿で、口縁端部を内側へ短く屈曲させる。胎土は硬質で灰色を呈し、釉層は薄く灰緑色を呈する。洛西窯産で9世紀後半に比定できる。

#### [ 灰釉陶器 ]

36・37は皿である。36は口径14.9cmを測り、体部下半が直線的に開き口縁端部は内側へ短く屈曲する。底部外面には回転ヘラ削り調整が加えられ、外縁に低い角高台が貼付される。内面全体にハケ塗りにより施釉され、釉調は光沢をもった淡緑灰色を呈する。また底部外面に薄い墨痕が残る。37は高台径5.9cmを測る。底部外面には回転糸切り後ナデ調整が加えられる。高台は断面逆台形の低い角高台である。施釉は内面のみに行われている。何れも猿投窯産で、K-14窯式(9世紀前半～中葉)に比定することができる。

#### [ 黒色土器 ]

34は黒色土器A類の甕である。「く」字状に外反する口頸部をもち、口縁端部は尖り気味に仕上げられる。球形の体部を伴うものと考えられる。器壁は薄手の作りで、内面にカーボンを吸着させて黒色化している。9世紀後半頃のものとして推定される。

#### [ 瓦 ]

59は平瓦で、厚さ2.3cmを測る。凹面には布目痕、凸面には縦位の縄叩き痕が残る。側面はヘラ切りにより凹面に対し鋭角に面取りされている。また凹面には模骨痕をナデ消したと思われる縦方向の指ナデ痕が僅かに認められる。胎土には砂粒を多く含む。9世紀代のものと考えられる。

#### [ 中国磁器 ]

51は中国製の白磁碗で、口径16.1cmを測る。体部下半に張りをもち、口縁は緩やかに外反する。器壁は非常に薄手で、胎土は精良緻密、釉は白色である。中国白磁碗でも新しい特徴を有し、15～16世紀代のものと考えられる(森田分類・白磁E類か?)。尚、本遺物は溝01埋土上層でも上面に近いレベルから出土しており、後世何らかの理由で混入したものと考えられる。

#### 溝01埋土上面出土遺物(図19-52～57)

溝01(樋口小路南側溝)の埋土上面から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

#### [ 土師器 ]

52は土師器皿Nで、口径14.0cmを測る。体部全体に丸味をもち、口縁は内彎気味に立ち上がる。口縁端部の断面は丸味を帯びた三角形を呈する。体部外面下半には指オサエ、口縁内外面には横ナデ調整が施される。5B～6A段階(12世紀中葉～末)に比定できると思われる。

#### [ 須恵器 ]

53は古墳時代タイプの杯蓋Hである。天井部は丸く、口縁部との境に短く突出した稜を伴う。天井部外面には回転ヘラ削り調整が行われる。MT15型式(6世紀前半)に比定できると思われる。

54は壺Lで口径9.8cmを測る。頸部は逆ハの字形に開き、口縁は大きく外反し端部は上下に若干拡張され面を形成する。9世紀前半のものと思われる。

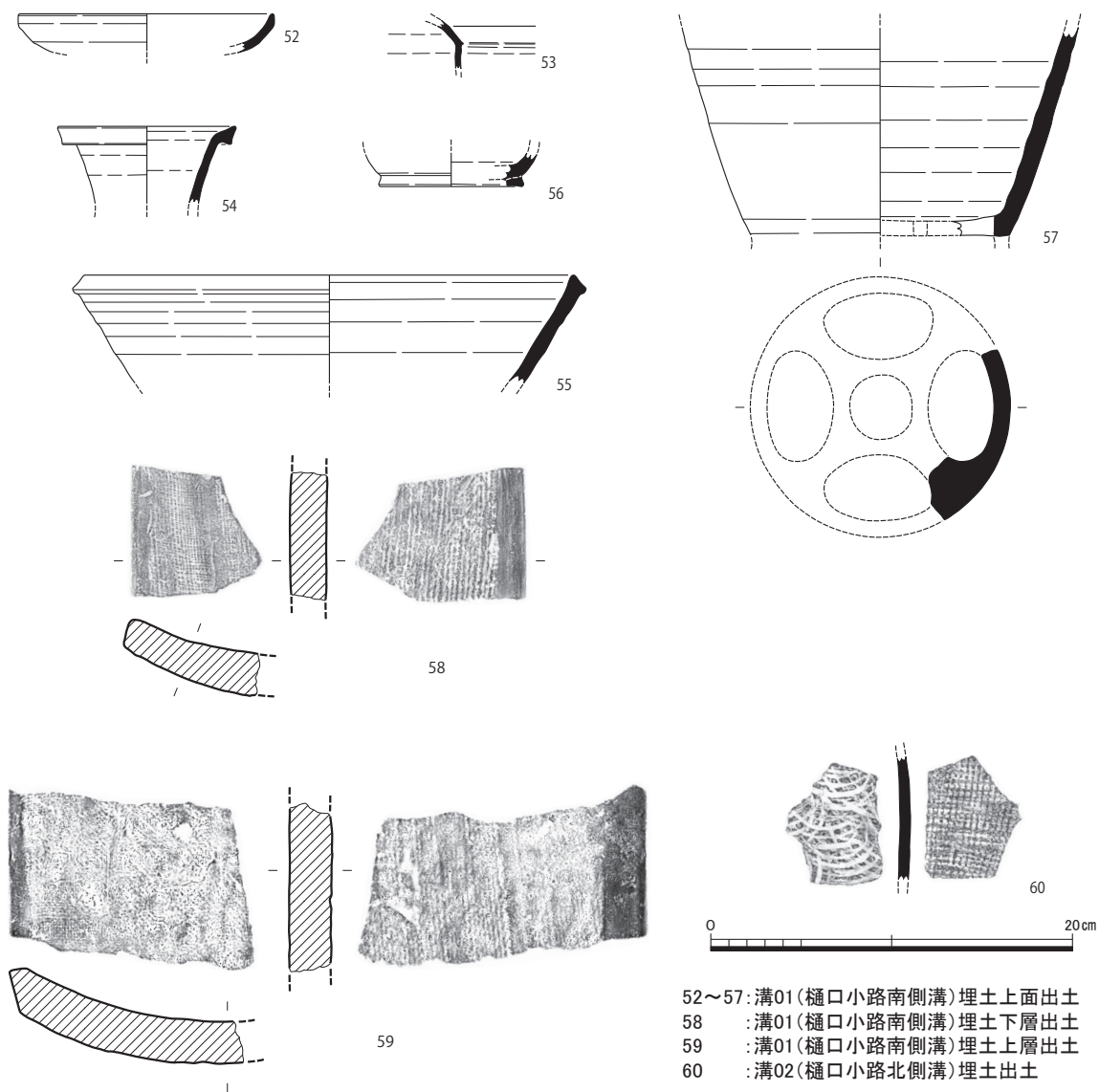


図19 出土遺物実測図3 (1:4)

55は盤Aである。口径27.0cmを測り、体部は直線的に逆ハの字形に開く。口縁端部は下方に若干拡張され、内傾する端面を形成する。体部内面の使用痕が顕著で、平滑に摩耗している。体部には粘土紐輪積み痕が残る。9世紀前半頃のものと考えられる。

[ 緑釉陶器 ]

56は壺の底部片で、長頸壺(壺L)と考えられる。底部外縁に角高台が貼付される。内外面に緑釉が施されるが、釉層はごく薄く風化により剥落が著しい。胎土は軟質で灰白色を呈する。9世紀代のもので洛北窯産と推定される。尚、本遺物は、路面27上から出土した緑釉壺(図20-75)とは接合はしないが、同一個体の可能性がある。

57は甑で、軟陶の初期緑釉陶器と思われる。底部径14.2cmを測り、口縁に向かって直線的に開く深い体部をもつ。高台は欠損している。器壁は厚く1.0cm内外を測る。底部には推定5カ所にヘラ切りによる(楕)円形の穿孔が行われている。施釉は体部外面のみに行われているが、釉は淡黄灰色を呈し、釉層は薄くムラがあって縞状を呈する。体部外面には軽い回転ヘラ削り痕、

内面にはロクロ痕とともに斜め方向の静止指ナデ痕が認められる。胎土は軟質で灰白色を呈する。洛北窯産で、8世紀末～9世紀初め頃の遺物と考えられる。本遺物は路面27上から出土した破片とも接合している。

#### 溝02出土遺物（図19-60）

溝02（樋口小路北側溝）からは土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がごく僅か出土しているが、何れも小片で図化できるものは少ない。

##### [ 須恵器 ]

60は甕である。体部の破片で、外面には格子目叩き痕、内面には同心円状の当て具痕が残る。9世紀代の遺物と考えられる。

#### 路面27出土遺物（図20-69～77）

路面27（樋口小路路面上）から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

##### [ 須恵器 ]

71は杯Bで、高台径9.0cmを測る。体部は底部から屈曲し斜め上方に立ち上がる。底部外面には回転ヘラ起こし痕を留め、断面逆台形の高台が体部との境付近に貼付されている。9世紀前半～中葉のものと考えられる。

72・73は壺Lである。72は無高台平底で、底径6.9cmを測る。体部外面下半には回転ヘラ削り調整が施され、底部外面に静止糸切痕が残る。9～10世紀代のものと考えられる。73は有高台の壺で、角高台が貼付される。高台径7.8cmを測る。体部外面下半には回転ヘラ削りの後ナデ調整が加えられている。9世紀代のものと考えられる。

##### [ 緑釉陶器 ]

74は皿で、口径12.6cmを測る。口縁は外面に稜を伴って大きく外反し、折縁皿に近い形状を呈する。体部外面にはヘラ磨き痕が施されている。釉はオリーブがかかった灰色で釉層は薄く、胎土は硬質で灰白色を呈する。9世紀後半、洛西窯産と推定される。

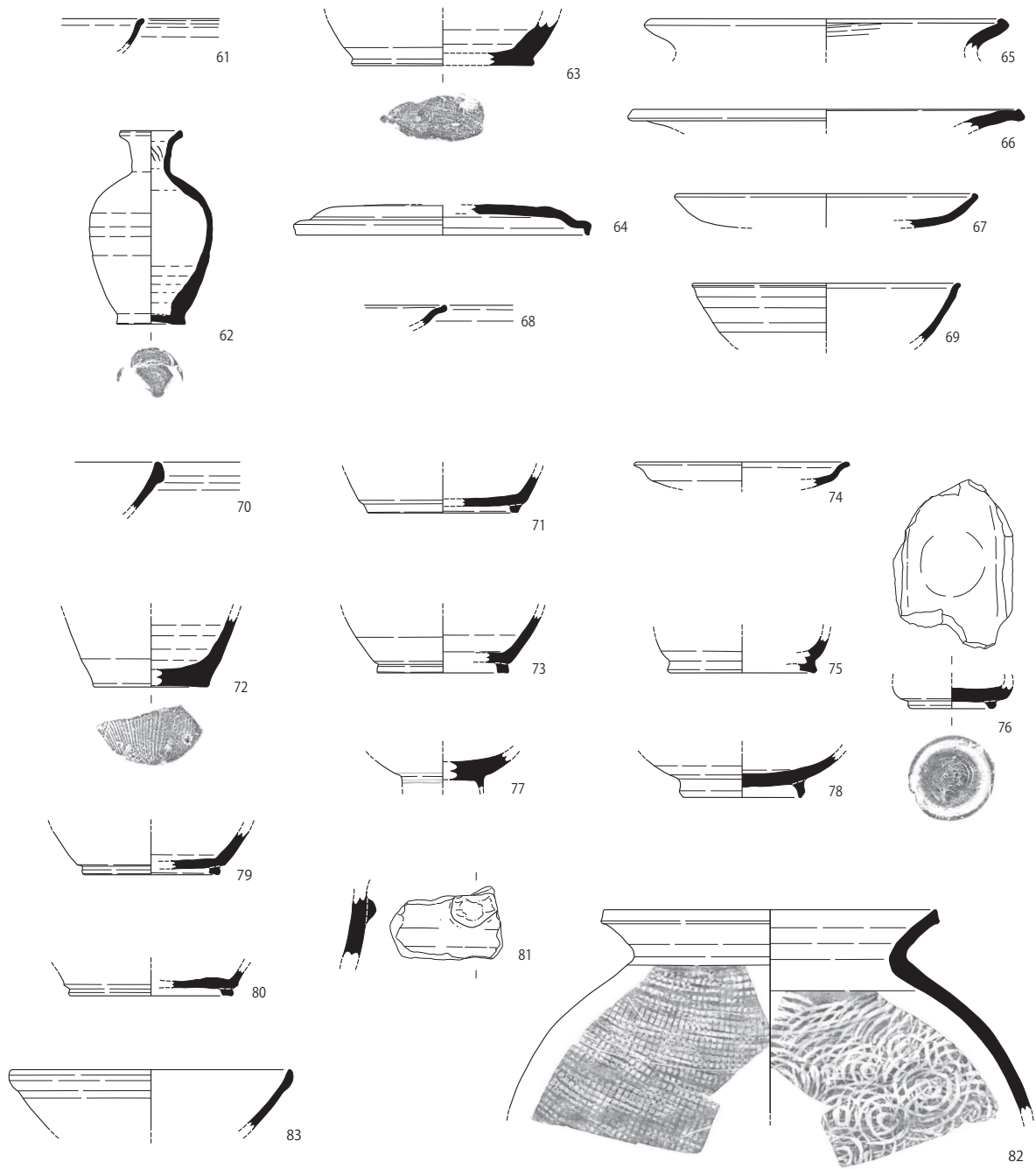
75は壺の底部片で、長頸壺と考えられる。高台径8.8cmを測る。底部外縁に角高台が貼付される。内外面に緑釉が施されるが、釉層はごく薄く風化により剥落が著しい。胎土は軟質で灰白色を呈する。9世紀代のもので洛北窯産と推定される。

##### [ 灰釉陶器 ]

76は耳皿である。口縁の両端を大きく内に曲げた皿であるが、口縁部は全て欠損している。丸みを帯びた断面逆台形の低い付高台を伴い、高台径は4.6cmを測る。底部は厚く外面には回転糸切痕が残る。内面のみに灰釉が施されているが、良く溶けていない。猿投窯産で、K-14窯式（9世紀前半～中葉）に比定できる。

##### [ 中国磁器 ]

69は口径16.0cmを測る白磁椀である。体部全体に張りをもつ器形で、口縁端部の外反は小さい。



61:溝03出土 62~67:溝04出土 68:溝11(耕作溝)出土  
 69~77:路面27(樋口小路)出土 78~83:包含層出土

図20 出土遺物実測図4 (1:4)

体部外面には口縁近くまで回転ヘラ削り調整が施される。胎土は白く緻密で、灰白色の釉が内外面に施される。大宰府分類・白磁V-1a類(11世紀後半~12世紀前半)に比定することができる。70は白磁玉縁椀である。口縁は外縁に厚く幅広い玉縁が作出され、端部は若干内彎する。体部には僅かな張りを伴い、外面には回転ヘラ削り調整が施される。灰色を帯びた白色の釉が内外面に施される。大宰府分類・白磁椀IV-1類(11世紀後半~12世紀前半)に比定できる。



### [ 染付磁器 ]

77 は染付磁器碗の底部で、削り出しによる高台と体部の境に 2 本の平行線が山呉須により描かれている。全面に施釉されるが、底部内面には幅 8 mm 程の蛇の目釉剥ぎが行われている。18 世紀代の肥前窯産で、今回の出土遺物の中では特に新しい時期のものである。後世の耕作などにより混入したものと考えられる。

### 溝 03 出土遺物 (図 20 - 61)

溝 03 からは土師器、須恵器、灰釉陶器が僅かに出土しているが、何れも小片で図化できるものは少ない。

### [ 灰釉陶器 ]

61 は碗である。体部には張りがあり口縁端部は短く外反する。全体に摩耗し施釉の状態は判然としない。猿投窯産で K - 14 窯式～ K - 90 窯式 (9 世紀代) に比定することができる。

### 溝 04 出土遺物 (図 20 - 62 ～ 67)

溝 04 から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

### [ 土師器 ]

65 は甕で、口径 21.2cm を測る。口縁は大きく外反して開き、端部は内に短く折れ曲げられる。口縁部外面には横ナデ、内面には横ハケが施される。9 世紀代のものと考えられる。

66 は口径 23.4cm を測る大型の高杯である。口縁は水平方向に大きく開き、口縁端部は短く上方に引き上げられ内傾する面を形成する。器面の調整は摩耗により判然としない。

67 は皿 A で、口径 18.0cm を測る。体部に丸い張りをもち、口縁は外反せず端部が短く内側に収められる器形である。体部外面にはヘラ削りが行われているようだが、摩耗により不明瞭である。66・67 はともに 1C 段階 (9 世紀前半) に比定できると考えられる。

### [ 須恵器 ]

64 は杯 B の蓋である。つまみを持たない器形と考えられ、口径 15.8cm を測る。口縁はハの字形に外反した後、短く垂下する。天井部外面には回転ヘラ起こし痕が残る。天井部内面には薄っすらと墨痕が認められ、転用硯として使用された可能性を示唆している。9 世紀中葉のものと考えられる。

62 は壺 M で器高 11.7cm を測る。体部は撫で肩の倒卵形を呈し、底部は突出した平底である。底部外面には回転糸切痕が残る。頸部は細長く、逆ハの字形に緩やかに開く形状で、口縁端部は面を形成せず丸く仕上げられる。この口頸部は二段構成によって体部に接合されている。体部内外面のロクロ目が顕著であるが、外面下半には回転ヘラ削り調整が施されている。9 世紀後半のものと考えられる。

63 は深い体部をもった鉢 D と考えられる。底部は若干下方に突出した平底で、底径 10.8cm を測る。底部外面には静止糸切りによると思われる切り離し痕が残る。9 世紀後半～末頃の遺物と

考えられる。

#### 溝 11 出土遺物 (図 20 - 68)

溝 11 (耕作溝) からは、須恵器、土師器の小片が数点出土したが、図化できたのは以下の 1 点である。その他の耕作溝、溝 08 ~ 10・12 ~ 14・20・21 から土師器、須恵器、黒色土器 B 類などの遺物の出土が見られたが、その量は極めて少なく小片で占められる。

##### [ 土師器 ]

68 は皿 A である。口縁部は短く外反し、端部は短く上方に引き上げられる。体部外面は指オサエ、口縁部は横ナデ調整が施される。2C 段階 (10 世紀初め) に比定できると思われる。

#### 包含層出土遺物 (図 20 - 78 ~ 83)

包含層からの出土した主要遺物については、次のものが見られる。

##### [ 須恵器 ]

79・80 は杯 B で、斜め上方に開く箱形の体部をもち、断面四角形の角高台を伴う。79 の高台径は 8.0cm、80 の高台径は 9.7cm を測る。高台は体部との境より若干内側に貼付されている。79 の底部外面には回転ヘラ削り調整、80 の底部外面には回転ナデ調整痕が認められる。また 80 の内面には顕著な使用痕が見られる。両者とも 9 世紀初め～前半の遺物と考えられる。

82 は大型の甕で、口径 20.0cm を測る。胴部は丸く張り、口頸部は外反し「く」字状を呈する。口縁端部は上下に僅かに拡張され、内傾する端面を形成する。口頸部の内外面は横ナデ調整が施される。胴部外面には格子目叩き、内面には同心円状の当て具痕が見られる。また内面には軽い横ナデが加えられる。体部内面は胎土の還元化が進んでおらず、淡赤灰色を呈している。9 世紀代のものと考えられる。

##### [ 緑釉陶器 ]

81 は甑の体部片である。外面に短い半球状の把手を貼付している。施釉は外面のみに行われているが、釉層は薄くムラがあり、淡灰緑色を呈している。体部内面は横ナデ調整が施されている。胎土は軟質で珪石粒を多く含むが、きめ細かである。洛北窯産の軟陶・初期緑釉陶器と考えられ、8 世紀末～9 世紀初め頃に比定できると思われる。溝 01 から出土した緑釉甑 (57) とは接合しないが同一個体の可能性がある。

##### [ 灰釉陶器 ]

78 は椀で高台径 7.0cm を測る。高台は付高台で断面三日月形を呈する。底部外面には回転ヘラ削り調整が行われている。施釉は体部内面上半のみに確認でき、ハケ塗りによっている。猿投窯産で、K - 90 窯式 (9 世紀後半) に比定できる。

##### [ 中国磁器 ]

83 は中国製の白磁玉縁椀である。口縁は外縁に幅広い玉縁が作出され、端部は若干内彎する。体部は僅かに張りを伴い、外面には回転ヘラ削り調整が施される。やや黄色味を帯びた乳白色の

釉が内外面に施される。大宰府分類・白磁椀Ⅳ - 2ac 類（11世紀後半～12世紀前半）に比定できると思われる。

註

- (1) 「延喜式」に規定される平安京の道路は、築地、犬行（犬走）、側溝、路面で構成され、幅は築地心から築地心までの距離で表記される。小路の場合、道路幅は4丈（約12 m）で（堀川小路、西堀川小路は8丈）、その内訳は築地幅半分2.5尺（約0.75 m）×2、犬行幅3尺（約0.9 m）×2、路面幅2丈3尺（約6.9 m）、側溝幅3尺（約0.9 m）×2である。1丈=10尺≒3.03 m
- (2) 『平安京右京六条三坊・平安京跡研究調査報告第20輯』（財）古代学協会 2004年
- (3) 「須恵器器種表」『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所 1982年

表5 出土遺物観察表

掲載番号	器種	器形	出土区	出土遺構・層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	推定時期	備考
1	土師器	杯 A	D-5・6	溝 01 埋土下層 (砂利層)	15.6	(3.3)	・	5 YR6/6 橙	1 C 段階 (9 世紀前半)	体部外面にヘラミガキ
2	土師器	杯 A	B-4	溝 01 埋土下層 (砂利層)	15.2	(3.4)	・	5YR7/4 にぶい橙	1 C 段階 (9 世紀前半)	体部外面にヘラ削り
3	土師器	杯 A	C-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(2.3)	・	5 YR6/6 橙色	1 C 段階 (9 世紀前半)	体部外面にヘラ削り
4	土師器	高杯	・	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(1.3)	・	5YR6/4 にぶい橙	1 C 段階 (9 世紀前半)	体部外面にヘラミガキ
5	土師器	高杯	D-4・5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(5.2)	・	7.5YR7/4 にぶい橙	1 C 段階 (9 世紀前半)	脚部棒芯巻付技法、面取り
6	土師器	壺	C-4	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(3.7)	4.6	5 YR6/6 橙	9 世紀	須恵器壺と同じクロロ成形による土師器
7	土師器	甕	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	17.3	(2.0)	・	10YR7/2 にぶい黄橙	9 世紀	外面に煤付着
8	土師器	壺?	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(2.2)	・	2.5Y7/6 橙	時期不明	小型複合口縁壺? 摩耗顕著
9	土師器	高杯	・	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(4.8)	・	10YR8/2 灰白	古墳時代後期	
10	須恵器	杯 B	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(1.3)	9.0	N7/0 灰白	9 世紀初頭	
11	須恵器	杯 A	A-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(1.7)	10.0	5Y7/1 灰白	9 世紀初頭	底部外面ヘラ切り
12	須恵器	杯	D-4	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(2.5)	・	N7/0 灰白	9 世紀	推定口径 17cm 前後の大型杯身
13	須恵器	壺 L	・	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(7.8)	・	N7/0 灰白	8 世紀～9 世紀初頭	三段構成による頸部接合。陶邑窯産?
14	須恵器	壺 L	A-5	溝 01 底面	・	(5.6)	7.4	2.5Y8/1 灰白	9 世紀前半	底部外面回転糸切痕
15	須恵器	壺 L	B-5	溝 01 底面	・	(2.8)	6.6	N7/0 灰白	9 世紀前半	底部外面回転糸切痕
16	須恵器	壺 L	C-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(3.0)	6.0	N5/0 灰	9 世紀初頭	底部外面ヘラ切り後ナデ
17	須恵器	壺 M	C-4	溝 01 埋土下層 (砂利層)	3.6	10.7	4.3	2.5Y7/1 灰白	9 世紀前半	
18	須恵器	壺 M	・	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(4.7)	3.9	N6/0 灰	9 世紀	底部外面糸切痕
19	須恵器	壺 M	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(4.4)	4.9	N7/0 灰白	9 世紀	底部外面糸切痕
20	須恵器	壺蓋	C-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	6.0	(1.0)	(天井) 6.3	N6/0 灰	8～9 世紀前半	天井中央の宝珠つまみ欠損
21	須恵器	甕 A	・	溝 01 埋土下層 (砂利層)	40.7	(3.5)	・	N4/0 灰	9 世紀	
22	須恵器	甕 A	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	18.0	(7.8)	・	N5/0 灰	9 世紀	胴部外面平行叩き後横方向のカキ目
23	須恵器	甕	B-4	溝 01 埋土下層 (砂利層)	20.3	(4.9)	・	N6/0 灰	9 世紀	
24	須恵器	鉢 D	B-5	溝 01 底面	・	(5.0)	15.5	N5/0 灰	8 世紀末～9 世紀初頭	底部内面に不定方向の指ナデ
25	須恵器	鉢 D	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(5.1)	12.0	N6/0 灰	8 世紀～9 世紀初頭	底部内面に不定方向の指ナデ
26	須恵器	壺 K 又は平瓶	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	・	(5.1)	・	N7/0 灰白	8 世紀後半～9 世紀前半	三段構成による頸部接合
27	土師器	土馬	B-5	溝 01 埋土下層 (砂利層)	長さ (6.6)	(3.8)	・	10YR8/3 浅黄橙	9 世紀	頭部、脚部、尾欠損
28	土師器	椀 A	D-5	溝 01 埋土上層 暗灰シルト	13.2	(2.0)	・	7.5YR7/4 にぶい橙	2A 段階 9 世紀中～後半	体部外面指オサエ
29	土師器	椀 A	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(1.6)	・	10YR8/3 浅黄橙	2A～2B 段階 9 世紀後半	体部外面指オサエ 口縁端部横ナデ
30	土師器	甕	D-5	溝 01 埋土上層 暗灰シルト	12.1	(2.3)	・	5YR6/3 にぶい橙	9 世紀	摩耗著しい
31	土師器	甕	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	25.2	(6.5)	・	10YR7/3 にぶい黄橙	9 世紀	胴部外面縦ハケ、口縁部横ハケ、胴部内面板ナデ
32	土師器	甕	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	25.0	(8.2)	・	10YR7/3 にぶい黄橙	9 世紀	胴部外面縦ハケ、口縁部横ハケ、胴部内面板ナデ
33	土師器	甕	C-5	溝 01 埋土上層 シルト	26.7	(7.3)	・	10YR7/3 にぶい黄橙	9 世紀	胴部外面縦ハケ、口縁部横ハケ、胴部内面板ナデ
34	黒色土器 A 類	甕	C-4	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(3.3)	・	10YR2/1 黒 10YR6/3 にぶい黄橙	9 世紀後半	内面に炭素吸着
35	緑釉陶器	皿	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	13.8	(2.0)	・	釉: 7.5Y6/2 灰オリーブ 7.5Y7/1 灰白	9 世紀中～後半	胎土は硬陶、釉層薄い。洛西窯産
36	灰釉陶器	皿	B-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	14.9	2.7	7.5	釉: 5Y6/3 オリーブ黄 5Y7/1 灰白	K-14 窯式 9 世紀前半～中	内面にのみ施釉、底部外面回転ヘラ削り、墨痕あり。猿投窯産
37	灰釉陶器	皿	B-4	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(1.8)	5.9	釉: 5Y6/4 オリーブ黄 2.5Y7/1 灰白	K-14 窯式 9 世紀前半～中	内面にのみ施釉、底部外面回転糸切後ナデ。猿投窯産
38	須恵器	杯	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(3.4)	・	2.5Y7/1 灰白	9 世紀	推定口径 15cm 以上の大型杯。胴部外面にヘラ削り。
39	須恵器	杯 B	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	11.9	3.9	7.1	N6/0 灰	9 世紀前半	底部外面回転ヘラ削り
40	須恵器	壺 M	C-4	溝 01 埋土上層 灰シルト	6.4	(2.7)	・	N7/0 灰白	9 世紀	
41	須恵器	壺 M	B-4	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(9.7)	5.3	N6/0 灰	9 世紀	底部外面糸切痕
42	須恵器	壺 L	D-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(4.6)	・	N6/0 灰	9 世紀後半	二段構成による頸部接合
43	須恵器	壺 L	B-4	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(2.9)	7.7	10YR7/1 灰白	9 世紀前半	

掲載番号	器種	器形	出土区	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	推定時期	備考
44	須恵器	壺 L	C-4	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(5.8)	7.6	N7/0 灰白	9 世紀前半	外面に厚い自然釉、 底部外面回転糸切り無調整。
45	須恵器	壺又は鉢	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(1.9)	12.0	N6/0 灰	9 世紀中～後半	底部外面は回転糸切り無調整。
46	須恵器	平瓶	B-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(3.2)	・	5Y7/1 灰白	8 世紀末～ 9 世紀前半	外面に厚い自然釉
47	須恵器	鉢 D	A-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	22.8	(6.2)	・	10YR7/1 灰白	9 世紀前半	胴部外面にヘラ削り
48	須恵器	鉢 D	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	・	(10.6)	・	N6/0 灰	8 世紀末～ 9 世紀初頭	有高台の鉢
49	須恵器	甕	B-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	15.7	(4.6)	・	N6/0 灰	9 世紀	
50	須恵器	手付壺	D-5	溝 01 埋土上層	(径) 2.0	(6.2)	・	N7/0 灰白	9 世紀	半輪状把手部、壺 X ?
51	中国白磁	端反椀	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	16.1	(4.6)	・	釉：N4/0 白 N9/0 白	15～16 世紀	埋土上面近くより出土
52	土師器	皿 N	C・D-5	溝 01 埋土上面	14.0	(2.1)	・	2.5Y8/2 灰白	5B 段階 (12 世紀 中～後半)	体部外面に指オサエ
53	須恵器	杯蓋 H	C・D-5	溝 01 埋土上面	・	(2.7)	・	N7/0 灰白	MT15 型式 (6 世紀前半)	
54	須恵器	壺 L	C・D-5	溝 01 埋土上面	9.8	(4.3)	・	N6/0 灰	9 世紀前半	
55	須恵器	盤 A (鉢)	C・D-5	溝 01 埋土上面	27.0	(6.0)	・	N6/0 灰	9 世紀前半	内面の使用痕顕著
56	緑釉陶器	壺	C・D-5	溝 01 埋土上面	・	(1.8)	7.9	釉：7.5Y6/3 オリーブ黄 10YR8/2 灰白	9 世紀	胎土は軟質、釉層薄い。洛北窯 産
57	緑釉陶器	甌	C・D-5 C・D-4	溝 01 埋土上面 路面 27 路面上	・	(11.5)	14.2	釉：7.5Y6/3 オリーブ黄 10YR8/2 灰白	8 世紀末～ 9 世紀初頭	釉層薄く、外面のみに施釉。初期 緑釉陶器
58	瓦	平瓦	D-4	溝 01 埋土下層 (砂利層)	長さ (7.6)	幅 (7.5)	厚さ (2.4)	N5/0 灰	9 世紀	凹面に布目、凸面に縦縄叩き、 稜骨痕ナデ消し
59	瓦	平瓦	C-5	溝 01 埋土上層 灰シルト	長さ (10.9)	幅 (13.9)	厚さ (2.3)	N3/0 暗灰	9 世紀	凹面に布目、凸面に縦縄叩き、 稜骨痕ナデ消し
60	須恵器	甕	D-3	溝 02 埋土 暗灰シルト	・	(6.9)	・	N6/0 灰	9 世紀	外面格子目叩き、内面同心円当 て具痕
61	灰釉陶器	椀	D-2	溝 03 埋土 暗灰シルト	・	(1.6)	・	N8/0 灰白	K-14～90 窯式 9 世紀	釉層薄く摩耗 痕投窯産
62	須恵器	壺 M	C-1・2	溝 04 埋土 灰黄砂礫シルト	3.6	11.7	4.0	5Y7/1 灰白	9 世紀後半	底部外面回転糸切痕、二段構成 による頸部接合
63	須恵器	鉢 D ?	D-1	溝 04 埋土 灰褐シルト	・	(2.7)	10.8	N8/0 灰白	9 世紀	底部外面糸切、無高台
64	須恵器	杯蓋	C-1・2	溝 04 埋土 灰黄砂礫シルト	15.8	1.8	・	N6/0 灰	9 世紀中葉	宝珠つまみを持たない。内面に 墨痕、転用靨
65	土師器	甕	D-1	溝 04 埋土 灰褐シルト	21.2	(1.9)	・	10YR5/2 灰白	9 世紀	口縁部内面に横ハケ
66	土師器	高杯	D-1	溝 04 埋土 灰褐シルト	23.4	(1.2)	・	7.5YR7/4 にふい橙	1 C 段階 (9 世紀前半)	
67	土師器	皿 A	D-1	溝 04 埋土 灰褐シルト	18.0	(2.1)	・	7.5YR7/4 にふい橙	1 C 段階 (9 世紀前半)	口縁部内へ丸く収める
68	土師器	皿 A	B-4	溝 11 (耕作溝) 埋土	・	(1.2)	・	2.5Y8/1 灰白	2 C 段階 (10 世紀初め)	体部外面指オサエ、口縁部短 く外反
69	中国白磁	椀	C・D-4	路面 27 路面上 (第 1 遺構面)	16.0	(3.6)	・	釉：5Y7/1 灰白 N8/0 灰白	11 世紀後半～ 12 世紀前半	大宰府分類 白磁 V - 1a 類
70	中国白磁	玉縁椀	A・B-4	第 5 層 (路面 27 路面上)	・	(2.9)	・	釉：10Y8/1 灰白 N8/ 1 灰白	11 世紀後半～ 12 世紀前半	大宰府分類 白磁 IV - 1a 類
71	須恵器	杯 B	C・D-4	路面 27 路面上 (第 1 遺構面)	・	(2.3)	9.0	N6/0 灰	9 世紀中葉	底部外面回転ヘラ起し
72	須恵器	壺 L	A・B-4	第 5 層 (路面 27 路面上)	・	(4.3)	6.9	N7/0 灰白	9～10 世紀	底部外面静止糸切痕 無高台
73	須恵器	壺 L	C・D-4	路面 27 路面上 (第 1 遺構面)	・	(3.5)	7.8	N7/0 灰白	9 世紀	
74	緑釉陶器	皿	C・D-4	路面 27 路面上 (第 1 遺構面)	12.6	(1.5)	・	釉：7.5Y6/1 灰 N8/0 灰白	9 世紀後半	胎土は硬陶、釉層薄い。洛西窯 産
75	緑釉陶器	壺	B-5・6	第 6 層 灰シルト (路面 27 路面レ ベル)	・	(2.2)	8.8	釉：10Y7/2 灰白 10YR8/2 灰白	9 世紀	胎土は軟質、釉層薄い。洛北窯 産
76	灰釉陶器	耳皿	C・D-4	路面 27 路面上 (第 1 遺構面)	・	(1.4)	4.6	釉：5Y6/2 灰オリーブ 2.5Y8/1 灰白	K-14 窯式 9 世紀前半～中	内面のみに施釉 底部外面回転糸切痕
77	染付磁器	椀	C・D-4	路面 27 路面上 (第 1 遺構面)	・	(2.1)	・	N8/0 灰白	18 世紀後半	内面蛇の目釉剥ぎ 肥前窯産、くらわんか手
78	灰釉陶器	椀	C・D-2	第 1 遺構面 (地山砂礫層上 面)	・	(2.7)	7.0	釉：5Y7/1 灰白 N8/0 灰白	K-90 窯式 (9 世紀後半)	ハケ掛けによる施釉。底外回転 ヘラ削り
79	須恵器	杯 B	・	第 4 層 (黄灰シ ルト)～第 5 層	・	(2.6)	8.0	N7/0 灰白	9 世紀初～前半	底部外面回転ヘラ削り
80	須恵器	杯 B	A-5	第 6 層 (暗灰褐 シルト)上面付近	・	(1.6)	9.7	N6/0 灰	9 世紀初～前半	底部外面ヘラ切り後ナデ
81	緑釉陶器	甌	・	第 4 層 (黄灰シ ルト)～第 5 層	・	(4.0)	・	釉：7.5Y5/3 灰オリーブ 2.5Y8/3	8 世紀末～ 9 世紀初頭	釉層薄くムラがある。低い半球 形の把手を伴う
82	須恵器	甕	C・D-2	第 1 遺構面 (地山砂礫層上 面)	20.0	(12.3)	・	外：N6/0 灰 内：5YR6/3 にふい黄橙	9 世紀	胴部外面格子目叩き、内面同 心円形当て具痕
83	中国白磁	玉縁椀	A-4	第 3 層～4 層	16.8	(3.6)	・	釉：7.5Y8/1 灰 白 N8/0 灰白	11 世紀後半～ 12 世紀前半	大宰府分類 白磁 IV - 2a 類



## 第Ⅳ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社  
松元美由紀 齊藤崇人 馬場健司

### はじめに

平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査では、平安時代の樋口小路の路面やその両側(南北)の側溝などの遺構が検出されている。

本報告では、溝覆土や調査区壁面にみられた堆積層を対象に、古植生や水田検証などを目的として、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

### 1 試料

分析に用いる試料は、いずれも調査区西壁断面より採取されている。西壁断面では、上位から第1層～第7層に分層されており、樋口小路南側溝は第6層、第7層を掘削して形成されており、第5層により覆われる。

花粉分析に用いる試料は、樋口小路南側溝の埋土下層から採取された試料1である。なお、本試料は灰褐色シルトからなり、採取層準は9世紀代の遺物包含層である。

植物珪酸体分析に用いる試料は、第7層から採取された試料2である。なお、本試料は暗灰色砂混じり粘土からなり、採取層準は無遺物層で堆積時期は不明である。調査所見から、平安時代以前の水田耕作土の可能性が指摘されている。

### 2 分析方法

#### (1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

#### (2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス

上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は10の位で丸めている（100単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

### 3 結果

#### (1) 花粉分析

結果を表6、図21に示す。樋口小路南側溝の試料1からは、花粉化石が豊富に産出するものの、保存状態はやや悪く、多くの花粉外膜が破損あるいは溶解している状態であった。

花粉化石群集は、木本花粉と草本花粉が同程度の割合で検出される。木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属が多く産出し、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科、ヨモギ属、タンポポ亜科

などを伴う。なお、多産するイネ科には、粒径が栽培種であるイネ属に似る個体も確認されたが、溶解の影響で表面構造を観察できないものも多く含まれていたため、区別していない。

表6 花粉分析結果

種 類	調査区西壁 樋口小路南側溝 埋土下層 試料1
<b>木本花粉</b>	
マキ属	3
モミ属	19
ツガ属	33
マツ属複維管束亜属	19
マツ属（不明）	29
コウヤマキ属	1
スギ属	28
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	5
クマシデ属—アサダ属	6
カバノキ属	6
ブナ属	1
コナラ属コナラ亜属	7
コナラ属アカガシ亜属	51
クリ属	3
ニレ属—ケヤキ属	7
エノキ属—ムクノキ属	1
キハダ属	1
<b>草本花粉</b>	
オモダカ属	1
イネ科	136
カヤツリグサ科	26
イボクサ属	1
ミズアオイ属	1
クワ科	3
サナエタデ節—ウナギツカミ節	3
アカザ科	8
ナデシコ科	2
アブラナ科	1
バラ科	1
アリノトウグサ属	1
セリ科	3
オオバコ属	3
ヨモギ属	10
ベニバナ属	1
キク亜科	1
タンポポ亜科	5
<b>不明花粉</b>	
不明花粉	10
<b>シダ類胞子</b>	
ゼンマイ属	3
他のシダ類胞子	89
<b>合 計</b>	
木本花粉	220
草本花粉	207
不明花粉	10
シダ類胞子	92
合計（不明を除く）	519

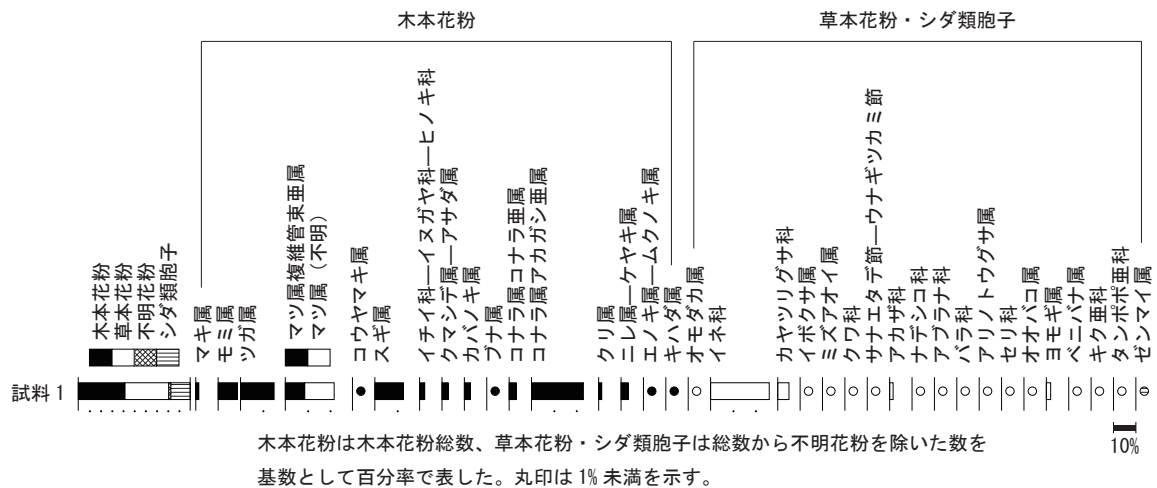


図21 調査区西壁 樋口小路南側溝における花粉化石群集

(2) 植物珪酸体分析

結果を表7、図22に示す。第7層の試料2からは植物珪酸体が検出されるものの、概ね保存状態が悪く、分類群数も少ない。植物珪酸体群集には、イネ属などの栽培植物は確認されず、クマザサ属やメダケ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、他にヨシ属や分類群が判別できない不明が認められる。

4 考察

平安時代以前とされる調査区西壁の第7層(試料2)は、調査所見で水田耕作土の可能性も指摘されたが、植物珪酸体分析を実施した結果、栽培種のイネ属は検出されなかった。今回の結果を見る限り、第7層で稲作が行われた可能性を積極的に支持することは難しい。また、第7層では、植物珪酸体の保存状態が悪かったが、植物珪酸体は溶解性・安定性が堆積環境、特に化学的要素に左右される(近藤,2010)。タケ亜科の産出

表7 植物珪酸体含量

種類	調査区西壁 第7層 試料2
イネ科葉部短細胞珪酸体	
クマザサ属	1,400
メダケ属	1,000
タケ亜科	8,600
不明	4,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
クマザサ属	1,200
メダケ属	1,400
タケ亜科	9,700
ヨシ属	400
不明	5,000
合計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	14,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	17,600
植物珪酸体含量	32,500
イネ科起源(その他)	
棒状珪酸体	**
長細胞起源	*
毛細胞起源	*

1) 含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。

2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

3) - : 未検出、\* : 含有、\*\* : 多い。

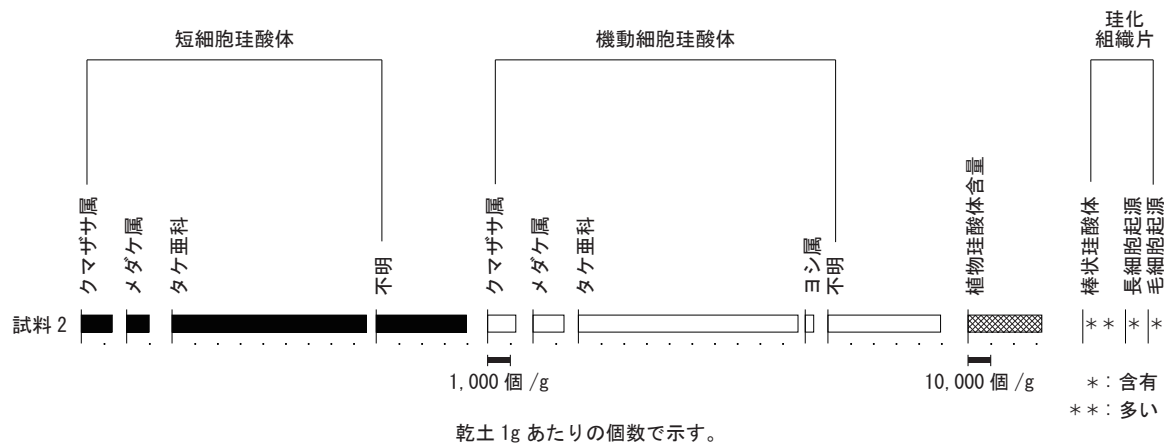


図22 調査区西壁 第7層における植物珪酸体含量

が目立ったが、これについては、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤,1982;杉山・藤原,1986）、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。よって、第7層では植物珪酸体が残留しにくい中で、タケ亜科が土層中に相対的に多く残ったために、その産出が目立つ結果になったと考えられる。したがって、第7層にイネ属の植物珪酸体が混入していたとしても、現代までに溶解し消失してしまった可能性も否定できない。今後、花粉分析や種実分析による検証が望まれる。

なお、検出された植物珪酸体の分類群からは、第7層が形成された当時に少なくともクマザサ属やメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属が生育していた可能性が考えられる。ヨシ属が湿潤な場所に生育することを考慮すれば、第7層が形成された頃に調査区内外に湿潤な場所が存在した可能性がある。この点については、周辺の微地形の状態などの発掘調査所見とともに、調査区内外に分布する当該期の堆積物を対象とした珪藻分析により水域の状況に関する情報を得て、検討する必要がある。

一方、9世紀の遺物包含層とされる調査区西壁の樋口小路南側溝（試料1）は、花粉分析の結果、木本類ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹が多く、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などの落葉広葉樹を伴う。マツ属は生育の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから二次林の代表的な種類である。スギは、現在では植栽を除けば山沿いの谷筋などに分布することが多いが、埋没林や遺跡出土材の調査によって、かつては扇状地や低地などにも分布していたことが明らかになっている（鈴木,2002）。このことから、周辺の森林植生は、山地や丘陵にアカガシ亜属などの常緑広葉樹が生育し、扇状地面や谷筋、谷頭など土壌が不安定な場所では、スギ属をはじめ、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹、クマシデ属一アサダ属、コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などの落葉広葉樹が生育していたと考えられる。なお、マツは有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安時代の邸宅の庭園でも植栽されていたことが文献等の調査により明らかにされている（飛田,2002）。京都盆地においても、宅地域では、9～10世紀にかけて増加が始まっている事例があり（バリノ・サーヴェイ株式会社,2009,2012a,2012bなど）、宅地域を中心にマツ属が植栽されていた可能性が

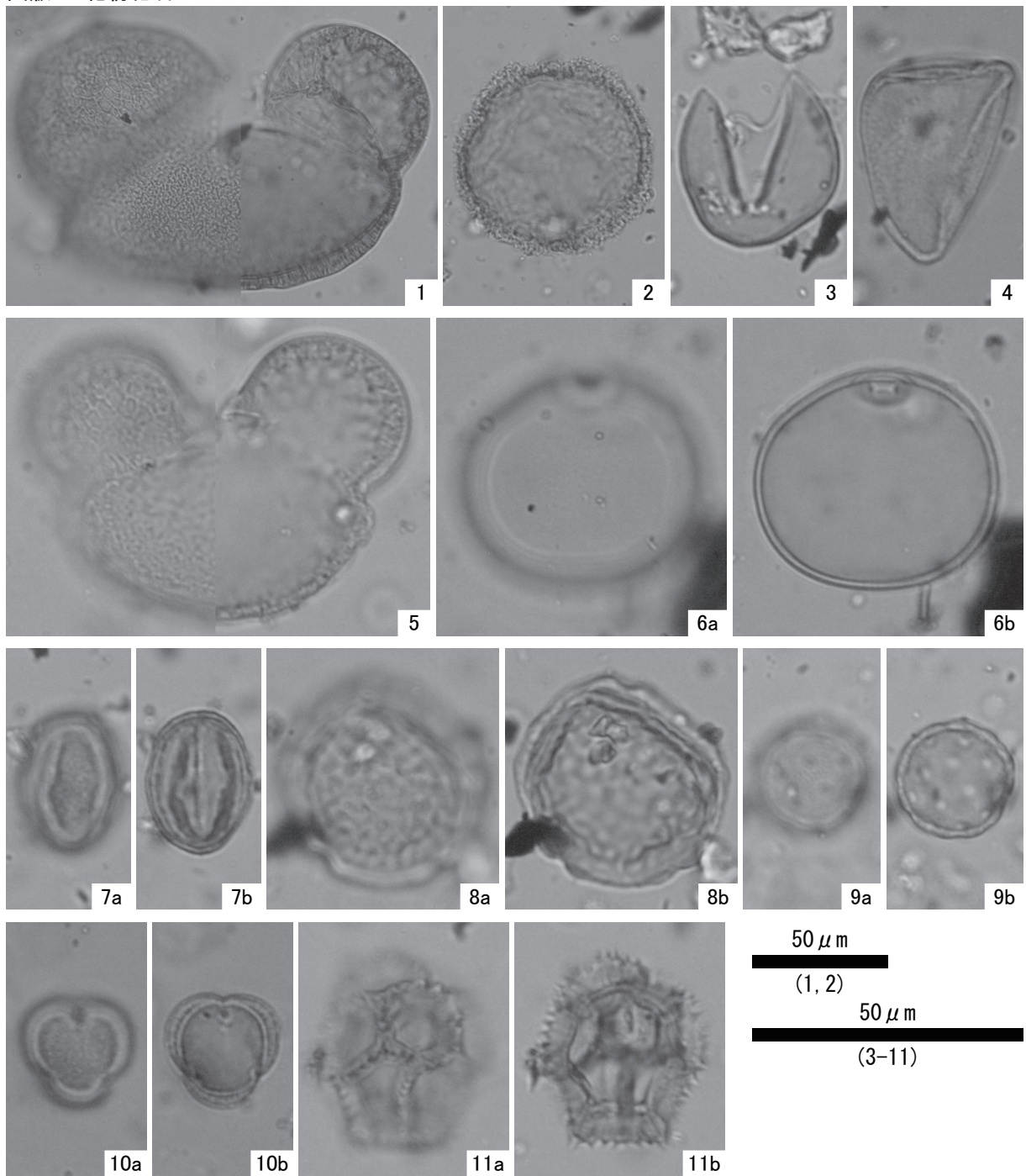
ある。

草本類ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、アカザ科、ヨモギ属、タンポポ科などが認められた。これらはいずれも開けた明るい場所に生育する種を多く含む分類群であることから、側溝周辺の草地などに由来すると考えられる。また、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの水湿地生植物は、側溝周辺あるいは集水域の湿地部などに生育していた可能性がある。栽培植物は、イネ科花粉中にイネ属の可能性がある個体が含まれるほか、ベニバナ属なども認められた。イネやベニバナが栽培・利用されていた可能性が指摘される。

#### 〈引用文献〉

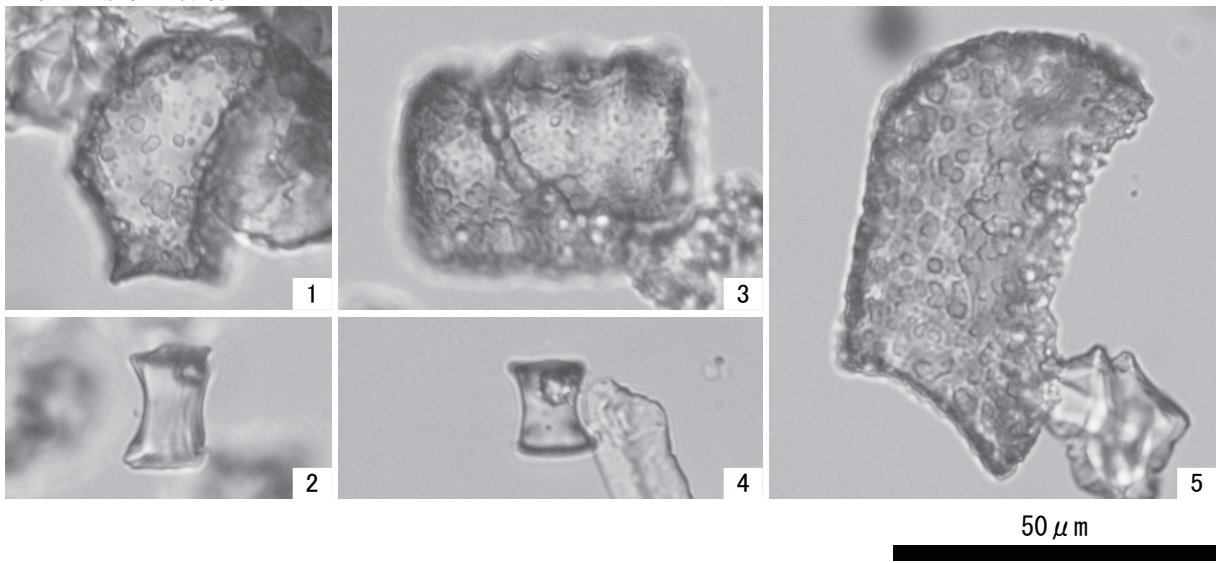
- ・藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.
- ・飛田範夫,2002,日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.
- ・近藤鍊三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書,32p.
- ・近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- ・三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- ・中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第12,13集,91p.
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社,2009,付論1 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-4平安京右京三条三坊三町跡,(財)京都市埋蔵文化財研究所,44-62.
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社,2012a,6.付論 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-4平安京右京三条三坊四町跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,46-51.
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社,2012b,6.付章 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-23平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,49-62.
- ・鳥倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録第56集,60p.
- ・杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-.考古学と自然科学,19,69-84.
- ・鈴木三男,2002,日本人と木の文化.八坂書房,255p.





- |                              |                            |
|------------------------------|----------------------------|
| 1. モミ属 (樋口小路南側溝; 試料1)        | 2. ツガ属 (樋口小路南側溝; 試料1)      |
| 3. スギ属 (樋口小路南側溝; 試料1)        | 4. カヤツリグサ科 (樋口小路南側溝; 試料1)  |
| 5. マツ属 (樋口小路南側溝; 試料1)        | 6. イネ科 (樋口小路南側溝; 試料1)      |
| 7. コナラ属アカガシ亜属 (樋口小路南側溝; 試料1) | 8. ニレ属—ケヤキ属 (樋口小路南側溝; 試料1) |
| 9. アカザ科 (樋口小路南側溝; 試料1)       | 10. ヨモギ属 (樋口小路南側溝; 試料1)    |
| 11. タンポポ亜科 (樋口小路南側溝; 試料1)    |                            |

図23 花粉化石写真



1. クマザサ属機動細胞珪酸体 (第7層; 試料2)
2. クマザサ属短細胞珪酸体 (第7層; 試料2)
3. メダケ属機動細胞珪酸体 (第7層; 試料2)
4. メダケ属短細胞珪酸体 (第7層; 試料2)
5. ヨシ属機動細胞珪酸体 (第7層; 試料2)

図24 植物珪酸体写真

## V章 総括

今回の発掘調査では、平安京の条坊及びこれに付随する良好な遺構を検出することができた。最後にこれまでの記述と重複するところもあるが、その成果について総括してみたい。

### 1 条坊遺構について

平安京の条坊に関する遺構は、平安時代前期の樋口小路路面（路面27）とその南北両側溝（溝01、溝02）である。調査の結果、これらの条坊遺構は京都市埋蔵文化財研究所が提示している平安京街路復元ラインよりも全体に約1.5m南にずれていることが判明した。

路面27は溝01、02によって区画された東西方向に延びる道路で、路面幅は5.0～5.5mを測る。この幅は「延喜式」で規定された小路の幅二丈三尺（約6.9m）よりも狭いものとなっているが、これは特に南側溝（溝01）の拡幅によって生じた結果と理解できる。しかし、南北両側溝の心・心間が示す距離から見ても、この路面は当初から「延喜式」の規定よりも狭く造られた可能性が高いと推定され、平安京の基本設計である「延喜式」と、現場での実施設計は必ずしも一致しなかったことを示す一つの事例であるといえよう。また路面27において注目すべきことに、北側溝（溝02）に近接した一部の範囲で礫敷きが認められたことが挙げられる。これは直径1～3cmの円礫を敷き固めたもので、状況から人為的に行われた舗装跡と推定された。平安京での同様の事例は幾つか報告されており、左京では北小路（自然堆積の砂礫面に泥砂土と小礫によって路面形成）<sup>(1)</sup>、烏丸小路（浅い窪地に小礫を入れ路面を整える）<sup>(2)</sup>、六条坊門小路（泥砂土と小礫の混じった土層で路面形成）<sup>(3)</sup>、坊城小路（東側溝に沿って礫敷きの路面形成）<sup>(4)</sup>、右京では中御門大路と恵止利小路の交差点（地山の黄褐色粘土直上に径1～2cmの礫や瓦、須恵器片を敷く）<sup>(5)</sup>、西堀川小路（小礫を密に混入し固く締まる路面形成）<sup>(6)</sup>などを挙げるができる。今回の事例は、上記烏丸小路の如く、溝02の南肩に生じた窪地や泥濘を整地する目的で行われた部分補修痕と捉えておきたい。路面27の標高は23.1m前後と一定しており、本調査区の東方、六条三坊七町～十町の調査で検出された樋口小路路面レベル22.7～23.1m、轍跡が見つかった馬代小路との交差点近くの路面レベル22.8mと大差無い値を示していることが確認できる<sup>(7)</sup>。

樋口小路南側溝である溝01は、幅2.2～2.4mと「延喜式」の規定三尺よりもかなり広いものとなっていたが、これは先述のように溝の北肩（道路側）、南肩（二町宅地側）がそれぞれ掘り広げられた結果によることが判明している。溝底レベルは、溝の東端で22.74m、西端で22.61mと僅かながら西側が低く、排水の方向を示唆しているようにも思われる。そこで周囲の既往調査について確認してみると（図25）、本調査区の東に近接した六条三坊二町の調査で検出された樋口小路南側溝（SD15）の溝底レベルは22.85m前後で、溝01より更に高い数値を示している<sup>(8)</sup>。また先の六条三坊七町・八町地内の調査では、平安時代初期には、自然流路を利用して開削された川（SR4200、幅2.5～7m、深さ1～1.8m）が、一部樋口小路、馬代小路と重なるように存在していたことが明らかになっている<sup>(9)</sup>。一方、調査区の東方、右京六条二坊十五町の調査では、道祖大路の路面を開



削し排水処理機能を向上させた川（SD3）が検出されているが<sup>(10)</sup>、出土遺物から平安中期以降の遺構とされており、平安前期の遺構である溝01よりも後出のものである。こうした状況から推察すると、溝01の流水は、平安京初期の基幹水路の一つ、東側の西堀川方面ではなく、東から西に向かい、宇多小路側溝を経て、最終的にはSR4200（あるいはSR4200埋戻し後、条坊に沿って再掘削されたSR0001）に合流し、馬代小路の一部を南下するように京域外に排出された可能性が高いと考えられる<sup>(11)</sup>。溝01の埋土の堆積状況は、当初はかなりの水流があり、十分な排水機能を有していたが、砂利の堆積が進むにつれ滞水が顕著となり、やがて泥土によって徐々に埋没していったことを物語るものであった。埋没の過程で、排水機能を回復する為、少なくとも2回の拡幅工事が行われたが、その効果は限定的だったようである。溝01埋土下層からの出土遺物の多くは、ほぼ8世紀末から9世紀前半までに帰属する土師器、須恵器で占められているが、埋土上層では、9世紀後半に帰属するものも含まれるようになり、下層では見られなかった緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器A類なども目立つようになっている。また上層出土遺物の中には、確実に10世紀代まで下ると判断できる遺物は確認できなかったことから、溝01は遅くとも9世紀初頭の時点では開削されており、9世紀末～10世紀初め頃には埋没したものと推定される。

樋口小路北側溝である溝02は、幅1.3～1.5m、溝底レベル22.9m前後と、溝01に比して狭く浅いもので、埋土の状況は常時滞水状態にあったことを窺わせるのであった。このことは、溝02は条坊の区画程度の機能しか有さず、少なくとも周辺の樋口小路においては、当初から一貫して南側溝が殆ど全ての排水機能を担っていたことを物語る。平安京においては、条坊側溝は概して南北方向の溝では東側溝の幅が広く、東西方向の溝は北側溝の幅が広い傾向が見られることが指摘されており<sup>(12)</sup>、これは北東が高く南西に低い京都盆地全体の地形的特性からみて首肯できるものである。しかし今回の事例はその逆であり、先述した右京六条三坊二町の発掘調査で検出された樋口小路南側溝（SD15）でも幅約2.5mと今回と同等の規模をもっていたことが報告されている<sup>(13)</sup>。その理由について現段階では明確な答えを見出すことはできないが、可能性の一つとして、地山の土質の問題（道路南側はシルト土を基盤としており、硬い砂礫層を基盤とする北側よりも工事が容易だったこと）を挙げることができよう。さらに敢えて想像を逞しくすれば、樋口小路を挟んだ一町側住人と二町側住人の社会的関係性を反映した事象との見方もできるかも知れない<sup>(14)</sup>。

この他、条坊制遺構を構成する要素の一つに築地がある。溝02と一町側宅地の内溝（雨落ち溝）と考えられる溝03、04の間には幅約2.5mの空間があり、「延喜式」に規定する築地幅五尺（約1.5m）が構築される余地は十分に存在していたが、今回築地の存在を示す痕跡は確認できず、その実態を明らかにすることはできなかった。ただし、調査区全体からの瓦の出土が極めて少ないことが指摘でき、少なくとも当該地における築地には瓦の使用は無かったものと考えられる。

## 2 路面の巷所化

平安京右京域の衰退が早くから始まっていたことは良く知られた事実であり<sup>(15)</sup>、これは洪水氾濫が頻発する当時の右京の湿潤な環境が原因とされる<sup>(16)</sup>。右京六条三坊地内の発掘調査に限って

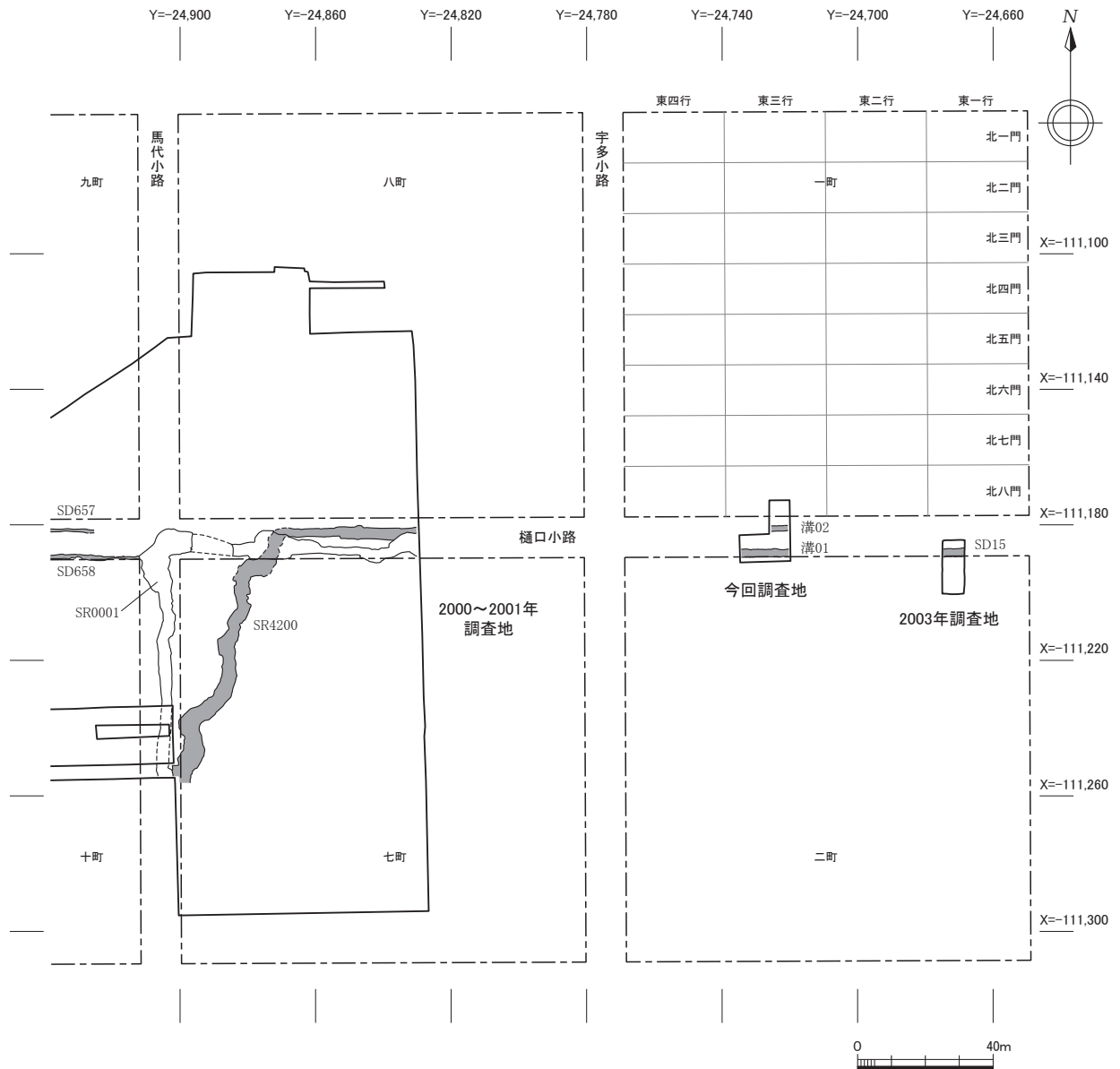


図25 既往調査区検出遺構との関係（1：2,000）

見ても（第Ⅱ章 表1 周辺発掘調査の一覧参照）、これまでに検出された建物遺構は、ほぼ9世紀初めから後半の時期に限定され、10世紀代以降は宅地としては殆ど活用されていなかった実態が見て取れる。前述のとおり、今回の調査区内でも樋口小路南側溝である溝01は、こうした周辺宅地の衰退と軌を一にするように、9世紀末あるいは10世紀初めには埋没しており、これに伴い路面27の条坊道路としての機能も徐々に失われていったと思われる。今回調査で検出した溝05～23は、樋口小路が道路としての意義を無くし、巷所化（耕作地化）したことを示す耕作溝群であると考えられる。巷所化が始まったのは、遺構検出状況から、溝01が完全に埋没した9世紀末～10世紀初頭以降であることは確実である。一部の耕作溝埋土からは土師器、須恵器等の小片の出土がごく僅か認められたが、遺構の性格上、ここから帰属時期を導き出すには慎重を要する。しかし溝14埋土から小片ながら黑色土器B類が出土していることは注目して良く、これら耕作溝群は10世紀中葉～11世紀代に帰属する可能性が高いと考えられる。また溝05～10に近い路面27の路面覆土から中



国製白磁椀（図20 - 69・70）、溝01埋土上面から5B～6A段階の土師器皿（図19 - 52）が出土しており、寧ろこれらの遺物を積極的に評価すれば、12世紀代の可能性も残されていることを付言しておく。

以上、今回の発掘調査は、調査面積180㎡と限られた範囲を対象としたものであったが、平安時代前期の樋口小路に係る良好な遺構、その成立時期と廃絶過程、樋口小路が巷所化することを示す遺構などを明らかにすることができ、平安京研究の上で貴重なデータを得ることが出来たと言える。一方、今回の調査地は西院遺跡の推定範囲内にも相当し、第2面で平安時代を遡る遺構の検出が期待されたが、そうしたものは全く確認することは出来なかった。西院遺跡に繋がるものを敢えて挙げるとすれば、ごく僅かに出土した古墳時代の須恵器、土師器があるが、実態の解明については程遠く課題を残す結果となった。今後周辺の調査が進展し、様々な歴史的課題がさらに解明されることを期待したい。

#### 註

- (1) 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ・本文編』1977-1981年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
- (2) 「平安京左京九条三坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- (3) 「平安京左京六条三坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- (4) 『平安京左京三条一坊四・五町跡』（有）京都平安文化財 2019年
- (5) 『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- (6) 『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡』（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- (7) 『平安京右京六条三坊 - 平安京跡研究調査報告第20輯』（財）古代学協会 2004年
- (8) 報告書図版から算出。『平安京右京六条三坊二町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- (9) 註（7）に同じ。尚SR4200の存続期間は短かったと推定され、やがて条坊に規制されるように、樋口小路、馬代小路路面を河川化したSR0001が再掘削されている。
- (10) 「平安京右京六条二坊2」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- (11) 馬代小路の路面が流路化した遺構は、南の右京六条三坊六町の調査でも確認されているが（SD35）、その時期は平安時代後期と報告されている。『平安京右京六条三坊六町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- (12) 増味康彰ほか「平安京の堀川、溝による雨水排除の評価」『建設工学研究所報告（35）』 神戸大学 1993年
- (13) 註（8）に同じ。
- (14) 平安時代前期の右京六条三坊一町、二町における具体的な住人像は明らかになっていないが、四町内の発掘調査では、兵衛、衛門府の次官を表す「佐」と書かれた墨書土器が出土しており、宅地占有の変遷の分析から9世紀前半には三位以上の位階に上がった人物の居住が推定されている。『平安京右京六条三坊 - ローム株式会社社屋新築に伴う調査 -』 古代文化調査会 1998年
- (15) 右京の衰退を記した著名な史料に、慶滋保胤の「池亭記」（天元5年・982年）がある。ここには「右京卑湿」とあり、平安中期以降右京が荒廃していく様と、左京四条以北に住居が集中したこと等が記されている。
- (16) 河角龍典「平安京の地形環境と災害」『歴史災害と都市 - 京都・東京を中心に -』 立命館大学 2007年

# 図 版





1. 第1面調査後の調査区全景（真上から・上が北）



2. 第1面調査後の調査区全景（真上から・上が西）





1. 第2面調査後の調査区全景（真上から・上が西）



2. 第2面調査後の調査区と周囲の景観（東側上空から）





1. 溝01、耕作溝群の検出状況（西から）



2. 第1面調査後の調査区南半（西から）





1. 第1面調査後の調査区南半（北西から）



2. 第1面調査後の調査区全景（南西から）





1. 第1面調査後の調査区全景（南東から）



2. 溝01、溝02、路面27完掘状況（北東から）





1. 溝01、溝02、路面27、溝03、溝04完掘状況（北から）

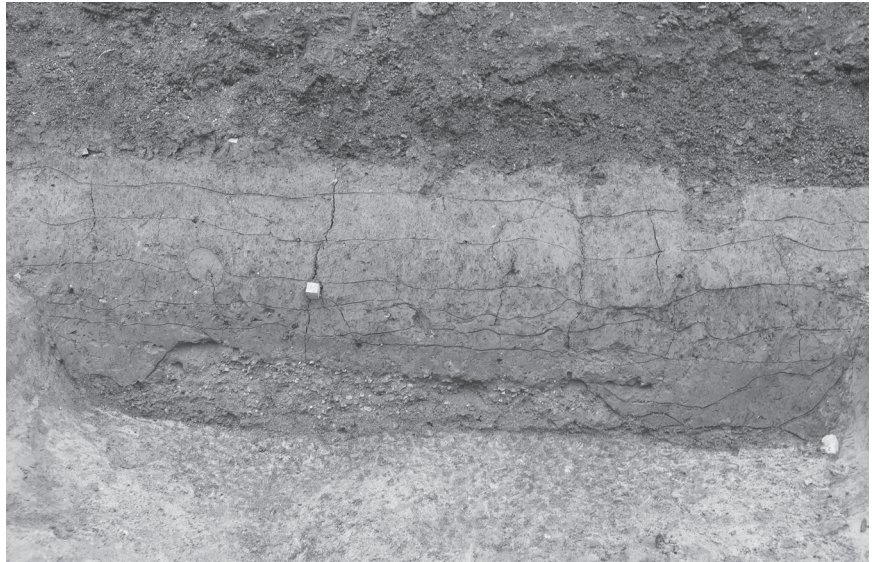


2. 第2面調査後の調査区全景（南西から）





1. 溝01西端壁面埋土断面（東から）



2. 溝01東端壁面埋土断面（西から）

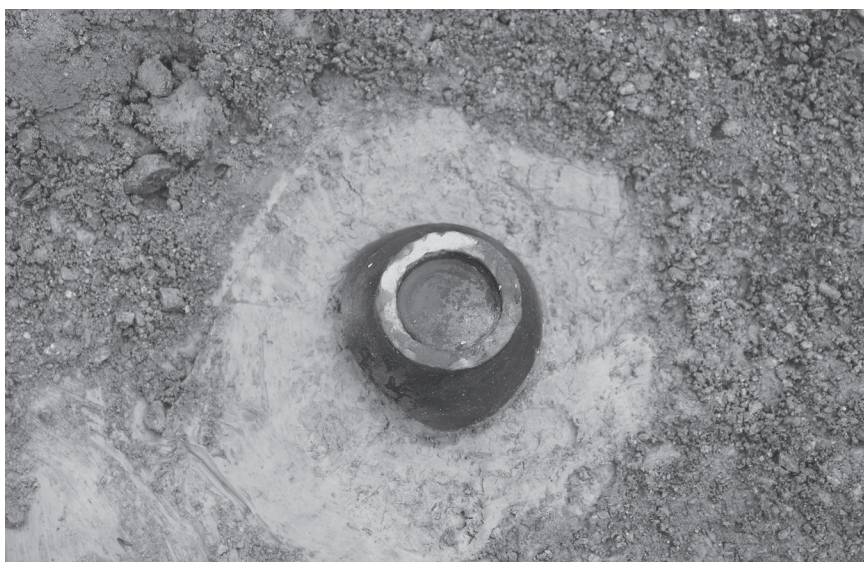


3. 溝01埋土断面（西側観察ベルト、西から）





1. 溝01埋土須恵器壺M出土状況



2. 溝01底面須恵器壺L出土状況



3. 溝01埋土土師器甕出土状況





1. 溝01の底面（東から）



2. 路面27路面上の耕作溝群（南東から）





1. 溝02、路面27礫敷き部（右）検出状況（西から）



2. 溝02完掘状況（東から）



3. 溝02東端壁面埋土断面（西から）





1. 路面27 磔敷き部全景 (西から)



2. 路面27 磔敷き部全景 (東から)



3. 路面27 磔敷き部断割り断面 (東から)





1. 溝03、溝04完掘状況（西から）



2. 溝03、溝04完掘状況（東から）

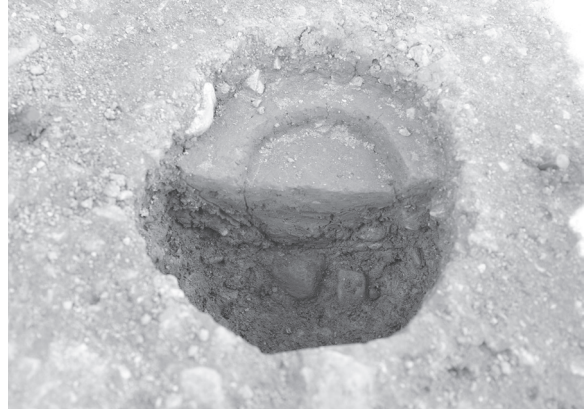


3. 溝03、溝04西壁埋土断面（東から）





1. P25の検出状況（東から）



2. P25埋土半裁状況（南から）

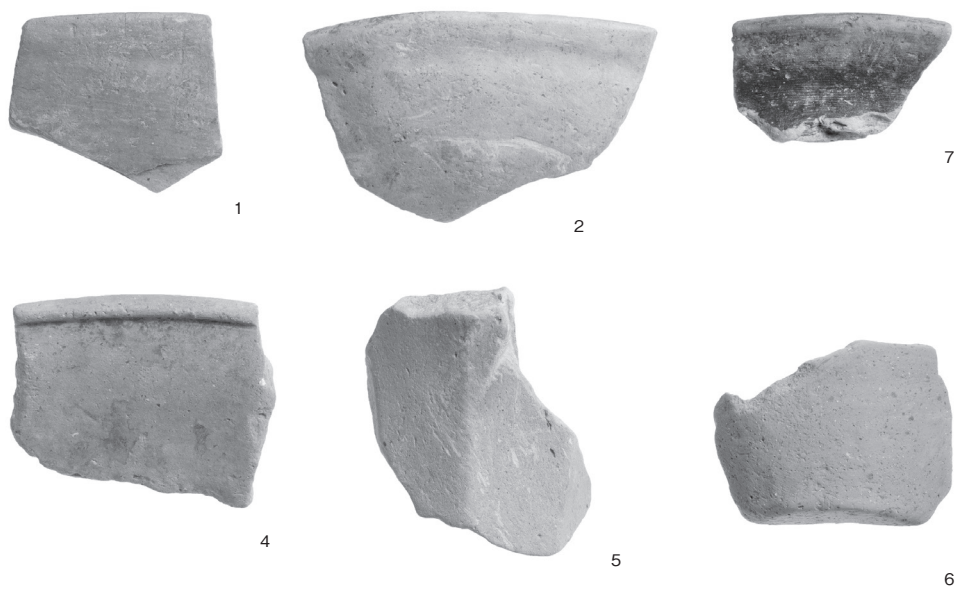


3. 調査区西壁土層断面（北東から）

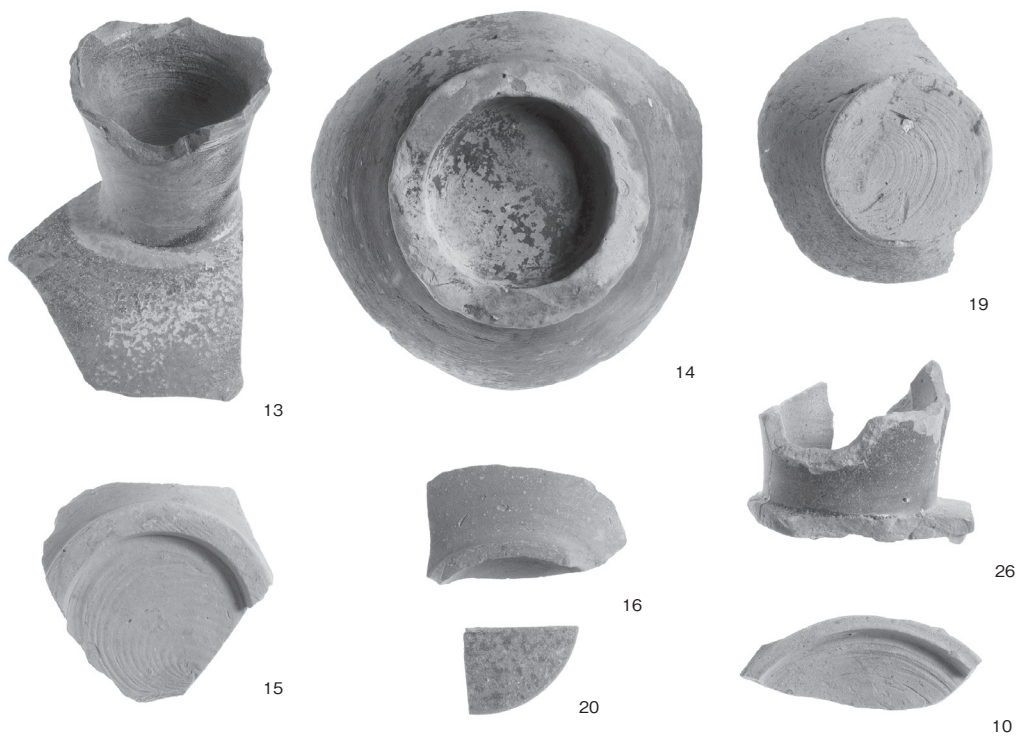


4. 調査区東壁土層断面（南西から）

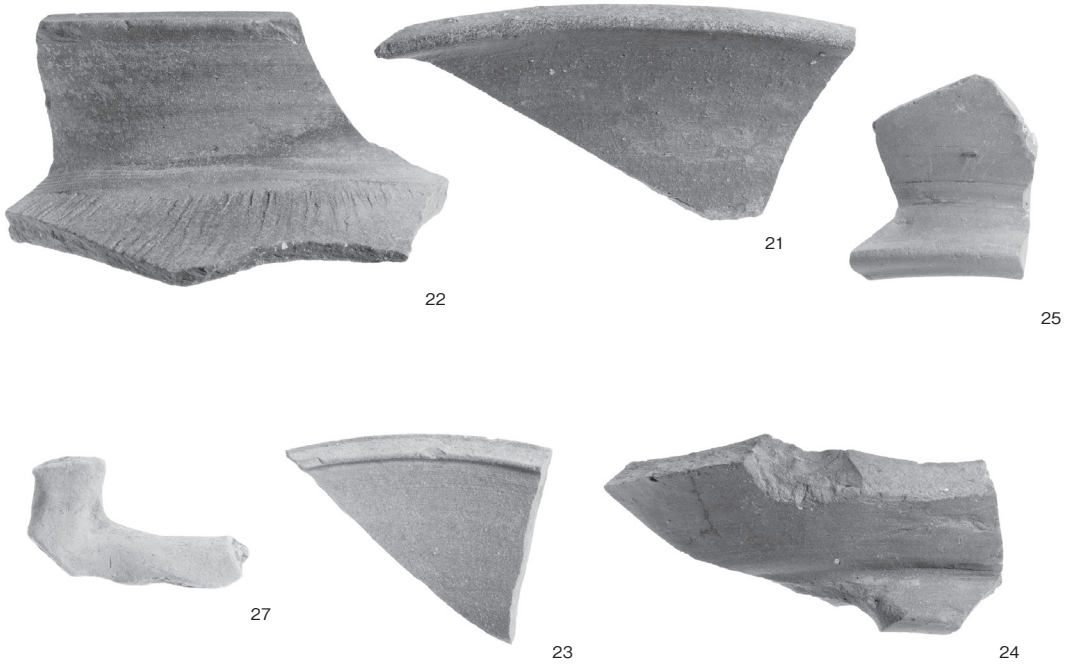




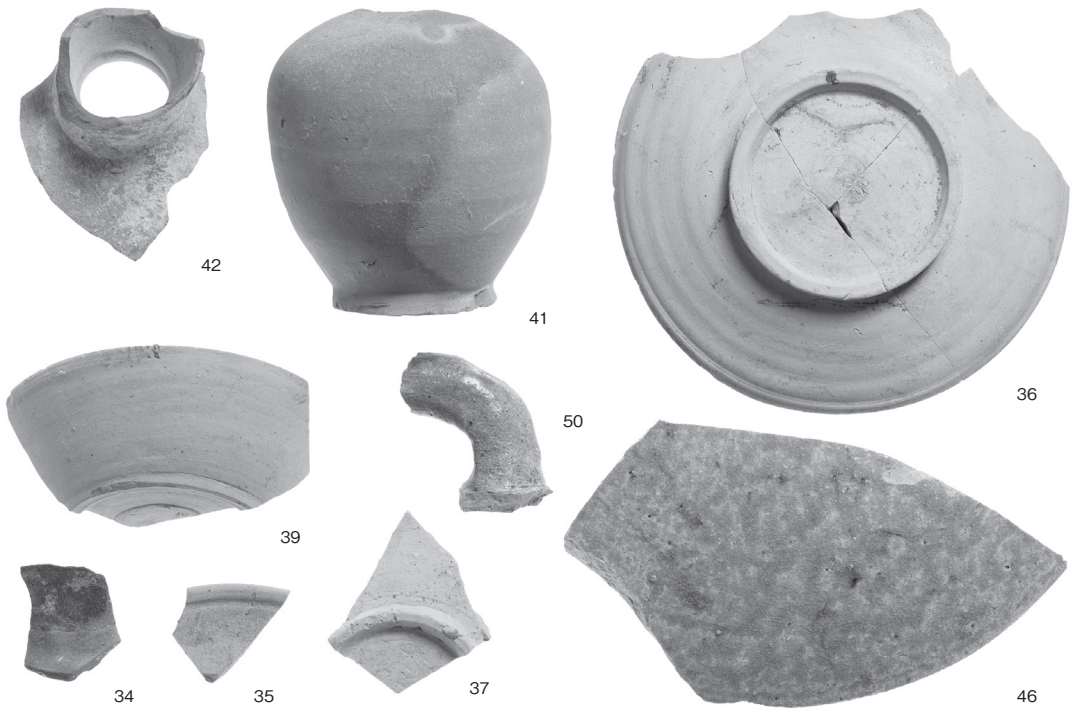
1. 溝01下層 (1 · 2 · 4 · 5 · 6 · 7)



2. 溝01下層 (10 · 13 · 14 · 15 · 16 · 19 · 20 · 26)



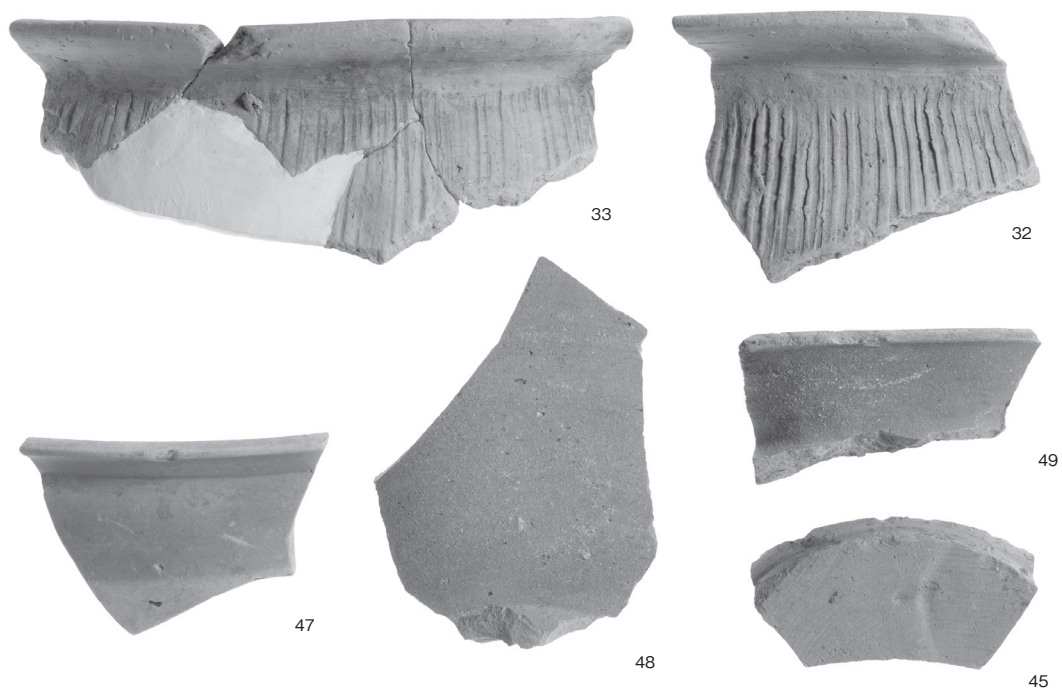
1. 溝01下層 (21 · 22 · 23 · 24 · 25 · 27)



2. 溝01下層 (34 · 35 · 36 · 37 · 39 · 41 · 42 · 46 · 50)

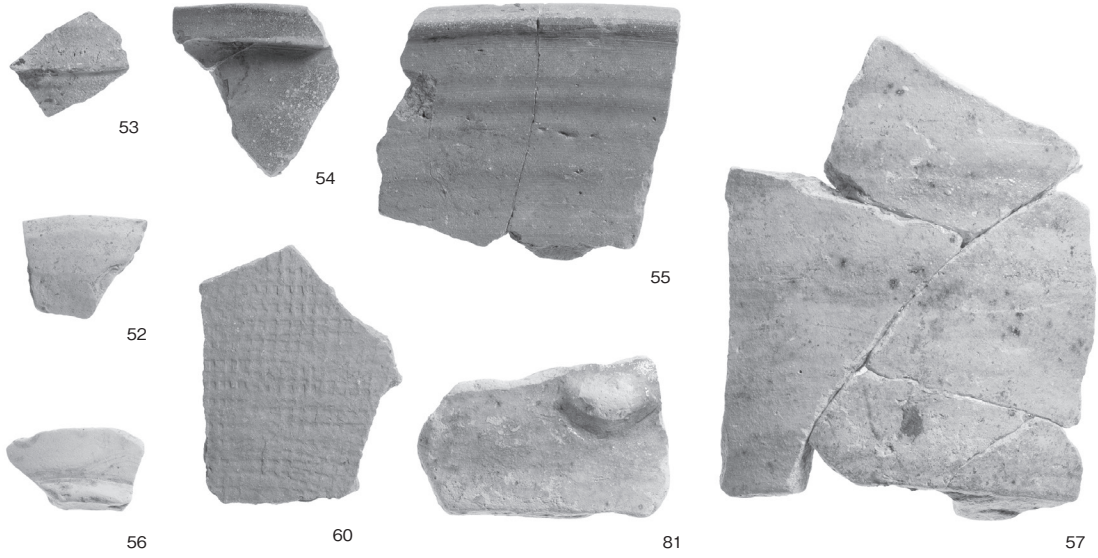


1. 溝01下層 (17)

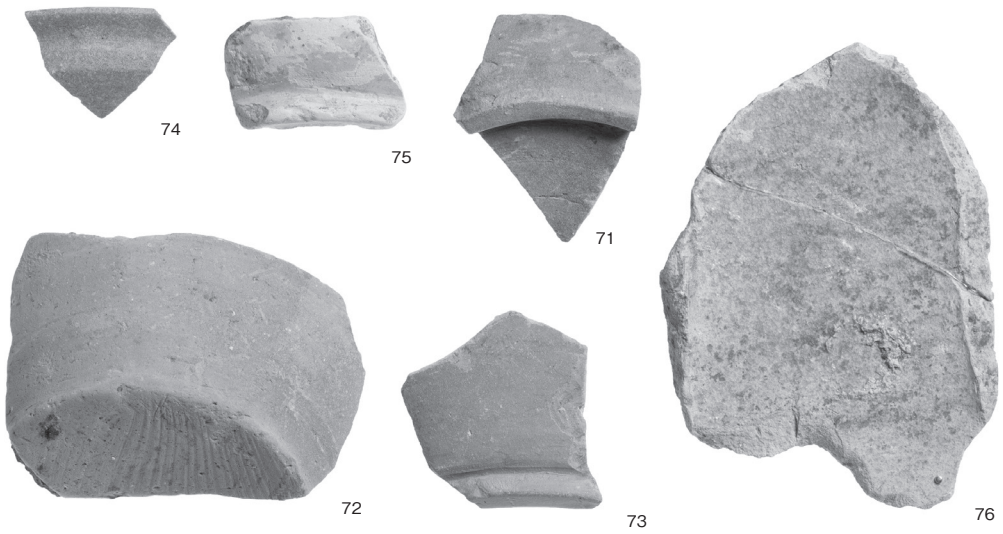


2. 溝01上層 (32 · 33 · 45 · 47 · 48 · 49)



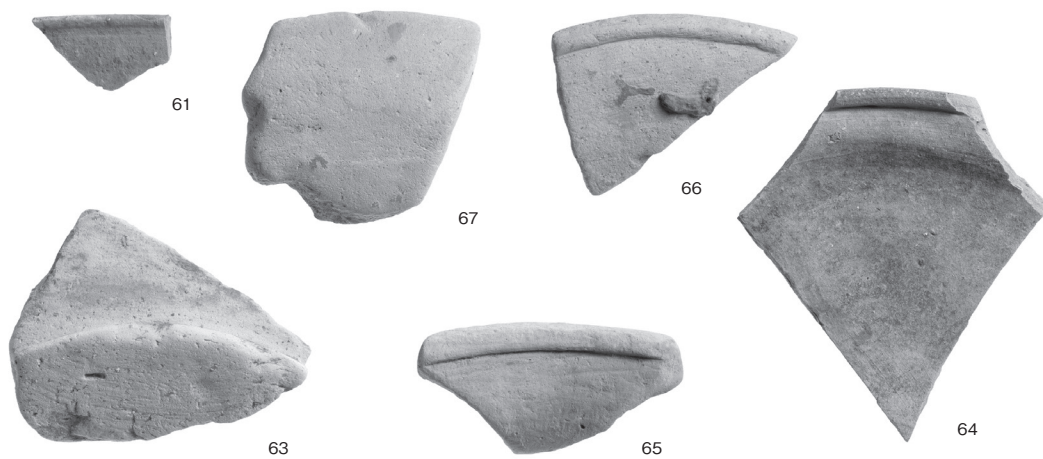


1. 溝01上面 (52·53·54·55·56·57)、溝02 (60)、包含層 (81)



2. 路面27 (71·72·73·74·75·76)

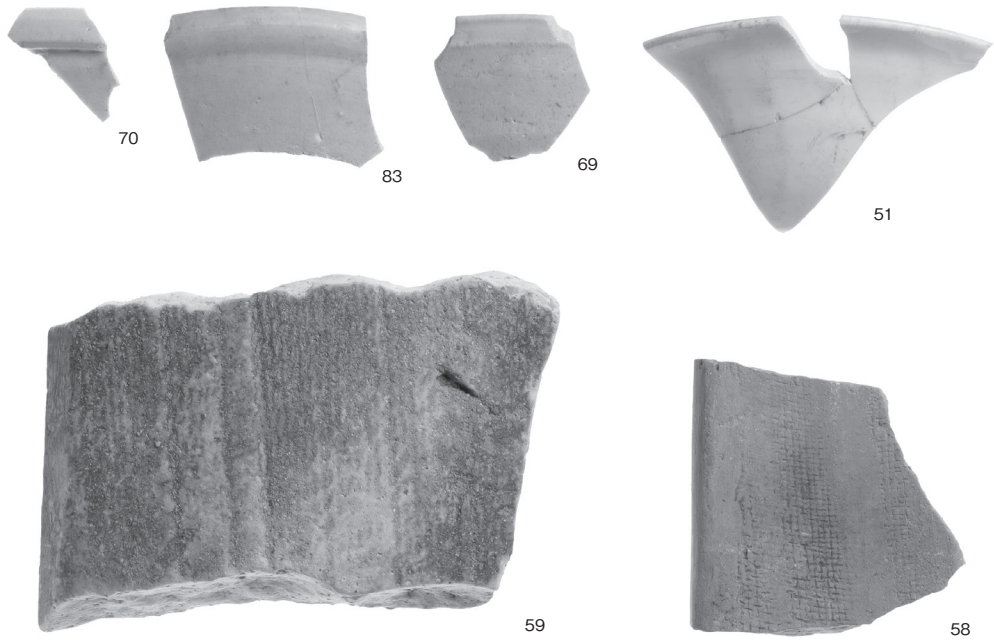




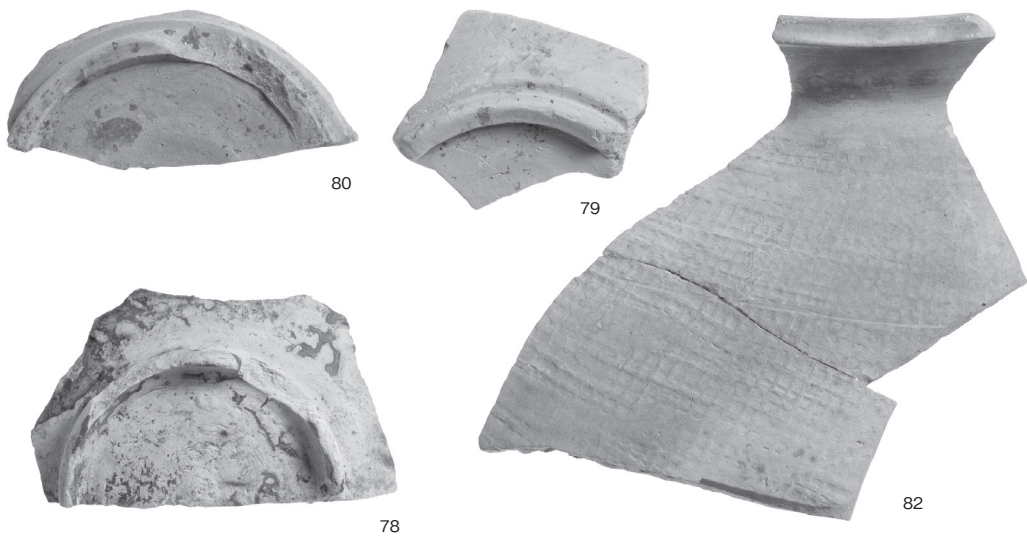
1. 溝03 (61)、溝04 (63·64·65·66·67)



2. 溝04 (62)



1. 溝01下層 (58)、溝01上層 (51·59)、路面27 (69·70)、包含層 (83)



2. 包含層 (78·79·80·82)

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうさんぼういっちょうあと・さいいんいせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	山内伸浩 野地ますみ							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2021年5月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょうろくじょうさんぼういっちょうあと 平安京右京六条三坊一町跡 西院遺跡	きょうとうしうきょうく 京都市右京区 さいいんにしごとみきちやう 西院西寿町 21番、21番1 21番2、21番4 22番1	26100	1  930	34度 59分 51秒	135度 43分 45秒	2021年 1月29日 ～ 2021年 3月3日	180㎡	マンション建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京六条三坊一町跡 西院遺跡	都城 集落跡	平安時代	路面（樋口小路） 樋口小路南北側溝 築地内溝 耕作溝	土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 黒色土器 中国磁器 瓦 土馬	平安京の樋口小路の路面、南北両側溝、築地の内溝など良好な平安前期の遺構を検出した。南側溝の埋土、出土遺物の分析から、これらの条坊遺構は9世紀初めには造られ、9世紀末～10世紀初め頃には溝の埋没により、徐々に機能を失っていったことが推定された。また10～11世紀以降には路面が巷所化したことを物語る耕作溝群も検出された。 西院遺跡に関する遺構、遺物については殆ど確認できなかった。			

文化財サービス発掘調査報告書第16集

平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡  
発掘調査報告書

発行日 2021年5月31日

株式会社 文化財サービス  
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58  
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社  
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る  
TEL 075-256-0961